

早風遺跡 ほか

序 文

新たな世紀を迎え、ゆとりや豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模なほ場整備などの各種開発事業も年を追うごとに増加しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、開発関係機関などと十分な協議・調整を重ねたうえで調査することとなったもののうち、平成18年度に当教育委員会が国庫補助金を得て、学術的に重要な遺跡について行った発掘調査成果と、開発工事に先立って事前調査及び確認調査を実施した遺跡の成果を収録したものです。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成19年3月

宮城県教育委員会

教育長 佐々木 義 昭

例　　言

1. 本書は、宮城県が平成18年度の国庫補助金を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当した公共事業等に係わる発掘調査報告書である。
2. 各遺跡の発掘調査から調査報告書に至る一連の作業は、遺跡の重要性から保存を前提として遺跡の性格や構成を把握することを目的として文化財保護課が行ったほか、調査原因となった開発行為に関わる機関の依頼を受けて文化財保護課が行ったものである。
3. 各遺跡の保存協議や発掘調査に当たっては、開発関係部局や地元教育委員会から多大な協力をいただいた。
4. 各遺跡の位置図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000の地形図を複製して使用した。
5. 各遺跡の測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
6. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。

S I : 壴穴住居跡	S F : 土壙跡	S D : 堀跡・溝跡	S K : 土壙	S X : 積土、その他
-------------	-----------	-------------	----------	--------------
7. 土色の記述にあたっては、「新版 標準土色帖 1994年版」(小山・竹原 1994)を用いている。
8. 早風遺跡の報告で使用した図版1—1の空中写真は、「国土画像情報（昭和50年撮影カラー空中写真：CTO-75-27-C8a-10）国土交通省」を一部加工して転載、また、図版1—2は宮城県多賀城跡調査研究所が平成4年に撮影した空中写真を借用して使用したものである。
9. 本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て下記のものが執筆・編集した。

平成18年度発掘調査の概要	佐藤則之			
早風遺跡	田川八幡館跡	佐久間光平	雄島遺跡	生田和宏
上野目焼窯跡	丸森山遺跡	菊地逸夫	町頭塚	須田良平
袖野田遺跡	三ヶ森遺跡	柳澤和明	小沢口古墳	石黒伸一郎（村田町教育委員会）
10. 本遺跡の調査成果については、現地説明会や宮城県遺跡調査成果発表会などでその内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。
11. 発掘調査の記録や出土遺物は、上野目焼窯跡（大崎市教育委員会）・小沢口古墳（村田町教育委員会）を除き、宮城県教育委員会が保管している。

目　　次

平成18年度 発掘調査の概要

早風遺跡	1
田川八幡館跡	39
上野目焼窯跡	47
雄島遺跡	63
袖野田遺跡	77
三ヶ森遺跡	81
町頭塚	85
丸森山遺跡	93
小沢口古墳	101
報告書抄録	

平成18年度発掘調査の概要

平成18年度の埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金（総事業費3,668千円、補助率1/2）による調査は、加美町早風遺跡（東山官衙遺跡周辺地区）と同川八幡館跡、塙竈市袖野田遺跡、富谷町三ヶ森遺跡、本吉町町頭塚跡について実施した。以下にはそれぞれの調査の概要を記す。なお、村田町が主体となって実施した小沢口古墳と昨年度に実施した登米市丸森山遺跡、松島町雄島遺跡、一昨年度に実施した大崎市（当時は岩出山町）上野目焼窯跡についても掲載している。

早風遺跡は、国指定史跡である東山官衙遺跡の北・東側の丘陵上に立地する。大規模な土壘状の高まりや堀状のくぼみが残っていることが判明しており、昨年度の調査で古代の土壘と空堀であることが明らかになった。今年度は、それらの延長を確かめるために、2ヶ所の調査区を設定した。その結果、いずれでも古代の土壘・空堀を確認し、東山官衙遺跡の東側では、丘陵の北縁を東へ延びるものと、丘陵の中央を沢に沿って南へ延びるものとの2条が存在することが明らかになった。

同川八幡館跡は中世の館跡とされている。寺院の建物建築や墓地造成で遺跡が壊されていたため、遺構の確認調査を実施した。その結果、土壘と空堀を検出したが、年代は確定できなかった。

三ヶ森遺跡は、古墳・平安時代・中世・近世の集落跡である。個人住宅を建て替えるため予定地を確認調査したところ、古代の掘立柱建物が検出され、官衙関連遺跡の可能性が考えられた。

袖野田遺跡は、多賀城跡の東側の丘陵に所在する古代・中世・近世の集落跡である。共同住宅を建築するため予定地を確認調査し、古代の遺物包含層を検出した。

町頭塚跡は、中央に天正9年の供養碑が建てられている方形の供養塚である。近年、この碑が大きく傾いてきたため、碑を元に戻す前に周辺を掘り下げたところ、埋納された経筒が出土した。経筒には碑の供養者と同じ名前が記されており、追善供養のために埋納されたと考えられた。

小沢口古墳は、村田盆地東側の丘陵端部に立地する古墳で、新発見の古墳である。住宅裏山の崖際で石室が発見され、崩壊の危険があるため、発掘調査を実施した。刀子と鉄製品が副葬されており、石室の構築方法が明らかになった。

丸森山遺跡は、丘陵上に立地する縄文時代の遺跡で、過去には多量の縄文土器・石器が採集されていた。薦舎建築のために確認調査を実施し、縄文中期の土器や石器などを多く含む包含層を検出した。

雄島遺跡は、松島湾にある靈場として著名な雄島にある遺跡で、自然の浸食によって遺構が露出してしまったため、遺構保存のための確認調査を実施したもので、板碑の据え穴や火葬骨埋納遺構を検出した。調査区周辺は、瑞巖寺の全面的な協力により砂で埋め戻され、保存されている。

上野目焼窯跡は、江戸時代後期から明治時代初期に活動した陶器窯で、下水管埋設に伴って、確認調査を実施した。多量の破片が出土し、大堀相馬焼との密接な関連が裏付けられた。

これらのうち、三ヶ森遺跡と袖野田遺跡、丸森山遺跡は、事業者の協力を得て計画が変更され、遺跡は保存されている。

この他、富谷町奈良木沢遺跡 大衡村大衡城跡・平林遺跡 美里町谷陽院遺跡 松島町西ノ浜貝塚七ヶ宿町湯原館跡で確認調査を実施したが、遺構・遺物は発見されなかった。

宮城県全図



はや かぜ
早 風 遺 跡

目 次

第Ⅰ章 はじめに.....	3
第Ⅱ章 発掘調査.....	8
1. 調査の目的	8
2. 調査の方法と経過	8
3. 各地点の調査	11
(1) d 地点	11
(2) n 地点	17
第Ⅲ章 理化学的分析.....	20
第Ⅳ章 考 察.....	24

引用・参考文献

写真図版

調査要項

遺跡名：早風遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：30036 遺跡記号：FO）

所在地：宮城県加美郡加美町鳥屋ヶ崎字山畑中、深沢平

調査原因：重要遺跡確認

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

佐藤則之 須田良平

佐久間光平 西村 力 千葉直樹

調査期間：平成18年5月15日～6月13日

調査面積：64m² (d 地点：44m² n 地点：20m²)

調査指導・協力：文化庁 宮城県多賀城跡調査研究所 東北歴史博物館

加美町教育委員会 加美町農村環境改善センター

板垣栄悦 板垣 博 板垣文雄 伊藤多利衛 鈴木 勝 ほか（敬称略）

第Ⅰ章 はじめに

1. 早風遺跡の概要

早風遺跡は、宮城県北西部の加美郡加美町鳥嶋・鳥屋ヶ崎地区に所在する。県北の大崎平野の西端に位置し、奥羽山脈から分岐して南東に延びる標高70m～90mほどの丘陵上に立地する。古代陸奥国賀美郡家と推定される「国史跡 東山官衙遺跡」に隣接し、その北～東側区域を取り巻くように広がっている（第1図）。

本遺跡では、1979年度に東山官衙遺跡と沢をはさんだ東側丘陵部に立地する地点（第3図）の調査が行われ、奈良・平安時代の竪穴住居跡25軒（調査は13軒）や平安時代以降の掘立柱建物跡6棟などが検出されている（宮崎町教育委員会 1980）。当初、早風遺跡の範囲はこの調査地点を含めた丘陵部のみに限定されていたが、調査した竪穴住居跡の年代などから、東山官衙遺跡とは密接に関連する集落跡とみられていた。

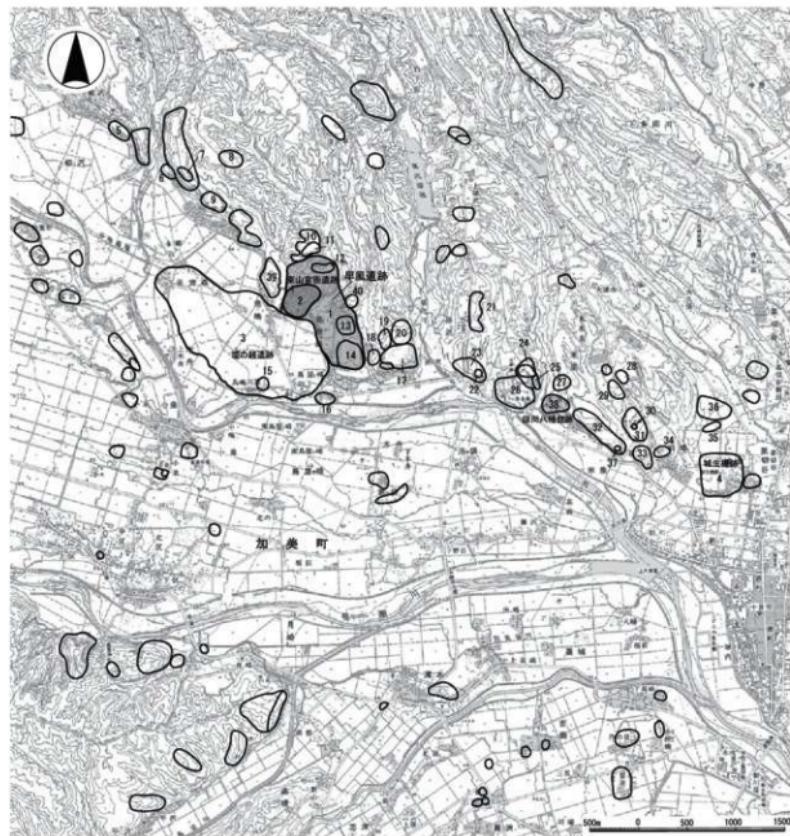
その後2005年度に、遺跡周辺の丘陵部に分布する“土壘状の高まり”と“堀状のくぼみ”を対象とした分布調査や発掘調査が実施され、これらは東山官衙遺跡の周囲を巡る大規模な外郭区画施設であることが判明した（第3図・第4図）（宮城県教育委員会 2006b）。これらの調査結果を受けて、また、周辺の地形などを考慮して、すでに周知されていた早風遺跡の範囲を大きく拡大することになった（第1図）。

現在、遺跡は東山官衙遺跡周辺の丘陵地に広がっており、その範囲は東西約600m、南北約1.2kmに及ぶ。現況は雑木林や杉林であり、旧地形は概ね良好に保たれている。

2. 東山官衙遺跡・壇の越遺跡について

東山官衙遺跡は、昭和61年から平成4年まで宮城県多賀城跡調査研究所によって7次にわたる発掘調査が行なわれ、その後、平成5年～平成9年まで旧宮崎町教育委員会が8次～12次まで継続して調査を実施した。その結果、この遺跡は8世紀前半から10世紀中ごろまで存続した古代陸奥国賀美郡家であることが判明した（第2図）（宮崎町教育委員会 1998）。また、以下のような点が明らかになった（前掲報告書より抜粋・一部要約）。

- ①官衙の周囲（台地縁辺）を築地塀で区画しており、台地を東西に二分する谷の入り口には南門（八脚門）がある。
- ②南門の立地する小さな谷の北延長線上には幅約3m・深さ1.4mの南北方向の大溝があり、官衙を東と西に明瞭に二分している。
- ③大溝の東側には郡庁院や館院のはか、厨房などの実務官衙が置かれていたと考えられる。郡庁院は8世紀末頃から10世紀初頭頃までおおよそ三度の建て替えが認められる。周囲を掘立式の塀が巡っており、規模は東西57m・南北52mで、東西にやや長い正方形をしている。郡庁院を構成する建物には、正殿、東西の脇殿、正殿東建物がある。建物配置は正殿を中心として「コ」字状をなし、これらの建物に囲まれた区域は一辺約38mの正方形の広場を形成している。



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	早風遺跡	丘陵	官衙・集落	圓文中期・晚、古墳・奈良・平安	21	深坂原御遺跡	丘陵斜面	散布地	圓文中期・晚、弘生・古墳・奈良・平安
2	因幡櫛・東山宮跡	丘陵裏	官衙・城館	古墳後・奈良・平成・中世	22	鬼塚原御遺跡	丘陵裏	散布地	圓文早・中期・後、弘生・古代
3	權ノ城道跡	段丘	集落	圓文・奈生・古墳・奈良・平安・近世	23	鬼塚原御跡	丘陵斜面	内里・城館	古墳？ 中世
4	因幡櫛・城牛御跡	丘陵	官衙・集落	圓文中期・晚、奈良・平安・中世	24	金之山古墳群	丘陵	円墳・横穴墓	古墳後
5	柳沢遺跡	丘陵裏	散布地	古代	25	毛利前田の森穴基跡	丘陵斜面	横穴墓	古墳後
6	長谷木道跡	丘陵	散布地	古代	26	米原御跡	丘陵	古墳・城館	古墳後・中世
7	上野遺跡	丘陵	散布地	圓文前・中・晚、古代	27	古原御跡	丘陵斜面	散布地	圓文前・中・晚、弘生・古代
8	兵村寺守遺跡	丘陵	散布地	圓文中期・晚、奈生・古墳・奈良・平安	28	町史跡 黒石古墳群	丘陵	古墳	古墳後
9	片ノ森遺跡	丘陵	散布地	圓文早・中・晚、佐生・古墳？・古墳	29	三井平遺跡	丘陵	散布地	圓文早・中・晚、佐生・古墳？・古代
10	鳥谷・森古墳群	丘陵尾根	方墳	古墳後	30	奥森(大森森)古墳	丘陵	円墳	古墳前
11	古船遺跡	丘陵	散布地	圓文・古墳・奈良・平安	31	小原乳頭跡	丘陵	散布地	圓文早？・晚、弘生・古墳・奈良・平安
12	鳥谷・森遺跡	丘陵	散布地	圓文・古代	32	米原古墳群	丘陵斜面	古墳	古墳中
13	愛宕山古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳後	33	玉泉遺跡	丘陵	散布地	古代
14	上山の城跡	丘陵斜面	散布地	古墳・奈良	34	日向遺跡	丘陵	散布地	古代
15	行人古墳群	段丘	古墳	古墳中	35	御所八幡跡	丘陵裏	散布地	古代
16	尾山門堂遺跡	段丘	散在地	圓文中期・晚、古代	36	毛利～江戸時代初期	丘陵	円墳・散布地	古墳後・古代
17	丹波川城跡	丘陵斜面	散布地・城址	圓文・中世	37	大森山古墳	丘陵斜面	古墳	古墳中
18	埋の山遺跡	丘陵斜面	散布地	圓文前・中	38	田原八幡跡	丘陵	城館	中世
19	上の原下遺跡	丘陵斜面	散布地	圓文早・中・晚、奈良・平安	39	馬頭船跡	丘陵	城館	中世
20	孫ノ沢の原遺跡	丘陵斜面	散布地	圓文時・弘生・古墳・古代	40	三吉ヶ丘たご遺跡	丘陵	散布地	圓文

第1図 早風遺跡・東山宮跡および周辺域の遺跡

④大溝の西側の倉庫院は、南側には計画的に配置された倉庫群、その北側には多数の掘立式建物群が存在する。倉庫跡からは火災を受けた多量の炭化米が発見されている。

このように遺跡の規模や構造が明らかとなり、遺跡の保存状態も良好なことから、平成11年には国史跡に指定されている。

壇の越遺跡は東山官衙遺跡が立地する丘陵の南方に広がる河岸段丘面上にあり（第4図）、平成8年度からの県営は場整備事業などによる継続調査（現在も調査中）によって大きな成果が上げられている。これまでの調査では、①東山官衙遺跡の外郭南門から南に延びる南北大路を基準として、路心間の距離を1町とした計画的な地割りに基づいて造られていること、②南北・東西道路による方格地割りの成立は8世紀前半頃に遡る可能性があること、③8世紀後葉頃以降には、方格地割内の上位段丘面縁辺部に沿って築地塀・材木塀・門、櫓で構成される大規模な区画施設が造営されること、④方格地割内には、材木塀、溝によって区画された有力者の屋敷とみられる一角があること、などが判明している（加美町教育委員会 2005a、宮城県教育委員会 2005ほか）。また、平成18年度の調査では、東山官衙遺跡の南正面にある南北大路と南2道路の交差点部分に門（八脚門もしくは楼門）が設置され、さらにこの門から東西方向に南2道路北側大溝と平行して材木塀が延びていることが分かった（加美町教育委員会 2007）。こうした長年の調査で、壇の越遺跡は東山官衙遺跡と一緒に遺跡であることが明確になってきただけでなく、極めて重要な遺跡であることが明らかとなり、その成果は全国的にも大きな注目を集めている。



（宮崎町教育委員会 1998に加筆）

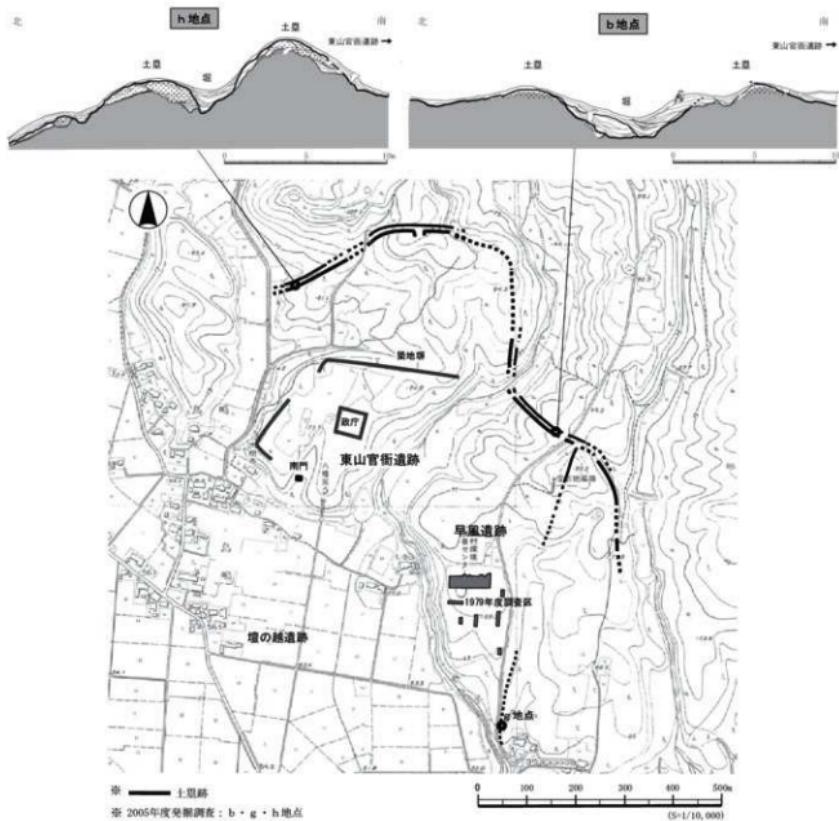
第2図 東山官衙遺跡全体図 (S=1/4,000)



a地点 (東から)



b地点 (東から)



第3図 早風遺跡の土壘・堤跡 (2005年度調査)

3. 周辺域の遺跡について

早風遺跡・東山官衙遺跡の位置する大崎平野の北側の丘陵上には数多くの遺跡が分布している。特に古代には、律令国家の政治・軍事の拠点として城柵・官衙が多く造営されており、東から大崎市(旧田尻町)新田柵跡、大崎市(旧古川市)宮沢遺跡(国史跡)、同市名生館官衙遺跡(国史跡:丹取郡家・玉造郡家)、加美町城生柵跡(国史跡)などが知られている。城生柵跡は、当初、東山官衙遺跡とともに同じく陸奥国賀美郡に属していたとみられるが、当遺跡からは東方へ約5kmの地点(第1図-4)に位置している。

早風遺跡が立地する近辺の丘陵上には、上の山遺跡(14)、鳥谷ヶ森遺跡(12)などの古代に属する遺跡がある。昨年度に早風遺跡の範囲を拡大したことでの、両遺跡とも早風遺跡の範囲に含まれている。いずれも未調査遺跡ではあるものの、東山官衙遺跡とは密接に関連する遺跡と考えられる。早風遺跡の北側にある、古代の遺物が散布する古館遺跡(11)も同様に東山官衙遺跡と関わりを持つ遺跡であろう。

また、東山官衙遺跡や東方の城生柵跡周辺の丘陵上には、通称“女貝塚”^{おながい}と言われる「空堀状遺構」と「土壘」が分布することが以前から知られている。今回の一連の調査の契機ともなった遺構であるが、昭和45年に地元の研究者である板垣剛夫氏が作成した分布図(宮崎町史編纂委員会 1973)には、東方の城生柵跡付近を中心として東山官衙遺跡方面へも延びる“空堀・土壘”とみられるラインが東西方向に複数記載されている。これらは東山官衙遺跡や城生柵跡との関連からとくに注目されるものである。

第Ⅲ章 発掘調査

1. 調査の目的

すでに述べたように、昨年度、宮城県教育委員会では東山官衙遺跡周辺の丘陵地（早風遺跡）に分布する“土壘状の高まり”や“堀状のくぼみ”についてその所属時期、構造・性格などを明らかにするため、周辺域の踏査を行うとともに、3地点（b・g・h地点）において発掘調査を実施した（第3図）。この調査の結果、b・h地点では大規模な2条の土壘跡と1条の堀跡が確認され、その規模や構造が明らかになっただけでなく、時期的にはいずれも古代に属することが判明した。また、これらの土壘・堀跡は、少なくとも総長1.2kmにわたって東山官衙遺跡を取り囲むように不整形に巡っていることも分かった。その全体の規模や位置関係などから、これらが東山官衙遺跡の外郭区画施設として機能していたことが明確になった（宮城県教育委員会 2006b）。

こうした結果を踏まえて、今回は昨年度調査地点のさらに東側の2地点（d・n地点）において発掘調査を実施することにした（第4図）。n地点は現状で土壘状高まりが確認できる地点の東端部にあたる。また、d地点は外側の土壘・堀跡のライン（h-b-n地点）からは分岐して南へ延びる地点になる。両地点の調査とも、昨年と同様に、その構築時期や規模・構造、性格などの解明を目的としている。

2. 調査の方法と経過

発掘調査は平成18年5月15日から開始した。2地点（d・n地点）のうち、まず、d地点の調査から着手した。d地点は昨年調査したb地点からは約100mほど南へ離れた丘陵尾根上にある。現状では1条の土壘状の高まりが南北方向に長さ50～60m（高さ1～1.5m）ほど確認できるが、堀状のくぼみは確認できない。調査区は、高まりが確認できる北端部から南へ30mほど下った地点に設置した。調査地点は杉林であることから調査区の設定は限定されたが、高まりを横断するように東西方向に幅2m（部分的に幅1m）のトレーナーを設定した。調査区の長さは当初15mであったが、西・東端ともその後延長し、最終的には29mほどになった。調査面積は44m²である。調査の結果、土壘状の高まりは古代の土壘跡であること、土壘跡の東辺側には堀跡（灰白色火山灰を含む）があることなどを確認した（写真1）。さらに、土壘跡西側には8世紀後半頃とみられる竪穴住居跡が2～3軒重複して分布することが分かった。土壘跡については、部分的に断ち割りを行った。

d地点の調査の後半からはn地点の調査を並行して行った。この地点は、昨年調査のb地点からは120mほど東側になる。現況は杉林であるが、現状でも丘陵の尾根に沿って1条の土壘状の高まりが長さ80m（高さ1m）ほど確認できる。この高まりに沿う堀状のくぼみは確認できないものの、東斜面側には幅1～2mほどの段状の狭い平坦面が認められる。調査区は、土壘状の高まりとこの狭い平坦面を東西に横断するように幅2m（部分的に1m）×長さ11.5mのトレーナーを設定した。調査面積は約20m²である。d地点と同様に限られた範囲での調査であったが、調査の結果、土壘状の高まりは古代の土壘跡であること、東側斜面の平坦面には堀跡（灰白色火山灰を含む）があることなどを確認



第4図 早風遺跡・東山官衙遺跡と調査地点

した。土壘跡については、最終段階で部分的に断ち割りを行った。

d・n地点とも遺構の精査・記録は6月上旬には終了し、その後両地点の埋め戻しを行い、6月13日には一連の調査を終了した。なお、6月3日（土）には地元を対象とした現地説明会（写真2）を開催（参加者約50名）、6月8日（木）には文化庁の坂井主任調査官の視察があった。

2地点の発掘調査時の調査区や遺構の平面図作成にあたっては電子平板を使用し、断面図については縮尺=1/20で作成した。平面図の作成にあたっての基準点（世界測地系にもとづく）は以下の通りである。

d 地点	BMd 7 : X = - 155,642.769	Y = - 2,179.528
	BMd 9 : X = - 155,621.873	Y = - 2,202.511
n 地点	BMn13 : X = - 155,662.544	Y = - 2,108.593
	BMn14 : X = - 155,656.046	Y = - 2,117.216

また、写真撮影には6×7モノクロフィルム・カラー・リバーサルフィルム、35mmモノクロフィルム、デジタルカメラ（1000万画素）を使用した。



写真1 d地点の土壘・堀跡



写真2 現地説明会（6月3日）

3. 各地点の調査

(1) d 地点

1) 現況と調査区

当地点は、東山官衙遺跡に隣接する東側の丘陵尾根頂部から緩斜面上にある。昨年度調査した b 地点と今回調査した n 地点とを結んだラインからは分岐するような位置関係になるが、接点付近には林道や“大穴”^(注1)があり、現状では両者の関係は把握できない。

現況は杉林であるが、南北方向に延びる総長50mほどどの1条の土壘状の高まりが明瞭に認められる。土壘状の高まりは1.0～20mほどどの高さがある。これに沿った“堀状のくぼみ”は確認できないものの、土壘状高まりの東側は西側よりも一段低く、狭い平坦面が形成されている（写真3）。

土壘状の高まりの北端部は林道によって切られ、その先には大穴があり不明になる。南端部は緩斜面にそって高さを減じていき、高まりは徐々に不鮮明になる。ただ、その延長線上には高さ50cm～1mほどの段が形成されている（第4図）。

調査区は、高まりの北端部から南へ30mほど下った地点に東西方向に設定した。幅2m（部分的に1m）×長さ29mである。なお、調査では遺構（土壘跡）の断ち割りを部分的に行った。



写真3 d 地点の状況（東から）

註1 径10～15m、深さ4～5mほどの円形状の大きな凹地で、この付近では3基みられる。i地点の土壘跡の北側にもあり、近辺の丘陵上にはいくつか点在するようである。東山官衙遺跡の西北隅にも東西約15m、南北約25m、深さ約4.5mの「穴倉」と称される凹地がある。当地点の“大穴”は土壘・堀跡を壊していることから、時期的には後世のものと考えられる。

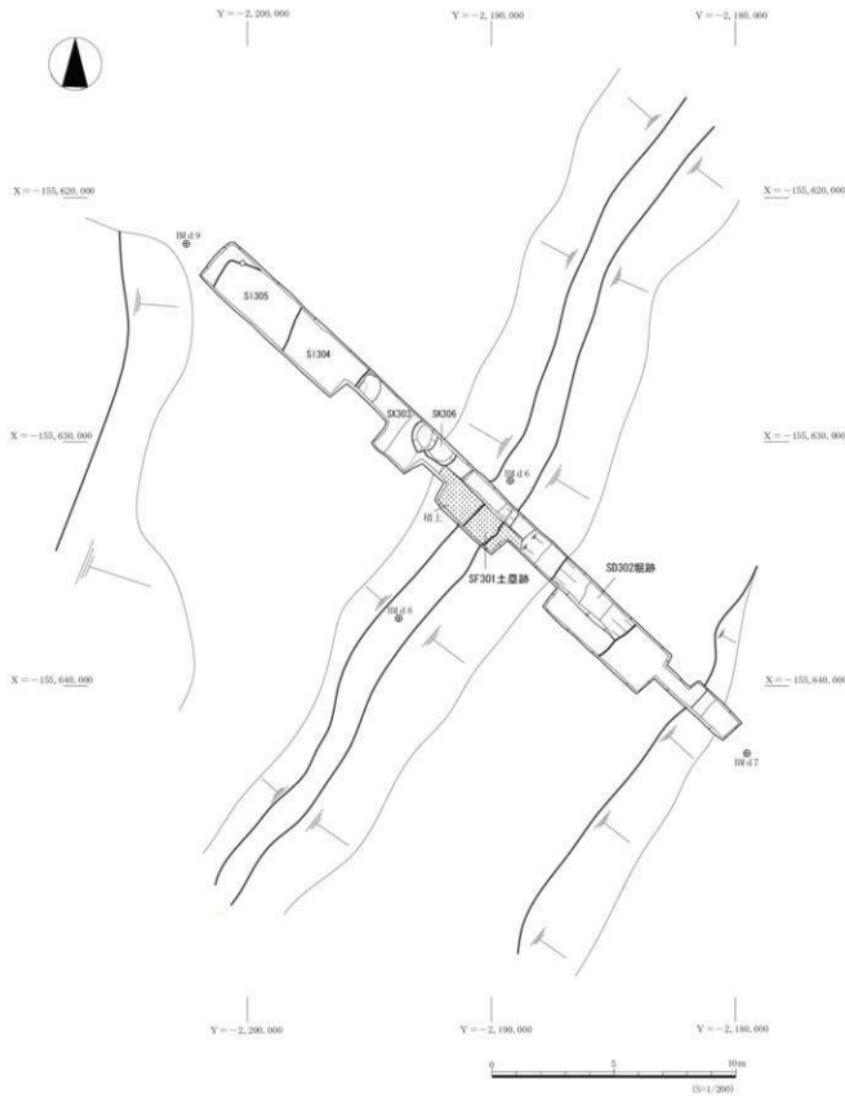
2) 検出遺構と遺物

土壘跡1条、堀跡1条、竪穴住居跡2軒（もしくは3軒）、土壤1基などを検出した（第5図・第6図）。また、遺物は古代の土師器・須恵器、鉄釘、すり石、縄文時代の土器・石器などが少量（コンテナ1箱分）出土した。

①土壘跡

【SF301 (SK306を含む)】南北方向に延びる土壘跡である。西裾部のSK306は土壘構築時のものと考えられる。SX303（竪穴住居跡の一部か）よりは新しい。東側のSD302堀跡との境は後世に若干削平されている。

土壘の規模は、基底幅が約7.0m、残存高は約1.0mである。土壘の西斜面は比較的緩やかであるが、東斜面はやや急角度で立ち上がっている。土壘は基底部を溝状（幅2.4m・深さ0.8m）に掘りくぼめ、地山の黄褐色土ブロックを多く含む層と黒褐色土を含む層を縞状に積み上げて土壘の高まりを構築し



第5図 d地点調査区と遺構全体図

ている。土壘の修復（積み直し）などは認められなかった。

土壘西裾部には土壘構築時の土取り穴と推定されるやや不整形なSK306土壙がある。深さが30～40cmほどあり、堆積土下部は黒褐色～褐色土（黄褐色土ブロックを含む）の人为的埋土で、その上面は硬化している。上部（やや窪んでいる）には黄褐色土小ブロックを多く含んだ土壘崩落土が堆積している。

遺物は、土壘積土から土師器壺・甕の小片、須恵器壺・甕の小片、縄文土器片・石器（剥片）など、土壘崩落土から土師器甕（第7図-1）、須恵器壺・甕（第7図-2）の破片、鉄釘（第7図-3）、縄文土器片・石器がそれぞれ少量出土している。

②堀跡

【SD302】SF301土壘跡の東側にある。堀跡の東側（土壘の反対側）は、狭い平坦面から徐々に東へ高度を下げる緩斜面になる。

堀の残存する規模は上幅4.2m・底面幅1.0～1.2mで、断面形はおおむねU字状を呈する。堀底面とSF301土壘頂部の比高差は約3.0mである。構築時には、基盤の柳沢火砕流（凝灰岩礫を多く含む黄褐色砂質シルトなど）を掘り込んでいる。掘り返しなどは認められなかった。

堆積土は上部が黒褐色～暗褐色シルト、下部が凝灰岩小礫などを含む暗褐色～にぶい黄褐色シルトなどを主体としている。中位の黒褐色土下部には“灰白色火山灰層”が薄く認められる。いずれも自然堆積土である。

遺物は堆積土の下部（6～8層）から土師器・須恵器甕の小片、縄文土器片などが数点出土したのみである。

③豎穴住居跡

【SI304・SI305】SF301土壘の西側で検出された。いずれも平面のみの確認であるが、SI305がSI304よりも古く、SI304はSX303よりも古いとみられる。堆積土（検出面）は両者とも黒褐色シルト主体で黄褐色土ブロックが不均質に多く含まれており、炭化物や焼土粒なども目立つ。検出時には堆積土上面から、SI304では土師器壺・甕、須恵器壺（第7図-6）・甕・壺などの破片、SI305では土師器壺（第7図-7）・甕の小片などが少量出土した。6の須恵器壺は底部の切り離しがヘラ切り・無調整である。土師器はいずれも非ロクロ調整である。

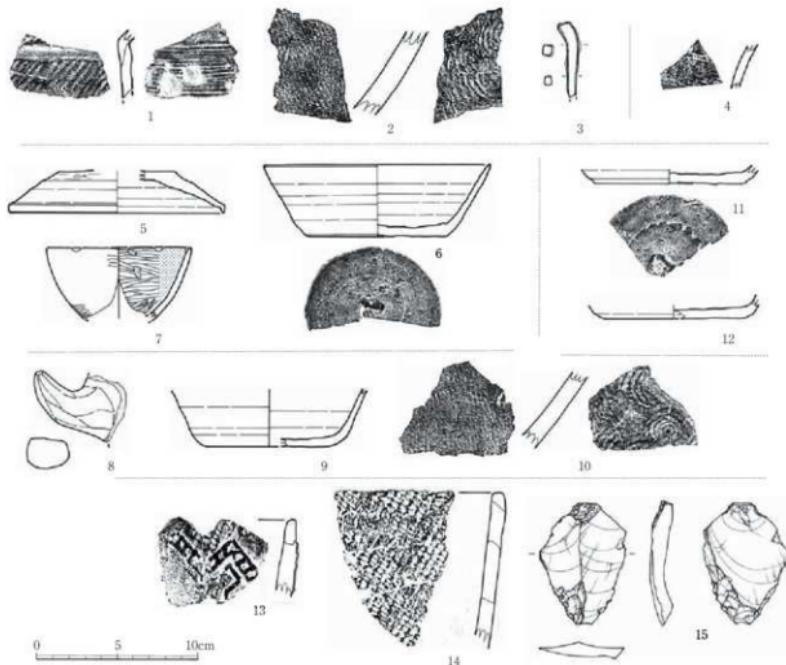
④その他

【SX303】SF301土壘の西裾部で検出された。土壘構築時の土取り痕とみられるSK306と一連かもしれないSK306（土壘構築時）の直前にあった豎穴住居跡の一部とみられる。SI304住居跡よりは新しい。調査区が狭く掘り下げも行っていないので詳細は不明である。4層上面は硬くしまっており、炭化物粒や焼土粒なども目立つ。

なお、この付近の上部にのみ黒褐色土や灰白色火山灰・暗褐色土の自然堆積層が認められることから、この部分からSK306にかけては周間に比べて低く窪みになっていたことがわかる。

遺物は4層上面から土師器甕・須恵器蓋（第7図-5）・甕の破片が少量、他にすり石などが出土している。土師器は非ロクロ調整である。

【出土遺物】上記以外には、自然堆積層 I c・③から土師器壺・把手部（第7図-8）、須恵器壺（第7図-9）・高台壺・壺（第7図-10）、縄文土器片、表土層から土師器壺・壺、須恵器壺・壺、鉄滓、縄文土器片などが少量出土している。須恵器壺で底部の切り離しが分かるものはいずれもヘラ切り後軽くナデを施したものである。また、土師器にはロクロ調整のものが若干含まれるが、大半は非ロクロ調整である。



No.	器種	層位	残存 口径	底径 cm	高さ cm	特徴	写真番号	登錄
1	土師器 壺	上層部灰土	小片	-	-	外面：平行タテキ→ロクロナデ 内面：削輪ハケイモサス痕あり	③-①	7
2	土師器 壺	*	小片	-	-	外面：(削)平行タテキ 内面：アマ貝痕(同心四文)	②	6
3	鉢	*	-	-	-	-	③	全く
4	須恵器 壺	SD302 埋	瓶底片	-	-	外面：ロクロナデ→透狀況 内面：ロクロナデ	④	9
5	須恵器 壺	SX303 埋	1/3	(3.3)	-	つまみ部欠損 内外面：ロクロナデ→表面天部は削輪ハケイモ	⑤	1
6	須恵器 壺	SD304 埋	1/3	13.8	8.5	内外面：ロクロナデ 基部：削輪ハケイモナデ	⑥	2
7	土師器 壺	SD305 埋	1/5	0.89	-	外面：ヘラカギキ(削減) 内面：ヘラミガキ→黑色磨擦	⑦	3
8	土師器(把手)	-	把手部分	-	-	外面：オサニーナデ	⑧	5
9	土師器 壺	*	1/4	-	6.69	内外面：ロクロナデ 基部：削輪ハケイモナデ	⑨	4
10	土師器 壺	生土	小片	-	-	外面：(削)平行タテキ 内面：アマ貝痕(同心四文)	⑩	12
11	土師器 壺	表土	1/4	-	6.69	内外面：ロクロナデ 基部：削輪ハケイモナデ	⑪	8
12	土師器 壺	土上	1/6	-	6.69	内外面：ロクロナデ 基部：削輪ハケイモナデ	⑫	13
13	縄文土器 漆跡	SP301 灰土	口縁部分	大木4~大木5a式、鏡文II及かI+細い筋土跡刷り付けによる格子状文	-	-	⑬	圓
14	縄文土器 漆跡	3層	*	L	1.89	漆文(漆剥離)	⑭	圓
15	一次加工調作	表土	一部欠	直径	7.4cm	幅:5.3cm 厚:0.9cm	⑮	61

第7図 d 地点の出土遺物

(2) n 地点

1) 現況と調査区

当地点は、d 地点から120mほど東側に位置し、狭い丘陵尾根上に沿っている。現在は杉林になっているが、現状でも南北方向に延びる総長約80mの1条の土壠状の高まりが確認できる。土壠状の高まりは、高さが0.5~1.0mほどである。また、この土壠状の高まりの東側急斜面には幅1~3mほどの平坦面が形成されている（写真4）。

土壠状の高まりの北端部は、林道によって削平を受けておりその先は不明になる。ただ、昨年調査した b 地点とは地形的にみて接続するものと推定される（中間地点には3基の大穴（径10~15m・深さ4~5m）があり、地形が改変されている）。土壠状の高まりの南端部は、高さが徐々に失われてその先は不明瞭になる（第4図）。

調査区は、土壠状の高まりと東斜面側の平坦面を横断するように東西方向に幅2m（部分的に1m）×長さ11.5mで設定した。なお、調査では遺構（土壠跡）の断ち割りを部分的に行った。



写真4 n 地点の状況（東から）

2) 検出遺構と遺物

古代の土壠跡1条、堀跡1条、溝跡2条を確認した（第8図・第9図）。遺物は、表土層から土師器小片が1点出土したのみである。

①土壠跡

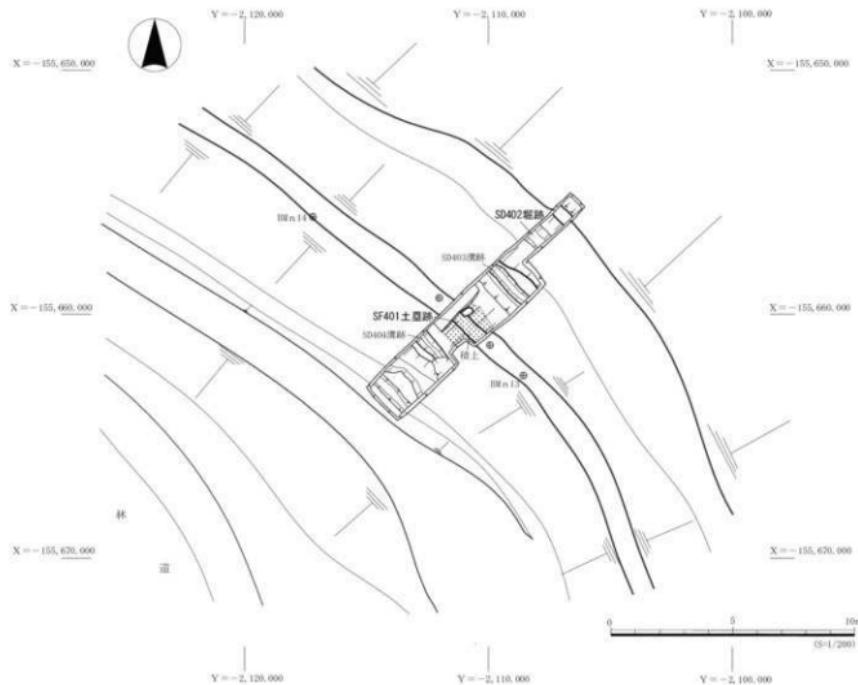
【SF401】土壠跡の東側裾部にはSD403溝跡があり、これに沿って若干削平を受けている。また、土壠跡の西斜面部にはSD404溝跡があり、裾部は溝状にやや崖んでいる。

土壠の規模は、基底幅が約5.0m、残存高は約1.5mである。土壠の西斜面は比較的緩やかであるが、東斜面側はやや急角度で立ち上がっている。土壠頂部では旧表土層の上に積土し、両斜面部は基盤の柳沢火碎流（頗大の凝灰岩礫が目立つ）まで削り込んでいる。積土は厚さ20~30cmほど残存するのみである。上部は地山小ブロックを含む褐色シルトを主体にした積土（a）、下部は凝灰岩小礫を含む褐色シルトを主体にした積土（b）である。土壠の修復（積み直し）などは認められない。

②堀跡

【SD402】SF401土壠跡の東側急斜面上にある。東壁側の上部は流出した可能性がある。残存する規模は上幅2.8~3.0m・底面幅0.2~0.4mで、断面形はおおむねU字状を呈する。堀底面は、SF401土壠頂部からは約3.0mの比高差がある。構築時には、基盤の柳沢火碎流（凝灰岩礫を多く含む黄褐色砂質シルトなど）を掘り込んでいる。

堆積土は上位が黒褐~暗褐色シルト、下位が凝灰岩小礫などを含む暗褐~にぶい黄褐色シルトなど



第8図 n地点調査区と遺構全体図

を主体とし、中位の黒色土下部には“灰白色火山灰層”が認められる。いずれも自然堆積土である。

③溝跡

【SD403】 SF401土壌跡の東辺縫部に沿って延びている。SD402堀跡との境には若干の平坦面が観察されるが、これは後世の削平によるものである。

残存する上幅は40~50cm、深さ20~30cmほどで、断面形は浅いU字形を呈する。

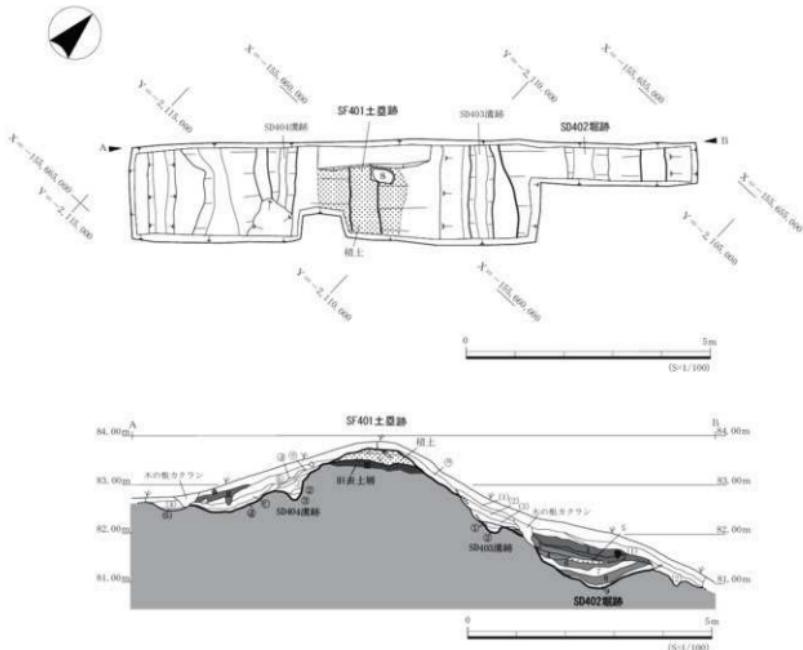
堆積土は、しまりのある褐色シルトを主体とする自然堆積土で構成されているが、上部には水成層とみられる灰黄褐色シルトや酸化鉄が薄く帯状に認められる。

【SD404】 SF401土壌跡の西斜面部にある。残存する上幅は50~60cm、深さ30cmほどで、断面形はU字形を呈する。壁面や底面には若干凹凸がある。

堆積土は、凝灰岩小礫や地山ブロックなどを多く含む褐色～ぶい黄褐色シルトを主体としており、しまりがある。これらは人為的な埋土の可能性もある。

④その他

【出土遺物】 表土層から土師器小片が1点出土したのみである。



層	上色	土性	備考
I 表土	暗褐色(DYR3-4)	シルト	木の根を少し。しまりなし。
II 黒褐色(DYR2-1)	シルト	腐灰岩小礫を若干含む。	
III 表表土	暗褐色(DYR3-4)	シルト	腐灰岩小礫(φ~1cm)を若干含む。しまりややあり。
(1) 後世の崩壊	暗褐色(DYR4-3)	シルト	
(2) 崩壊の崩壊	暗褐色(DYR4-3)	シルト	腐灰岩小礫(φ~1cm)を若干含む。しまりややあり。
(3) 崩壊の小礫	暗褐色(DYR4-4)	シルト	腐灰岩小礫(φ~1cm)・地山粒を若干含む。しまりややあり。
(4) 崩壊の小礫	暗褐色(DYR4-4)	シルト	腐灰岩小礫を若干含む。しまりなし。
(5) にふ・黄褐色(DYR4-2b)	砂質シルト	しまりなし。	
(6) にふ・黄褐色(DYR4-2b)	シルト	しまりなし。↓樹根。	
(7) SF401土壌 熟成土	暗褐色(DYR4-4)	砂質シルト	やや砂質。しまりなし。
(8) にふ・黄褐色(DYR4-2b)	シルト	腐灰岩小礫(φ~1cm)若干含む。しまりなし。	
(9) にふ・黄褐色(DYR4-2b)	シルト	腐灰岩小礫(φ~1cm)若干含む。しまりなし。	
SF401土壌種土 - a	暗褐色(DYR4-6)	シルト	地山粒を若干含む。しまりあり。
b	暗褐色(DYR4-4)	シルト	腐灰岩小礫(φ~1cm)を若干含む。しまりややあり。
SD402通跡 - 1	黒褐色(DYR3-1)	シルト	礫碎を少含む。Ⅲ層に対応。
2	黒褐色(DYR1-7)	シルト	比較的均質な黒色土。
3	黒褐色(DYR2-3)	シルト	砂を少含む。
4	暗褐色(DYR3-4)	シルト	地山粒を若干含む。
5	—	—	灰白色火成岩。
6	黒褐色(DYR3-1)	シルト	地山粒を若干含む。
7	暗褐色(DYR3-3)	シルト	腐灰岩小礫(φ~3cm)・地山粒を若干含む。
8	黒褐色(DYR3-2)	シルト	腐灰岩小礫(φ~1cm)・地山粒を若干含む。
9	にふ・黄褐色(DYR4-2b)	シルト	腐灰岩碎(φ~3cm)多く含む。地山粒若干含む。
SD403通跡 - 1	暗褐色(DYR4-4)	シルト	灰黄色シルトと酸化鉄を帯び。しまりあり細い。
2	暗褐色(DYR4-4)	シルト	腐灰岩小礫(φ~5mm)・地山粒を多く含む。しまりあり。
SD407通跡	暗褐色(DYR4-6)	シルト	腐灰岩碎(φ~3cm)多く含む。地山小ブロックを若干含む。しまりあり。
(2) にふ・黄褐色(DYR4-2b)	シルト	腐灰岩碎(φ~3cm)多く含む。地山小ブロックを若干含む。しまりあり。	
(3) にふ・黄褐色(DYR4-2b)	シルト	腐灰岩碎(φ~3cm)多く含む。地山小ブロックを若干含む。しまりあり。	

第9図 n 地点の遺構平・断面図

第III章 理化学的分析

早風遺跡 b 地点の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

東北地方中部に位置する宮城県域には、蔵王、鳴子、鬼首、肘折、十和田など東北地方の火山のはか、北海道や中部地方、さらには中国地方や九州地方などに分布する火山から噴出したテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が降灰している。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な火山灰層が検出された早風遺跡においても、発掘調査担当者により採取された試料を対象として、火山ガラス比分析、屈折率測定さらにEPMAによる火山ガラスの主成分化学組成分析を実施して指標テフラとの同定を行うことになった。調査分析の対象となった試料は、昨年度調査の b 地点 SD03B 灰白試料である。

2. 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

b 地点 SD03B 灰白試料に含まれる火山ガラスの色調形態別比率を明らかにするために、火山ガラス比分析を行った。火山ガラス比分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料 8g を秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°C で恒温乾燥。
- 4) 分析筒により、1/4-1/8mm の粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で 250 粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別組成を求める。

(2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図 1 に、その内訳を表 1 に示す。試料には、22.4% の火山ガラスが含まれている。火山ガラスは比率が高い順に、繊維束状に発泡した軽石型ガラス (11.6%)、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス (7.2%)、透明のバブル型 (2.8%)、分厚い中間型 (0.8%) である。

3. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

b 地点 SD03B 灰白試料に含まれる火山ガラスを対象として、屈折率 (n) の測定を行った。測定には、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製、MAIOT）を利用した。

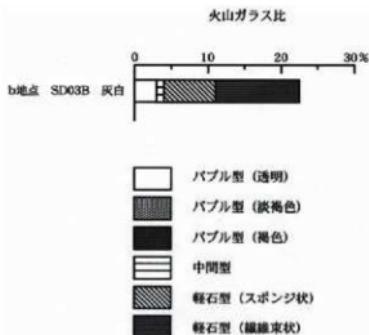


図1 火山ガラス比ダイヤグラム

表1 火山ガラス比分析結果

試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
b地点 SD03B灰白	7	0	0	2	18	29	194	250

数字は粒子数。 bw : バブル型。 md : 中間型。 pm : 軽石型。 cl : 透明。 pb : 淡褐色。 br : 褐色。 sp : スポンジ状。 fb : 繊維束状。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。試料に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.503-1.508である。

4. 火山ガラスの主成分化学組成分析

(1) 分析試料と分析方法

b 地点SD03B灰白試料に含まれる火山ガラスと指標テフラとの同定精度を向上させるために、波長分散型エレクトロンプローブX線マイクロアナライザー（以下、WDS型EPMAとする）により、火山ガラスの主成分化学組成分析を行った。分析に使用した分析機器は、山形大学理学部の日本電子JXA8600MWDS型EPMAである。分析は、加速電圧15kV、照射電流0.01 μA、ビーム径5 μmの条件で行った。また、補正法にはOxide ZAF法を用いた。

(2) 分析結果

火山ガラスの主成分化学組成分析結果を表3に示す。分析対象となった11粒子のうち、8粒子については非常によく似た化学組成をもつ。そのほかに、3種類の火山ガラスが1粒子ずつ検出された。

表2 屈折率測定結果

試料・テフラ	火山ガラス (n)
b 地点SD03B灰白	1.503-1.508
十和田 a (To-a, A.D.915) [*]	1.503-1.507 ^{*1}
肘折尾花沢 (Hj-O, 11-12ka) [*]	1.499-1.504
浅間草津 (As-K, 15-16ka) [*]	1.502-1.504
姶良Tn (AT, 26-29ka) [*]	1.499-1.501
鳴子柳沢 (Nr-Y, 41-63ka) [*]	1.500-1.503
阿蘇 4 (Aso-4, 85~90ka) [*]	1.509-1.512
鳴子荷坂 (Nr-N, 90ka) [*]	1.500-1.502
北原 (Kth, 90-100ka) [*]	1.499-1.502
御岳第1 (On-Pml, 100ka) [*]	1.500-1.503
洞爺 (Toya, 112-115ka) [*]	1.496-1.498
鳴子荷坂 (Nr-N, 90ka) [*]	1.500-1.502
北原 (Kth, 90-100ka) [*]	1.499-1.502
御岳第1 (On-Pml, 100ka) [*]	1.500-1.503
洞爺 (Toya, 112-115ka) [*]	1.496-1.498

早風遺跡における屈折率測定は、温度変化型屈折率測定装置 (MAIOT) による。*1: 町田・新井 (2003), *2: 宮城県域での屈折率。

表3 試料と代表的指標テフラに含まれる火山ガラスの主成分化学組成分析結果

試料・テフラ	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	n
b 地点SD03B灰白											
	77.06	0.36	12.71	1.82	0.12	0.39	1.98	4.22	1.31	0.04	8
	0.20	0.04	0.13	0.06	0.05	0.03	0.17	0.06	0.15	0.04	
	77.98	0.18	11.90	1.38	0.04	0.21	1.49	4.21	2.60	0.00	1
	78.40	0.07	11.99	1.41	0.14	0.19	1.25	4.79	1.70	0.06	1
	78.48	0.21	11.92	1.64	0.05	0.15	1.36	4.43	1.71	0.05	1
十和田 a (To-a) [*]	77.87	0.37	12.81	1.75	0.10	0.42	2.00	3.29	1.34	0.06	-
十和田中層 (To-Cu) [*]	75.08	0.44	13.28	2.46	0.08	0.63	2.63	4.04	1.29	0.09	-
浅間草津 (As-K) [*]	78.40	0.29	11.99	1.42	0.11	0.24	1.36	3.71	2.42	-	-
姶良Tn (AT) [*]	78.20	0.12	12.30	1.22	0.02	0.11	1.10	3.37	3.60	0.00	-
鳴子柳沢 (Nr-Y) [*]	79.67	0.16	11.94	1.30	0.06	0.17	1.31	3.62	1.78	-	-
阿蘇 4 (Aso-4) [*]	73.69	0.39	14.36	1.50	0.09	0.27	0.95	4.17	4.57	-	-
鳴子荷坂 (Nr-N) [*]	79.28	0.11	12.09	1.23	0.11	0.11	1.05	4.18	1.83	0.01	-
北原 (Kth) [*]	78.63	0.09	12.26	0.70	0.08	0.07	0.68	3.58	3.87	0.03	-
御岳第1 (On-Pml) [*]	76.30	0.15	13.91	0.99	0.09	0.26	1.61	3.65	3.04	-	-
洞爺 (Toya) [*]	79.37	0.06	12.48	0.92	0.08	0.03	0.37	3.75	2.94	0.00	-

山形大学理学部のWDS型EPMAによる。無水に換算。n: 分析ボイント数。上段が平均値、下段は標準偏差。

*1: 八木浩司山形大学教育学部教授未公表資料。*2: 奥村 (1988), *3: 青木・新井 (2000), *4: 町田・新井 (1992) のデータから抜き、基礎データは吉田ほか (1983)。

5. 考察—指標テフラとの同定

b 地点SD03B灰白試料に含まれる火山ガラスは、形態や屈折率などから915年に十和田火山から噴出した十和田 a 火山灰 (To-a, 大池, 1972, 町田ほか, 1981, 町田・新井, 1992, 2003) に由来する可能性が考えられる。主成分化学組成分析でも、11粒子のうち8粒子の火山ガラスがTo-aとよく似た化学組成をもつ。したがって、試料中にTo-a起源の火山ガラスが多く含まれていると考えられる。

ただ、主成分化学組成分析では、ほかに3種類の火山ガラスが1粒子ずつ検出された。そのうち、1粒子については約4.1~6.3万年前に鳴子火山から噴出した鳴子柳沢テフラ(Nr-Y, 早田, 1989, 町田・新井, 1992, 2003)に由来する可能性があり、本遺跡の基盤や周辺の堆積物からの混入が考えられる。

今回は分析測定者が現地の土層を観察する機会が得られなかったことから、試料の産状については不明な点が多い。ただし、送付された試料をみる限りは、試料の純度はかなりよく、分析の対象とされた火山灰層についてはTo-aの可能性が非常に高いように思われる。今後は分析測定者による現地の土層の観察と試料採取を期待したい。

6.まとめ

早風遺跡で検出されたb地点SD03B灰白試料について、火山ガラス比分析、屈折率測定、EPMAによる火山ガラスの主成分化学組成分析を行った。その結果、十和田a火山灰(To-a, 915年)に由来する火山ガラスを多く検出することができた。

文献

- 青木かおり・新井房夫(2000)三陸沖海底コアKH94-3, LM-8の後期更新世テフラ層序. 第四紀研究, 39, p.107-120.
古田俊夫・森脇 広・町田 洋(1983)火山ガラスの主成分組成に基づく広域テフラの同定.
文部省科研費報告書「日本列島周辺の深海底堆積物の分析を中心とした第四紀火山活動と気候変動的研究」(研究代表者 町田 洋), p.35-38.
町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
町田 洋・新井房夫・森脇 広(1981)日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, p.562-569.
大池昭二(1972)十和田火山東麓における完新世テフラの編年. 第四紀研究, 11, p.232-233.
奥村晃史(1988)第四紀示標テフラの主成分組成カタログ. 昭和61-62年度科研費総合研究(A)研究成果報告書「日本における沖積平野・沖積層の形成と第四紀末期の自然環境とのかかわりに関する研究」, p.159-165.
早田 勉(1989)テフロクロノジーによる前期旧石器時代遺物包含層の検討. 第四紀研究, 28, p.262-282.

第IV章 考 察

今回調査した早風遺跡の2地点（d・n地点）の土壘・堀跡などの特徴や年代を中心に整理するとともに、昨年度の調査結果も踏まえてその全体規模や構成などを検討し、今後の課題などについてまとめておきたい。

1. d・n地点の土壘・堀跡の特徴と年代について

《d地点》

当地点では1条の土壘・堀跡、2軒の堅穴住居跡などを確認した。ただし、調査区が幅2m（部分的に1m）ほどと狭いため、詳細については不明な点が残っている。土壘・堀は丘陵頂部から南東側へ傾斜する地点に南北方向に構築されている。

規模・構造：SF301土壘跡は基底幅約6.0m・残存高約1.0m、SD302堀跡は上幅4.0m・底面幅1.2mで、土壘頂部と堀底面との比高差は約3.2mである（第10図）。土壘構築の際には、基底部を溝状（幅2.4m・深さ0.8m）に掘り窪め、地山の黄褐色土ブロックを多く含む層と黒褐色土を含む層を縞状に積み上げて土壘の高まりを造り出している。このような基礎地業は、栗原市伊治城跡の外郭北辺土壘の基底部でも確認されている（宮城県多賀城跡調査研究所 1978）。土壘の西裾部には土壘構築時のものとみられる土壤（SK306）があるが、上部の堆積土の状況をみると構築時にはすべて埋め戻されず、窪んだ状態のままであったとみられる。土壘の修復（積み直し）などは認められない。また、堀についても掘り返しの痕跡は確認されていない。

年代：土壘や堀跡からは、これらの遺構の年代を限定できる遺物は出土していない。ただ、土壘西側の遺構：SX303・SI304・SI305との新旧関係をみると、土壘はこれらよりも新しい。SX303・SI304・SI305はいずれも掘り下げを行っていないのでその時期については明確ではないが、遺構を平面的に確認する際に出土した遺物をみると、須恵器壺では底部がヘラ切り・無調整のものが目立ち、出土土器は概ね8世紀後半頃に限定される。これらのことから、当地点の土壘と堀の構築年代は8世紀後半以降の可能性があると考えられる。なお、SD302堀跡の堆積土中位からは10世紀前葉に降灰した“灰白色火山灰”が検出されている。

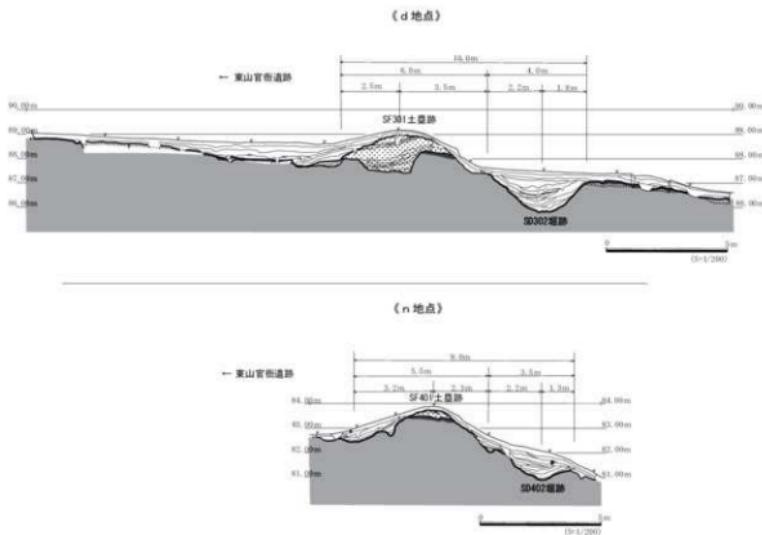
《n地点》

南へ延びる丘陵の東縁辺に沿った地点である。東側には深い沢があり急斜面となっている。丘陵縁辺に沿って南北方向の1条の土壘・堀跡が確認された。

規模・構造：SF401土壘跡は基底幅約5.5m・残存高約1.5m、SD402堀跡は上幅2.8~3.0m・底面幅0.4mで、土壘頂部と堀底面との比高差は約3.0mである（第10図）。土壘の東西両斜面は基盤の柳沢火碎流まで削り込んでいるが、土壘頂部面では旧表土層（黒褐色土）上に地山小ブロック・凝灰岩小礫を含む褐色シルトを直接積み上げて高まりを構築している。土壘積土は20~30cmほどしか残存していないかったが、積土の高さはもともと低かったものと考えられる。土壘の両裾部には小溝跡（SD403・404）がそれぞれ確認されている。西側のSD404の堆積土は人為的埋土の可能性があり、この溝跡に

については土壘構築と関連する遺構（土留め壁材の据え方など）とも考えられる。なお、堀跡の東壁上部は斜面側へ若干流出しており、この部分での積土の有無を確認できなかったが、東側が急斜面であることを考えると土壘状の積土があった可能性は低い。また、土壘および堀の修復の痕跡も確認されなかった。

年代：遺物は表土層から土師器小片が1点出土したのみである。ただ、SD402堀跡の堆積土中位付近から“灰白色火山灰”が検出されている。したがって、これらの構築時期については10世紀前葉以前であることは明白であるが、これ以上の限定はできない。



第10図 d・n地点の土壘・堀跡の規模・構造

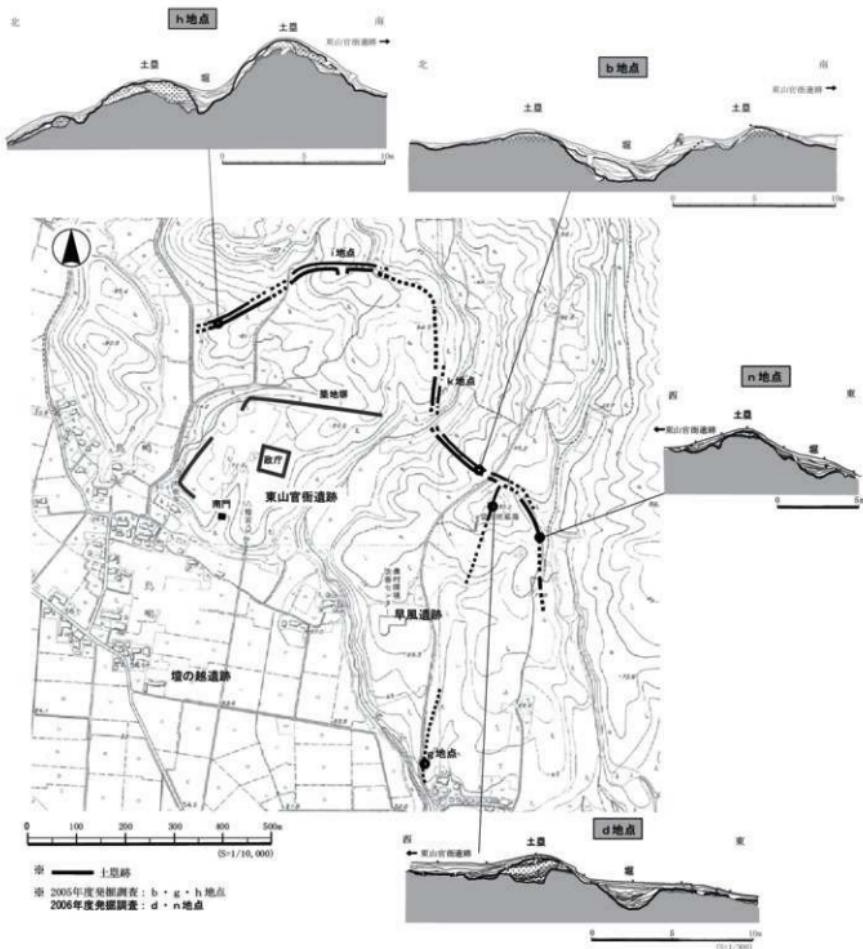
2. 東山官衙遺跡の外郭区画施設について

丘陵部（早風遺跡）に展開する東山官衙遺跡の外郭区画施設について、昨年と今年度の調査結果を踏まえてその全体規模や構成などについて検討する。

（1）外郭区画施設の構成

東山官衙遺跡の外郭を巡る土壘・堀跡は、第11図に示したように、西側のh地点から東側のn地点までを結ぶと総長約1.2kmほどになる。昨年度は西側のh地点、東側のb地点で調査を行い、高さの異なる土壘跡を2条、これに挟まれた堀跡を1条確認した。今回は東側のn地点で土壘・堀跡をそれぞれ1条ずつ検出した。n地点の場合、h・b地点のように土壘がもう1条巡っていた可能性は低い。こうした相違は、土壘・堀を構築する地点の地形に左右されていたのではないかと推測される。現況

を見る限りでも、発掘調査を行った h 地点・ b 地点と類似した地形の i 地点や k 地点南では 2 条の土壙状の高まりと 1 条の堀状のくぼみが確認できるが、n 地点と類似した地形の k 地点北では 1 条の土壙状の高まりと斜面側に平坦な段（堀跡の痕跡）が観察される。つまり、丘陵の尾根や斜面を横断する場合には“2 条の土壙・1 条の堀”、丘陵縁辺（片側が急斜面）に沿う場合には“1 条の土壙・1 条の堀”であったようである。外郭区画施設のすべてが 2 条の土壙と 1 条の堀で構成されていたので



第11図 各地点の土壙・堀跡の規模と構造

はなく、地点によっては1条の土壘・1条の堀であり、地形によってその構成を変えていたものと考えられる。

なお、h-b-n地点の土壘・堀跡は、n地点から先は不明瞭になる。しかし、地形からみて、これらの土壘・堀跡は丘陵の縁辺をさらに南へ延びていくものと推測される。

(2) d地点の性格

当地点の土壘・堀跡は、前述した外郭区画ライン（b-n地点）からは南へ分岐するような状況を示すが、接点部分は後世の“大穴”で壊されており不明になっている。南延長線上には、昨年調査（断面観察）したg地点があり、位置的に考えてd地点とg地点は連結する可能性が高い（第11図）。

このd-g地点ラインがh-b-n地点の外郭区画ラインと直接連結していたかどうかは、先に述べたように接点部分が壊されており確認できないが、現状で確認できる土壘状高まりと堀状くぼみの位置関係からみると両者は連結していた可能性が高いと考えられる。ただ、これらの土壘・堀の構築が同時であったかどうか、時期差があるのかなどについては不明である。

さて、d地点の土壘・堀跡は1条ずつであるが、外側のh-b-n地点でも地形によっては土壘・堀跡は1条ずつの場合があるので、その点ではh-b-n地点のそれと構造・規模とも区別しにくい。しかし、当地点の地形をみるとn地点のように片側に急斜面を伴うような地形ではなく、これに着目すれば、両者は区別して捉えておくべきであろうと思われる。その場合、d地点は外郭区域をさらに区分する土壘・堀として位置づけできる可能性がある。桃生城においても西側の外郭区域を二分（複郭）する土壘・堀跡が確認されており（宮城県多賀城跡調査研究所 2001）、当地点の土壘・堀も同様な役割を持っていたという想定が可能であろう。

(3) 壇の越遺跡の区画施設との関連性

東山官衙遺跡の南面に広がる壇の越遺跡では、すでに述べたように、門や櫓などの施設を備えた築地塀が段丘崖に沿って巡っていたことが確認されているが（第4図）、これらと丘陵部で確認されている早風遺跡の外郭区画施設（土壘・堀）との関連性の有無が問題になってくる。

両者は西と東区域で互いにその延長部が確認されておらず大きく空白になっているものの、平面的には確かに相互に結びつくような配置・規模である。その点では両者を関連づけて捉えることができるかもしれない。一方、構築時期からみると、壇の越遺跡の築地塀は8世紀後葉から9世紀前葉頃と推定されており（加美町教育委員会 2004a）、これに対して早風遺跡の外郭区画施設については年代を限定できる資料が得られていないが、先に述べたd地点（外郭域を区分か）は8世紀後半かそれ以降とみられることから、これを手がかりにするとh-b-n地点の土壘・堀は8世紀後半頃にはすでに存在した可能性を持っていると言える。こうした点を考え合わせると、壇の越遺跡と早風遺跡の大規模な区画施設が、8世紀後半から9世紀前葉頃にかけてほぼ同時期に構築されたとみることも可能になってくる。

しかしながら、現時点ではまだまだデータ不足であり、両者の関連性を明確には言い切れない。これは解明すべき今後の大きな課題の一つである。

3. 大規模な外郭区画施設をもつ城柵遺跡について

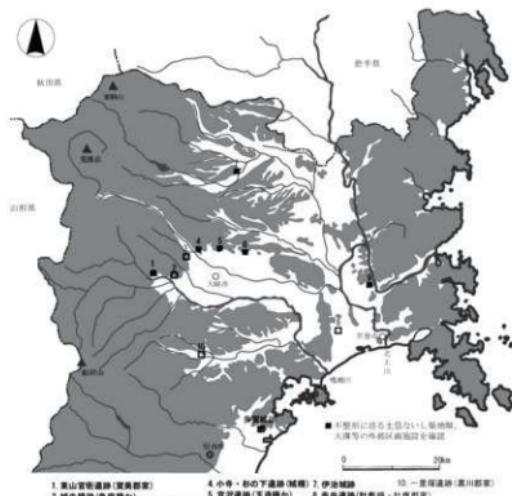
土塁ないし築地塁・堀（大溝）などが不整形に巡る外郭区画施設をもつ例は、県内では栗原市（旧築館町）伊治城跡、石巻市（旧河北町）桃生城跡、大崎市（旧古川市）宮沢遺跡、同市（旧田尻町）新田柵跡など⁽¹⁾、県北域の城柵遺跡で知られている（第12図）。これらは、政庁－内郭－外郭という三重構造もしくは複郭的な構成をとるという特徴が指摘されている（熊谷 2004a、村田 2004）。その規模や構成・形状は地形などにも制約されてそれぞれ違いがあり、政庁など未確認の遺跡もあるが、これら三重構造もしくはそれに近い構成をとる城柵の基本的なあり方には共通性が認められる。

東山官衙遺跡でも、早風遺跡における大規模な土塁・堀跡の確認によって、こうした城柵遺跡と共通する外郭区画施設を持ち、その全体的な構成（政庁－内郭（築地塁）－外郭（土塁・堀））にも類似する点があることが明らかになってきた。さらに、昨年踏査した東方約5kmの城生柵跡周辺でも“土塁状・堀状の遺構”が確認され、県北域とくに大崎平野の丘陵縁辺部に展開する城柵・官衙遺跡では、いずれも共通して土星あるいは築地塁・堀（大溝）などを不整形に巡らす外郭区画施設を備えていた可能性が出てきた⁽¹⁾⁽²⁾。当地域の城柵・官衙遺跡については、こうした点も踏まえて、その構造的特徴、機能・性格などを改めて検討していく必要があろう。

また、東山官衙遺跡は、早風遺跡のみならず方格地割りが施行されている壇の越遺跡とも一体であり、遺跡全体の構成や変遷をより広い視野で捉える必要性が出てきた。遺構の構築年代や変遷などまだ不明な点は多いが、東山官衙遺跡の全容を把握するには、早風遺跡など周辺域の遺跡の実態も今後解明していくかなければならない。

註1 他に、不整形な外郭区画施設を持つ例として大崎市（旧古川市）小寺・杉の下遺跡（古川市教育委員会 1995）がある。丘陵の尾根部に柵を付設した築地塁が構築されており、その範囲は少なくとも北東－南北約220m、東西－南東約760mに及ぶ。

註2 同様の土塁状の高まりや堀状のくぼみを手がかりに探査すれば、未確認の城柵遺跡についても確認できる可能性があり、今後は特に大崎市（旧田尻町）新田柵以東の丘陵地の調査が重要であろう。



第12図 宮城県北の城柵・官衙遺跡

引用・参考文献

- 吾妻俊典ほか 2002 「桃生城跡第1次～第10次発掘調査の概要」『考古学ジャーナル』No.494 pp.34～38
- 阿部義平 2005 「古代城柵の研究（一）城柵官街説の批判と展望」『国立歴史民俗博物館研究報告』第121集 pp.257～284
- 2006 「古代城柵の研究（二）～城柵の成立と機能～」『　　』第130集 pp.21～95
- 今泉隆雄 1992 「律令国家とエミシ」『新版 古代の日本 ⑨東北・北海道』pp.163～198（角川書店）
- 井上克弘・山田一郎 1990 「東北地方を覆う古代の珪長質テフラ“十和田－大湯浮石”の同定」『第四紀研究』第29巻 - 2号 pp.121～130
- 加美町教育委員会 2004a 「壇の越遺跡V－宮城県北部地区県営は場整備事業に伴う平成12年度発掘調査報告書－」
加美町文化財調査報告書第1集
- 2004b 「壇の越遺跡VI－平成13年度県営は場整備事業開発発掘調査報告書－」
第2集
- 2004c 「壇の越遺跡VII－県道鳥屋ヶ崎・小野田線に伴う平成12～14年度発掘調査報告書－」
第3集
- 2005a 「壇の越遺跡VIII」
第5集
- 2005b 「壇の越遺跡IX」
第6集
- 2005c 「東山遺跡Ⅹ－第8～9次発掘調査報告書－」
第7集
- 2007 「壇の越遺跡」第33回 古代城柵官街遺跡検討会資料集』pp.45～50
- 熊谷公男 2004a 「蝦夷の地と古代国家」日本史リブレット11（山川出版社）
- 2004b 「古代の蝦夷と城柵」歴史ライブラリー178（吉川弘文館）
- 桑原治郎 1992 「城柵を中心とする古代官衙」『新版 古代の日本 ⑨東北・北海道』pp.201～230（角川書店）
- 齊藤 肇 2003 「東山官衙遺跡の概要」『第29回 古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.165～170
- 2006 「壇の越遺跡の道路跡と方格地割について」『第32回 古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.59～66
- 進藤秋輝 1991 「古代城柵の設置とその意義」「北からの視点」日本考古学協会1991年度宮城・仙台大会資料集 pp.131～142
- 早田 魁 2003 「第Ⅳ章-1-4 鳴子柳沢テフラ層（Nr-Y）の層序・分布・層位」『宮城県岩出山町・座敷乱木遺跡発掘調査報告書』pp.35～37
- 高橋栄一 2006 「壇の越遺跡－地割による区画内の施設－」『第32回 古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.67～77
- 高橋誠明 2003 「多賀城創建にいたる黒川以北十郡の様相－山道地方－」『第29回 古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.59～75
- 田尻町教育委員会 1998 「新田柵跡推定地」田尻町文化財調査報告書第3集
- 2001 「新田柵跡推定地3」「新田柵跡推定地3ほか」
第5集
- 柴館町教育委員会 2000 「伊治城跡－平成11年度・第26次発掘調査報告書－」柴館町文化財調査報告書第13集
- 2002 「伊治城跡・嘉倉貝塚」柴館町文化財調査報告書第15集
- 独立行政法人 文化財研究所・奈良文化財研究所編 2003 『古代の官衙遺跡 1 造構編』
- 古川市教育委員会 1995 「小寺遺跡」宮城県古川市文化財調査報告書第18集
- 2004 「名生館官衙遺跡X XIV－平成15年度発掘調査概報－」宮城県古川市文化財調査報告書第35集
- 古川一明 2006 「東山官衙遺跡の概要」『第32回 古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.78～85
- 宮城県教育委員会・日本道路公団 1980 「(1) 宮沢遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」宮城県文化財調査報告書第69集
- 宮城県教育委員会 1985 「古川市宮沢遺跡－化女沼ダム建設関係I-」
第105集
- 1997 「壇の越遺跡他」「舟場遺跡ほか」
第173集
- 1998 「壇の越遺跡」「壇の越遺跡・念南寺遺跡」
第177集
- 2003 「壇の越遺跡」「壇の越遺跡ほか」
第195集
- 2004 「壇の越遺跡」「壇の越遺跡ほか」
第199集
- 2005 「壇の越遺跡」「壇の越遺跡ほか」
第202集
- 2006a 「桃生城跡」「桃生城跡 細谷B遺跡－三陸縱貫自動車道建設関連遺跡調査報告書V-」
第205集

- 2006b 「東山官衙遺跡周辺地区」「東山官衙遺跡周辺地区ほか」 * 第208集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1978 『伊治城跡 I - 昭和52年度発掘調査報告書』 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊
 1987 「東山遺跡 I」 タ 第12冊
 1988 「東山遺跡 II」 タ 第13冊
 1989 「東山遺跡 III」 タ 第14冊
 1990 「東山遺跡 IV」 タ 第15冊
 1991 「東山遺跡 V」 タ 第16冊
 1992 「東山遺跡 VI」 タ 第17冊
 1993 「東山遺跡 VII」 タ 第18冊
 1997 「桃生城跡 V」 タ 第22冊
 2001 「桃生城跡 IX」 タ 第26冊
- 宮崎町教育委員会 1980 「早氣遺跡発掘調査報告書」 宮崎町文化財調査報告書第3集
 1996 「東山遺跡 X」 タ 第7集
 1997 「東山遺跡 XI」 タ 第8集
 1998 「東山遺跡 XII」 タ 第9集
 1999 a 「壇の越遺跡 II - 平成10年度発掘調査報告書 -」 タ 第10集
 1999 b 「壇の越遺跡 III - 平成10年度発掘調査報告書 -」 タ 第11集
 2003 「壇の越遺跡 IV - 平成11年度発掘調査報告書 -」 タ 第13集
- 宮崎町史編纂委員会 1973 「宮崎町史」
- 村田晃一・吉田桂 2003 「城生横跡の概要」「第29回 古代城柵官衙遺跡検討会資料集」 pp.77~90
- 村田晃一 2004 「三重構造城柵論 -伊治城の基本的な整理を中心として 移民の時代2-」「宮城考古学」 第6号
 pp.159~196
- 柳沢和明 2001 「桃生城跡発掘調査の概要」「第27回 古代城柵官衙遺跡検討会資料集」 pp.77~100
- 山田一郎・庄司貞雄 1980 「宮城県に分布する灰白色火山灰について」「宮城県多賀城跡調査研究所年報1979」 pp.97
 ~102



1. 早風遺跡・東山官衙遺跡周辺の空中写真（上が北）
国土交通省：国土画像情報（昭和50年撮影）
カラー空中写真、整理番号：CTO-75-27-C8a-10
縮尺：約1/12,000



2. 早風遺跡・東山官衙遺跡遠景（南より）
平成4年撮影：宮城県多賀城跡調査研究所

図版1 早風遺跡・東山官衙遺跡周辺の遠景



1. d 地点の状況（東から）



2. d 地点調査区（南東から）

奥がSF301土塁路、その手前がSD302塹跡



3. d 地点調査区（北西から）

手前がSD305堅穴住居路、奥がSF301土塁路

図版2 d 地点調査区と遺構（1）



1. SF301土壙跡、SK306土壤（西から）



2. SF301土壙跡、SD302堀跡（南から）



3. SD302堀跡（南西から）

図版3 d地点の遺構（2）



1. SF301土壌跡断ち割り状況（西から）

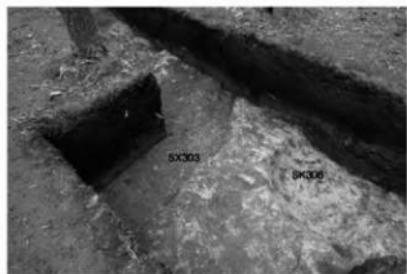


2. SF301土壌跡断ち割り状況（南から）
基底部が溝状に掘り進められている。



3. SX303以西（南東から）

図版4 d地点の遺構（3）



1. SX303、SK306土壤（南から）



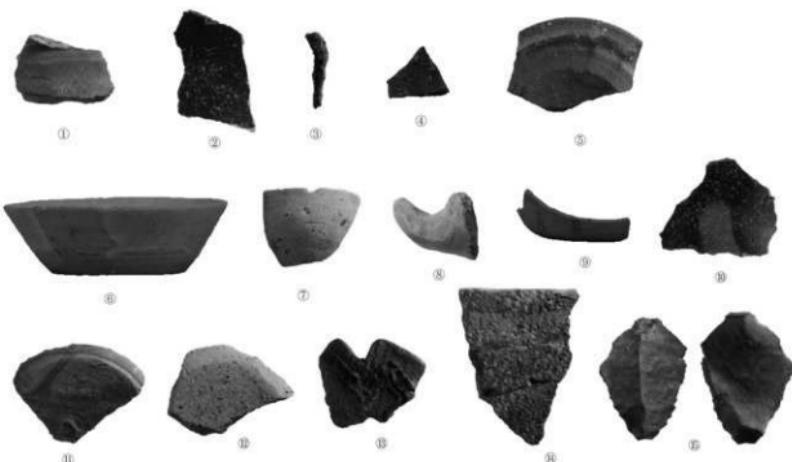
2. SX303（南東から）



3. SI304住居跡（南西から）



4. SI304・SI305住居跡（南東から）



⑥・⑩・⑪・⑫：須恵器杯
②・④・⑩：須恵器蓋

⑤：須恵器蓋
⑦：土師器（把手）
⑬：土師器环

⑧：土師器（把手）
⑪：鐵釘
⑭：土師器环

⑨：織文土器
⑮：二次加工剥片

S = 1/3

図版5 d地点の遺構（4）と出土遺物



1. n 地点の状況（北西から）



2. n 地点調査区（北西から）
中央の高まりがSF401土壠跡



3. SF401土壠跡（南から）

図版6 n 地点の遺構（1）



1. SF401土壠跡、SD402堀跡（南から）



2. SF401土壠跡、SD403溝跡（西から）



3. SF401土壠跡、SD404溝跡（南から）

図版7 n地点の遺構（2）



1. SF401土壠跡の積土状況(南東から)



2. SD403溝跡(南東から)
右手がSD402堀跡



3. SD402堀跡(南から)

図版8 n地点の遺構(3)

た がわ はち まん たて あと
田川八幡館跡

調査要項

遺跡名：田川八幡館跡（宮城県遺跡地名表登載番号：30122 遺跡記号：T L）

所 在 地：宮城県加美郡加美町米泉字屋敷

調査原因：重要遺跡確認

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

佐藤則之 須田良平

佐久間光平 千葉直樹

調査期間：平成18年11月27日～12月7日

調査面積：30m²

調査協力：加美町教育委員会 城泉院

I. 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と周辺遺跡

田川八幡館跡は、宮城県北西部の加美町米泉地区に所在する（遺跡の位置は「早風遺跡」の第1図を参照のこと）。加美町の西部には奥羽山脈が南北に縦走し、そこから分岐した加美丘陵群が南北に延びている。また、南側には鳴瀬川とその支流の田川が東流し、これらによって形成された沖積地が南東に広がっている。遺跡は旧宮崎町（加美町）の中心部から東南東約5kmの地点の東へ延びる丘陵の南縁部に位置している。南側には丘陵沿いに田川が流れ、その南面には水田が広がっている。遺跡が立地する丘陵の標高は60～67m、南側の沖積地との比高差は27～34mである。

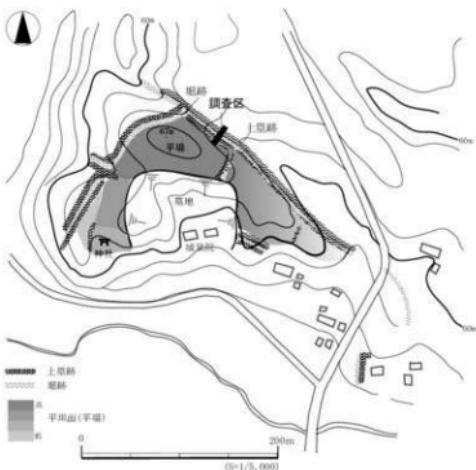
田川に面する丘陵縁部には、古墳～中世を中心に多くの遺跡が分布している。古墳時代では夷森（大塚森）古墳・大黒森古墳などの大型円墳をはじめ、念仏山古墳群・米泉館山横穴古墳群などがみられる。古代では東山官衙遺跡（陸奥国賀美郡）・城生柵跡などの城柵・官衙遺跡があり、壇の越遺跡・早風遺跡などの関連遺跡が広がる。中世の城館跡も多く点在し、本遺跡の他に米泉館跡・地蔵館跡・孫沢城跡・鳥嶋館跡などが知られている。

2. 館跡の概要

この館跡についての文献上の記録はなく、年代や城主などは不明である。

館跡は南へ延びる標高60～67mほどの丘陵先端部を利用して構築されており、おおよそ東西約400m、南北約200mの範囲に及ぶ。現在、館跡が立地する丘陵地には田川八幡社および城泉院などの寺社があり、これらの裏手には杉林や雑木林が広がる。近年、寺の墓地の拡張・造成が行われて丘陵の南側が失われた。

墓地の北側や神社がある南西部の丘陵上には高低差を持つ平坦面が少なくとも3～4面あり、これを取り囲むように土塁や堀が巡っている（第1図）。また、丘陵西斜面には2条の土塁跡と堅堀跡も確認できる。丘陵北側にはほぼ直線的に東西方向に250～300mほど延びる土塁・堀跡がある。これらの西端部は沢へ向かうにつれて徐々に不明瞭になる。東側も沢へむかうにつれて不明瞭になり途切れるが、堀跡の痕跡はなお東側へ続き、南へ若干折れて分からなくなる。丘陵の南側は、寺や墓地、民家の敷地のために大半が失われているが、東側の南裾部には東西に走る2条の土塁とこれに挟まれた堀跡が一部残っている。



第1図 田川八幡館跡と調査区の位置図（概略図）

II. 調査に至る経緯

館跡の北側の丘陵部では、昨年、雑木林の伐採が行われ、館跡の北を東西に走る土塁・堀跡が姿を現した。土塁・堀跡は北側から延びる丘陵の先端部を切るように東西方向に横断しており、250~300mにわたって認められた。また、南側の城泉院では、最近、裏手の墓地の拡張・造成が行われ、その造成地露頭断面には土壌状の遺構などが確認された。

近年、このような開発行為によって館跡の現状が大きく損なわれる恐れが出てきた。とくに東西方向に走る土塁・堀跡は、最近注目されている東山官衙遺跡などの古代城柵・官衙遺跡の大規模な外郭区画施設（「早風遺跡」を参照のこと）と関わる可能性もあり、緊急にこれららの遺構の性格を調査する必要性が生じた^{〔注1〕}。そこで、宮城県教育委員会では、これらの土塁・堀跡の時期や性格を捉えるため、部分的にトレンチ調査などを行うことにした。

註1 東山官衙遺跡から城生柵跡付近の丘陵地には、「女貝塚」と称される「空堀状遺構」と「土塁」が東西方向に数条存在するが、今回調査した地点は、昭和45年に板垣剛夫氏が作成した分布図の第二線にあたるものとみられる（宮崎町史編纂委員会 1973）。

III. 発掘調査

1. 調査の方法と経過

調査は11月27日から開始した。調査地点（トレンチ調査区）は雑木林であったが、すでに伐採がなされており、土塁・堀跡の現況がおおよそ確認できた。この東西方向に走る土塁・堀跡に対して、調査区を南北方向に設定した。調査区は幅約2.0m×長さ15m、面積は30m²である（第2図）。

重機が投入可能な北半部については重機を使用し、その他は人力で表土を剥ぎ、精査を行った。その結果、土塁跡2条、堀跡1条を確認した。土塁跡については一部断ち割りを行い、土塁積土下の旧表土層で溝跡1条を検出した。遺物は旧表土層から弥生土器片などが数点出土した。

この調査と並行して墓地側の造成地（露頭地点）の断面観察と記録を行った。さらに、周辺丘陵の踏査もあわせて行った。これらの一連の野外調査は12月7日に終了した。

なお、遺構の平面図作成にあたっては電子平板を使用し、断面図については縮尺=1/20で作成した。平面図作成にあたっての基準点（世界測地系）は以下の通りである。

BM1 : X = -156529.052 Y = -24.998

BM2 : X = -156533.739 Y = -24.595

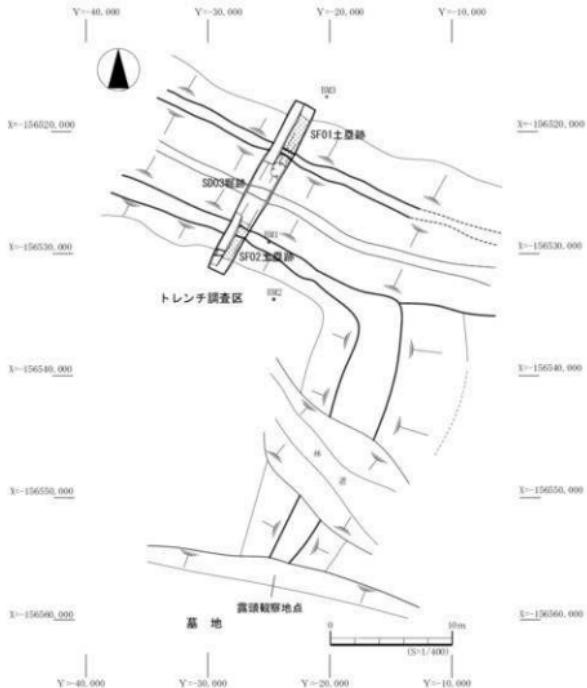
また、写真撮影には6×7モノクロフィルム・カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ（1000万画素）を使用した。

2. 検出遺構と遺物

(1) トレンチ調査区

検出した遺構は、土塁跡2条、堀跡1条、溝跡1条である（第3図）。また、遺物は土塁積土下の旧表土層（II層）から弥生土器片など数点が出土したのみである。

【SF01土塁跡】ほぼ直線的に東西方向に約250mほど延びることが確認されている北側の土塁跡で



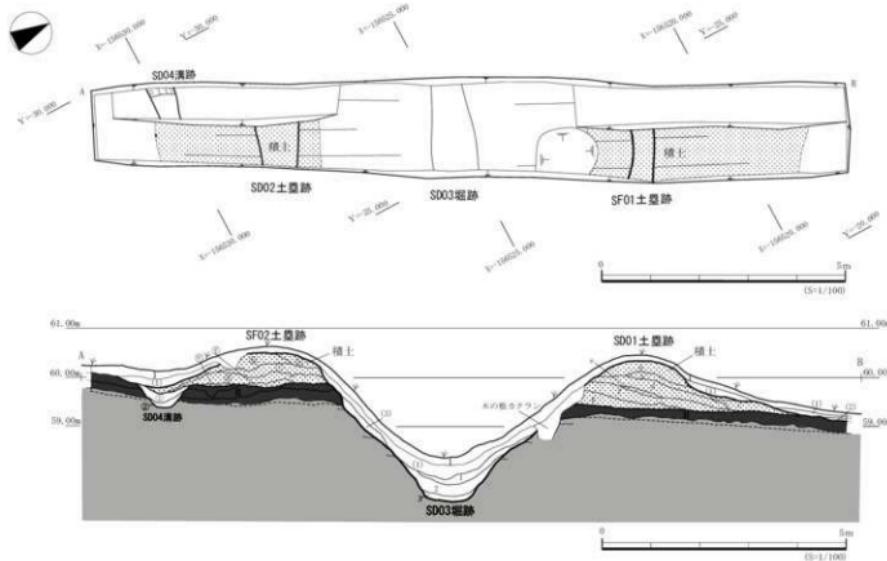
第2図 調査区

ある。土壘の規模は基底幅が約5.0m、残存高が約1.2mである。北側斜面はやや緩やかで、南の堀側は急角度で立ち上がっている。旧表土層の上に明褐色粘土質シルトや基盤の柳沢火碎流を含む土と黒色土を交互に積んで土壘を構築している。積土は全体的に南の堀側から北側へ傾斜している。積み直しなど修復の痕跡は認められなかった。

【SF02土壘跡】 SF01と並行し、調査区の東で南側へ屈曲する（その延長が墓地造成地露頭断面で確認できる）土壘跡である。土壘の規模は基底幅が約3.5m、残存高が約0.8mで、北のSF01土壘跡とは高さがほぼ同じである。北の堀側は急斜面、南側は緩やかである。SF01と同様、旧表土層の上に明褐色粘土質シルトや柳沢火碎流を含む土と黒色土を交互に積んで土壘を構築している。積土は全体的に北の堀側から南側へ若干傾斜している。SF01と同様、修復の痕跡は認められなかった。

【SD03堀跡】 SF01とSF02土壘間の堀跡である。現状では長さ約300mほど確認できる。規模は上幅約4.0m・底面幅0.8~0.9mで、堀底面とSF01土壘頂部の比高差は2.8~3.0mである。断面形は逆台形状を呈する。構築時には基盤の柳沢火碎流まで掘り込んでいる。掘り返しは認められなかった。

堆積土は褐色～暗褐色砂質シルト・砂を主体とした自然流入土で、全体的にややしまりがない。



層	土色	性状	備考	層	土色	性状	備考
Ⅰ 表土 黒褐色(0HYR3/2)	シルト	木の根らしい。しまりなし。		SF02土壙跡 ① 黄褐色(0YR4/6)	シルト	明褐色粘土シルトを不均質に若干含む。	
Ⅱ 旧表土 黒(G5YR2/3)	シルト	東の立石遺跡と、丁度同じ位置で、相似が生まれた。		② 明褐色(2.5YR2/8)	粘土シルト	明褐色粘土シルトを多く含む。表面には落葉地帯。	
③ 土質 黒褐色(0HYR3/4)	シルト	明褐色シルトブロックを多く含む。		③ 黒褐色(10YR3/2)	シルト	明褐色粘土シルトを多く含む。黒褐色シルトブロックを多く含む。	
④ 黒褐色(0YR2/2)	シルト	明褐色シルトブロックを多く含む。		④ 黑褐色(5.5YR2/8)	シルト	黒褐色粘土シルト。明褐色シルトブロックを多く含む。	
SF03縫跡 a 黒褐色(2.5YR5/8)	粘土シルト	明褐色粘土質隙縫を不均質に多く含む。		⑤ 黑褐色(2.5YR2/8)	粘土シルト	明褐色粘土シルトを多く含む。木の軸カツラ。	
b 二小石遺跡付近 粘土シルト	黒褐色シルトを不均質に多く含む。			⑥ 黑褐色(10YR4/6)	粘土シルト	明褐色粘土シルトを多く含む。表面には落葉地帯。	
c 明褐色(2.5YR5/8)	粘土シルト	植土上に似る。しまりややあり。		⑦ 黑褐色(10YR4/6)	シルト	明褐色粘土シルトを多く含む。表面には落葉地帯。	
d 黒褐色(0YR3/2)	シルト	明褐色シルトブロックを多く含む。しまりややあり。		⑧ 黑褐色(10YR3/2)	シルト	明褐色粘土シルトを多く含む。黒褐色シルトブロックを多く含む。	
e 二小石遺跡付近 粘土シルト	黒褐色粘土質シルトブロックを多く含む。			⑨ 黑褐色(10YR3/2)	シルト	II(旧表土)を範囲とする。比較的均質。	
f 黒褐色(0YR3/2)	シルト	植土上に似る。しまりややあり。		⑩ 黑褐色(2.5YR2/8)	粘土シルト	上部に比べてやや褐色もあり。若干砂混入。	
g 明褐色(2.5YR5/8)	粘土シルト	黒褐色土が隙縫に入る。しまりややあり。					

図3 国 遺構平・断面図

【SD04溝跡】 旧表土層（Ⅱ層）面で確認した、SF02土壙よりも古い時期の溝跡。規模は幅約1.0m・深さ約40cm。SF02土壙積土の状況から、土壙構築前に全て埋没しておらず、やや窪んでいたことがわかる。断面形は概ねU字形を呈し、堆積土は黒褐色～黒色シルトを主体とした自然堆積土である。

【旧表土層の出土遺物】 SF01土壙積土下の旧表土層（Ⅱ層）から、弥生土器とみられる小片（第4図-1～3）が数点出土した。

(2) 露頭地点

墓地造成による露頭面の断面観察と記録のみの調査（図版2-6）である。断面ではトレンチ調査区から続く土壙跡、この東側に堀跡1条、ほかに土壙もしくは溝跡とみられる遺構などを確認した。

【検出遺構】 土壙跡はトレンチ調査区のSF02土壙跡と連続する。規模は基底幅7～8m・残存高0.8～0.9mほどで、土壙積土は黄褐色粘土質シルトブロックを多く含む暗褐色土を主体とする。

堀跡はこの土壙跡の東側に接している。上幅2.5～3m・深さ1.0mほどで、堆積土は暗褐色～褐色

シルトを主体とする。

土壘の西側と堀の東側で土壤もしくは溝状の遺構を4つ確認した。大きさは確認できるもので幅1m・深さ40~50cmほどである。土壘・堀跡との直接の新旧関係は不明である。堆積土はいずれも暗褐色~黒褐色シルトを基調とする自然堆積土で、旧表土層を起源とする土を主体にしている。

【出土遺物】土壘積土から縄文もしくは弥生土器の小片、石鎌（第4図-4）、堀跡の堆積土から黒曜石製の楔形石器、旧表土層（Ⅱ層）から縄文もしくは弥生土器の小片が数点出土している。



No.	器種	遺構／層	残存	特徴	写真図版	登録
1	弥生土器か・鋸	II層(SF01下の旧表土)	口縁部片	口縁部にLR文。内外面ナメ。	2-①	1
2	弥生土器 磐 or 鋸	〃	側面半	竹管状工具による刺突跡。へこ書き沈縄文(文様不明)。	②	2
3	弥生土器 磐	〃	口縁部片	天王山式期。折り返し口縁。面による押压。口縁部に横回転のLR文。頸部ナメ。	③	3
4	石鎌	墓地裏面(土壘堆土下)	基部欠	直刃 長:(30.0mm) 幅:11.4mm 厚:3.1mm	④	61

第4図 出土遺物

IV.まとめ

今回の調査では、遺物は縄文もしくは弥生時代の土器・石器が少量出土したのみで、土壘や堀跡などの構築年代を推定できる手がかりが得られなかった。しかしながら、土壘の積土や堀跡の堆積土の状況などからみると、これらは同じ時期に構築された一連の遺構である可能性が高いと考えられる。さらに、SF01土壘跡・SD03堀跡と並行して途中から南へ折れるSF02土壘跡がその内側に平坦面（平場）を形成していること、調査区の西側丘陵部にも土壘・堀跡があり、これらに囲まれた平坦面（平場）が認められることなどを考え合わせれば、これらの土壘・堀は館を構成する防御施設の一部であり、時期についても中世期以降と推定しておくのが妥当であろう（調査の際には、古代の土壘・堀跡が後世に再利用された可能性も考慮してその検討を行ったが、その痕跡は確認されていない）。

ただ、SF01土壘・SD03堀跡については、丘陵の先端部を断ち切るようにほぼ直線的に長さ250m~300mほど続く大規模なものであり、さらに東西に延びる可能性もあることから、館を構成する施設としてのみ位置づけるには解釈しにくい点も残っている。これらの性格については今後検討の余地があると考えられる。

なお、旧表土層（Ⅱ層）から縄文もしくは弥生時代の遺物が若干数出土したことから、本遺跡は当該期を含むことが判明した。

引用・参考文献

宮城県教育委員会 2006 「東山官衙遺跡周辺地区ほか」宮城県文化財調査報告書第208集
宮崎町史編纂委員会 1973 「宮崎町史」



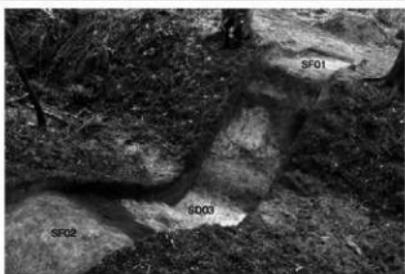
1. 遺跡遠景（南から）



2. 調査区（西から）



3. 調査区全景（北から）



4. SF01・02土壙路、SD03埋跡（南東から）

図版1 遺跡遠景と調査区



1. SF01・02土壘跡、SD03堀跡（北東から）



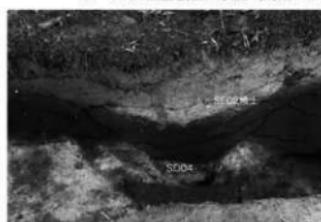
2. SD03堀跡（東から）



3. SF01土壘積土の状況（南東から）



4. SF02土壘積土の状況（南東から）



5. SD04溝跡（東から）



①～③：弥生土器 S=1/3 ④：石器 S=1/2



6. 墓地露頭断面（南から）

図版2 土壘跡・堀跡、墓地露頭断面、出土遺物

かみ の め やき かまあと
上野目焼窯跡

調査要項

遺跡名：上野目焼窯跡（宮城県遺跡地名表登載番号：53021）

所在地：岩出山町（現大崎市）上野目字赤浜

調査理由：下水管埋設

調査主体：岩出山町教育委員会

調査担当：宮城県文化財保護課

菊地逸夫 須田良平 加藤明弘（岩出山町教育委員会）

調査期間：平成17年12月20日

調査面積：約25m²

目 次

I.	はじめに.....	49
II.	調査の概要.....	49
III.	発見された遺物.....	50
IV.	まとめ.....	55

I. はじめに（第1・2図）

上野目焼窯跡は大崎市岩出山上野目字赤渋に所在する。遺跡はJR岩出山駅の東約2.3kmの江合川左岸の丘陵上にあり、周辺は宅地・畠地・山林となっている。

上野目焼は伊達家の家臣である「須江家」によって営まれた窯で、詳しい記録はないが明和年間（1764～1771）以前には宅地内に窯を構築して陶器生産を行っており、文化・文政年間（1804～1829）に最盛期を迎える、明治二年（1869）に廃業したと伝えられている（岩出山町史 1970）。須江家には「□政六年 癸未 初冬出来」（干支から安政6年=1823年と考えられる）の銘が刻まれた大形の壺が伝世しており、この時代に操業していたことを示すものとして注目される。

なお、当時岩出山城の南側にあたる大学町の青田家で焼いていたとされる焼き物を「岩出山焼」と称したとされている（岩出山町史 1970）。

須江家については、「慶長8年（1603）以降は政宗の四男宗泰が岩出山の領主となった際に、大崎・葛西一揆で軍奉行として活躍した山岡志摩が（小成田総右衛門から改名し岩出山城の城代となる）姻戚関係のある当家に居住したといわれる」など古い家柄であったことが知られている（岩出山町史 1993）。

なお、「須江家住宅」は平成13年に宮城県有形文化財建造物として指定されている。

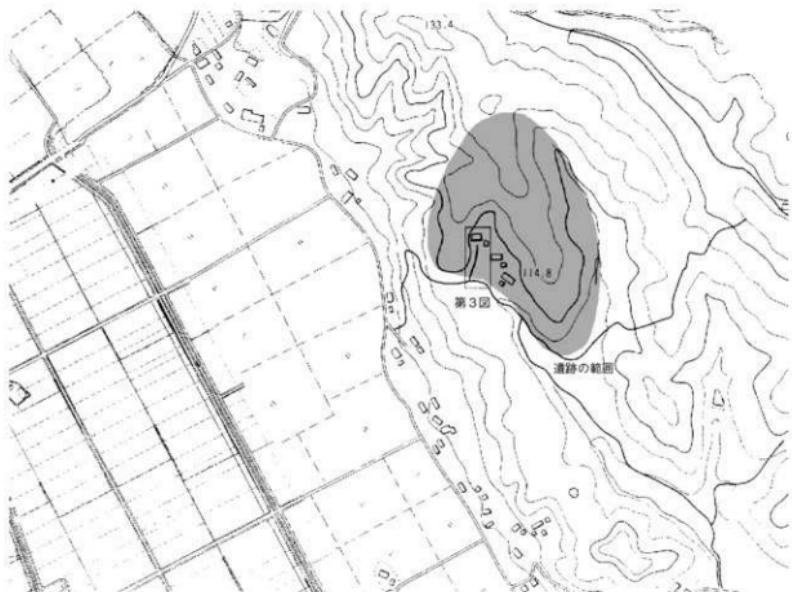


第1図 上野目焼窯跡の位置

II. 調査の概要（第3図）

本調査は「須江家住宅」の改築部から町道まで通ずる下水管付設工事に伴う調査である。掘削を伴う南北70mが調査の対象となり、その中で掘削の可能な約50mの部分について調査を行った。

調査は重機により表土（耕作土）を除去し、遺物の分布状況や遺構の有無について確認を行った。



第2図 窯跡周辺の地形

調査区の幅は約50cmである。

その結果、屋敷地を含む調査区の北半は畠地等の造成により大きく削平され遺構は存在せず、遺物の出土もまばらであること、南半についても盛り土部分にのみ旧地形が残存し、そこに遺物が集中すること（「北側」「南側」の集中地点と呼称）が確認された。（第3図）

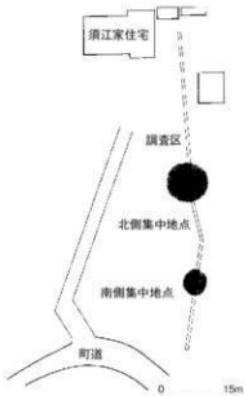
北側の集中地点では表土直下から陶器片や窯道具が焼土や炭化物と混じって出土している。遺物は土層中にまんべんなくみられ、立った状態で出土したものも多いことから遺構に伴うものや一括廃棄によるものとは考えられない。これらは、調査区が沢筋にあたることから、尾根および斜面部に作られた窯やその灰原の遺物が再堆積したものと考えられる。

南側の集中地点は表土下約1mで検出された。直径80cmほどの土壤状の落ち込みの中から窯道具・壁材・耐火煉瓦・大型の甕の破片などがまとまって出土している。近世の磁器やガラス片も一緒に出土しており、後世の廃棄土壤と考えられる。

III. 発見された遺物（第4～6図）

陶器（茶碗・皿・土瓶・徳利・杯・甕・鉢・切立・片口・土鍋・灯火器・花入・倒盆・火鉢・擂鉢）や窯道具・窯体片などがある。

以下、主な器種について記述を加える。



第3図 調査の位置

【茶碗】湯飲みと飯碗の2種がある。

湯飲みは、口径が10cm弱、高さ5cm程度で、底部から体部にかけて丸みをもって立ち上がるものが多い。釉薬には白釉だけのもの、白釉で外面の一部に青釉を流し掛けしたもの、内面が白釉で外面が青釉のもの、灰釉で外面の一部に青釉を流し掛けしたものなどがある。また、破片資料の中には外面に酸化鉄による絵付けがされ灰釉が施されているものが少量認められる。

飯碗は口径が約12cm、高さが7cm弱のもので、底部から体部にかけて直線的に立ち上がるものが多い。本焼きされたもので図示できたのは1点で、これには白釉が施されている。破片資料では白釉のみ施されたものが多くみられ、灰釉が施されたものもわずかに見られる。素焼き（未製品）のものは3点図示したが、この中の7には酸化鉄により「奔馬」が描かれている。

【皿】丸皿と角皿があり、丸皿には法量により、口径が10cm程度の小皿、口径が14cm程度で深みのあるいわゆる「くらわんか手」と呼ばれる中皿、口径が20cm程度のものの大皿の3種類がある。

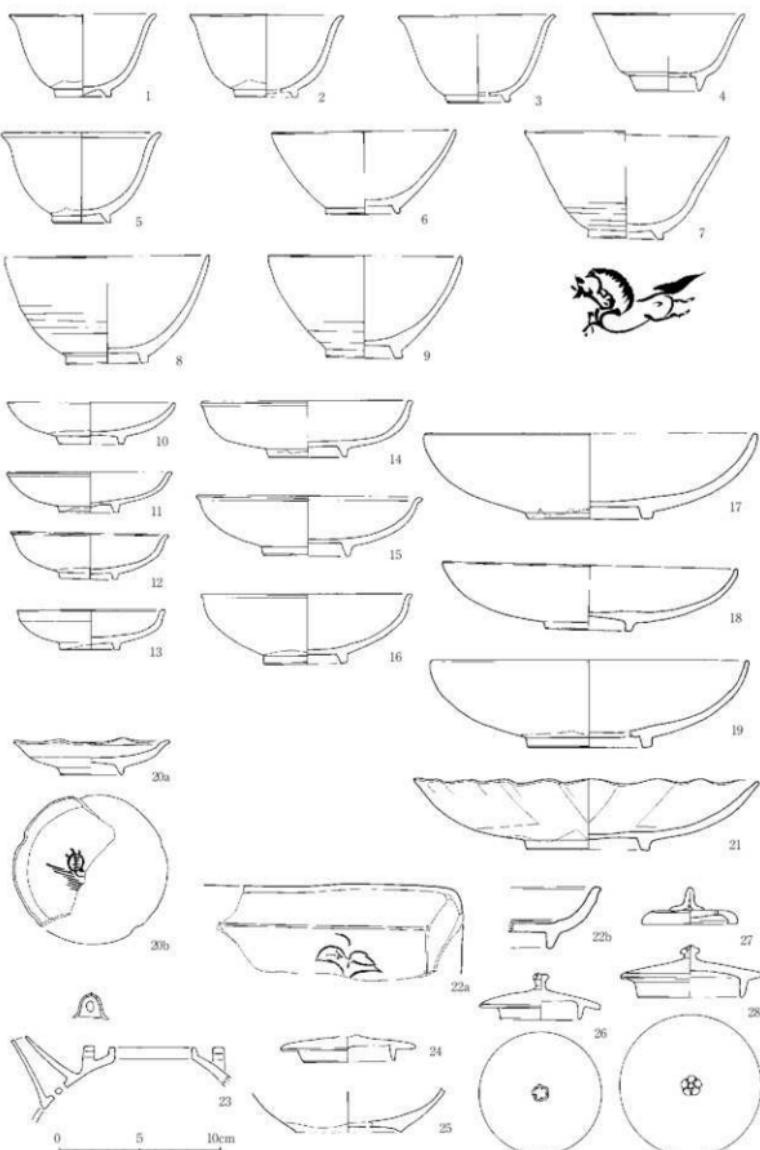
小皿には口縁端部がそのまま取まるものや、玉縁状になるもの、口唇部を外から圧して輪花状にしたものなどいくつかの形態がみられる。釉は白釉のみのものと灰釉のみのものなどがあり、量的には前者が多い。中皿は図示した3点の他に破片資料や素焼きのもの（未製品）が比較的多く見られる。口縁端部が玉縁状を呈するのが特徴である。白釉が施されたものが殆どで、内面にのみ青釉を流し掛けしたものもある。大皿には口縁端部がそのまま取まるものと波状になるものとがあり、量的に後者は稀である。白釉が施されたものが多く見られ、内面に青釉を流し掛けしたものもある。また、鉄釉を施したものもいくつか見られる。

角皿は図示できたものは1点であるが、破片資料をみると比較的多く焼かれている。型押しにより成形されたもので底部の外面には布の圧痕が残る。内面には型による文様（意匠は不明）があるが、その上に施釉されているためあまり明確には見えない。白釉を地にして青釉を流し掛けしたものが多く見られる。

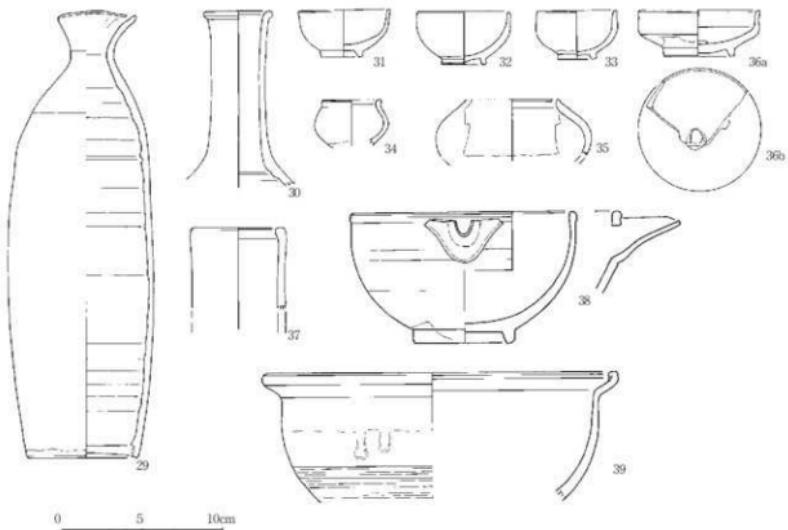
また、皿類全体を通して見ると、絵付けされているものは量的に少なく、意匠の判明するものは20（すっぽん）のみである。絵付けには生地に直接鉄（図版5-6・10）や青呉須（図版5-12）で描いたものと生地に白土を掛けた後に青呉須（図版5-11）で描いたものとがあり、後者は一見すると磁器のように仕上げられている。絵付けされているのはいずれも内面で、その面には透明釉（灰釉）が施されているが、絵のない外面には鉄釉が掛けられたもの（図版5-11・12）もある。

【土瓶】全体形の判明するものはない。釉薬には白釉、青釉の他に灰釉、鉄釉などがあり量的には前2者が多い。蓋には返りのあるもの（24・26・28）と無いもの（27）とがあり、前者のつまみは5枚の花弁状（梅花？）を呈し、後者は粘土紐を折り曲げて貼り付けたものである。全体的に絵付けされたものは少なく、図示した蓋（27）の他に体部に鉄によって細線が描かれた破片（意匠は不明）が1点あるにすぎない。

【徳利】大形のすず徳利と小形の爛徳利があり、さらにはすず徳利には体部がらっきょう形を呈し器面が平滑に仕上げられているものと肩の部分に段をもち表面が飛鉢によって仕上げられたものとがある。釉薬の種類はらっきょう形のものには白釉、青釉が見られるが、後者のものはすべて鉄釉（内面

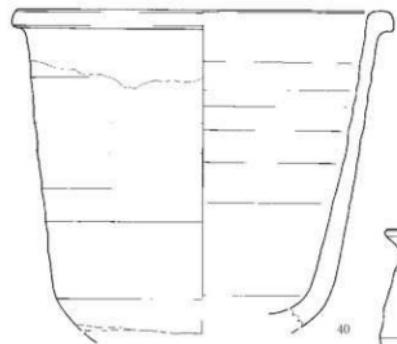


第4図 出土遺物（1）

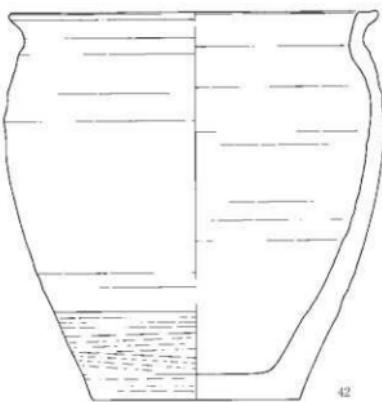


番号	出土地点	種類	口徑	底径	深度	説明
1	周盤1-1	北側	黒釉(白地)	9.2	3.5	内:白釉 外:白釉
2	周盤1-6	北側	黒釉(白地)	9.6	4.0	31 内:白釉 外:白釉に青釉流し跡
3	周盤1-8	北側	黒釉(白地)	9.8	4.0	32 外:青釉 内:白釉
4	周盤1-10	北側	黒釉(白地)	9.6	4.0	33 内:灰釉 外:从釉に青釉流し跡
5	表様	表様		9.9	3.7	34 外:白釉 ? 滴け切込み白湯
6	周盤6-1	北側	黒釉(白地)	11.4	4.7	35 外:白釉
7	周盤6-2	北側	黒釉(白地)	12.8	4.7	36 素地 内部の底部下平はヘラケズリ
8	周盤6-3	北側	黒釉(白地)	12.8	5.1	37 素地 内部の底部下平はヘラケズリ
9	表様	表様		12.0	4.7	38 素地 内部の底部下平はヘラケズリ
10	周盤2-2	北側	黒(小皿)	10.4	4.1	39 外:白釉
11	周盤2-5	北側	黒(小皿)	10.3	3.8	40 内:灰釉
12	周盤5-5	北側	黒(小皿)	9.9	3.7	41 外:白釉
13	周盤2-4	北側	黒(小皿)	9.3	3.8	42 内:灰釉
14	周盤2-3	北側	黒(中皿)	13.1	5.2	43 外:白釉
15	表様	黒(中皿)	14.0	5.5	44 内:白釉	内:白釉
16	周盤2-1	北側	黒(中皿)	13.0	5.2	45 内:白釉(青釉流し) 外:白釉
17	周盤3-2	北側	黒	20.8	7.8	46 内:白釉
18	周盤3-3	北側	黒	18.4	5.5	47 内:白釉(青釉流し) 外:白釉
19	周盤3-4	北側	黒	19.8	7.9	48 内:灰釉 内部にはさらに灰釉流し
20	周盤5-6	北側	黒(梅花形)	9.7	3.9	49 内:灰釉 見込みに灰による絵付け(すっぽん?)
21	周盤3-1	北側	黒(梅花形)	21.6	7.8	50 記録表
22	周盤2-7	北側	黒(角皿)			51 内に想おこしの文様あり。その後施錆(白錆) 外:青釉
23	周盤4-1	北側	土板	5.4		52 内:白錆
24	周盤4-5	北側	土板		6.5	53 内:灰釉
25	周盤5-8	北側	土板(蓋)	8.4	5.7	54 内:青釉(青土板)
26	周盤4-6	北側	土板(蓋)	7.6	5.0	55 内:青釉(青土板) つまりに各枚の花弁(梅花?)
27	周盤4-14	表様	土板(蓋)	6.0		56 外:灰錆 外錆に鉄によると記付け
28	周盤4-15	表様	土板(蓋)	8.9	6.6	57 外:灰錆 つまりに5枚の花弁(梅花?)
29	周盤6-4	表様	土板	3.4	7.0	58 外:白錆 内:上半白錆
30	周盤4-1	表様	すず他	4.2		59 外:白錆
31	周盤4-7	表様	酒器(杯)	5.7	2.7	60 内:灰錆
32	周盤4-8	北側	酒器(杯)	5.8	2.8	61 内:白錆
33	周盤4-9	表様	酒器(杯)	5.0	2.4	62 内:白錆
34	周盤4-9	北側	器入?	3.7		63 内:青釉
35	周盤5-4	表様	土板?	5.7		64 内:灰錆 外:青錆
36	周盤5-9	表様	灯火器	7.6	4.6	65 内:溶け切らない白錆?
37	周盤4-10	表様	器入?	5.8		66 内:青釉 内:灰錆
38	周盤6-5	表様	片口	14.1	6.2	67 外:灰錆 内:白錆
39	表様	土板		22.0		68 外:上半灰錆 内:灰錆
40	周盤6-6	南側	切立	23.8		69 なまご錆
41	表様	蓋		12.7		70 内:灰錆 内:灰錆
42	南側	蓋		23.0	13.0	71 なまご錆
43	南側	鉢		30.0		72 なまご錆
44	南側	蓋		54.0		73 なまご錆

第5図 出土遺物 (2)



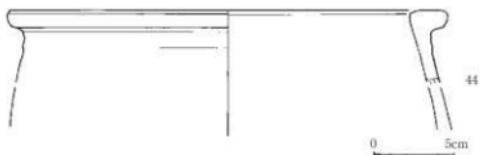
41



43



0 5 10cm



0 5cm

第6図 出土遺物（2）

に灰釉)である。爛徳利は図示できたものは1点である。口縁端部を摘み出し注ぎ口としている。白釉が施されている。破片資料の中に白土を施した後に呉須によって絵付けを行ったものもある(図版4-13)。

【杯】口径が6cm程度の小形のものである。体部は内湾気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。白釉と鉄釉が認められる。

【その他の器種】この他に甕・こね鉢・土鍋・切立・片口・灯火器・花入・餌入・火鉢・擂鉢などがあるが前三者以外は量的に少ない。甕は口径が25cm程度の小形のもの(42)と50cmを越える(44)大型のものとがある。42は未製品(素焼)であるが、44には黒釉の地に白釉を掛けた「なまこ釉」が施されている。土鍋は口径20cm程度の大きさで、口縁部は受口状を呈している。内面全面と外面の上半に鉄釉が施されている。

【窯道具・窯体】(図版6) 窯道具には製品を乗せるための敷板(図版6-6)や焼台(図版6-7~9)、窯内部に棚を組むための支柱(ツク)(図版6-10~15)などがあり、これらの他に棚板・トチンも出土している。ツクは法量的に三段階の大きさが認められた。耐火煉瓦の破片(12×14×15cm以上)が南側の集中地点から多数出土しており、窯体はこれらを積み重ねて構築しているものと考えられる。

IV.まとめ

須江家の北側から東側の尾根やその斜面には踏査しただけでも窯道具・陶器片の散布やいくつかの高まりが認められ、複数の「窯跡」が存在することが推定される。今回の調査地点は沢筋の中央にあたり、出土状況から窯や灰原の遺物が再堆積したものと考えられる。

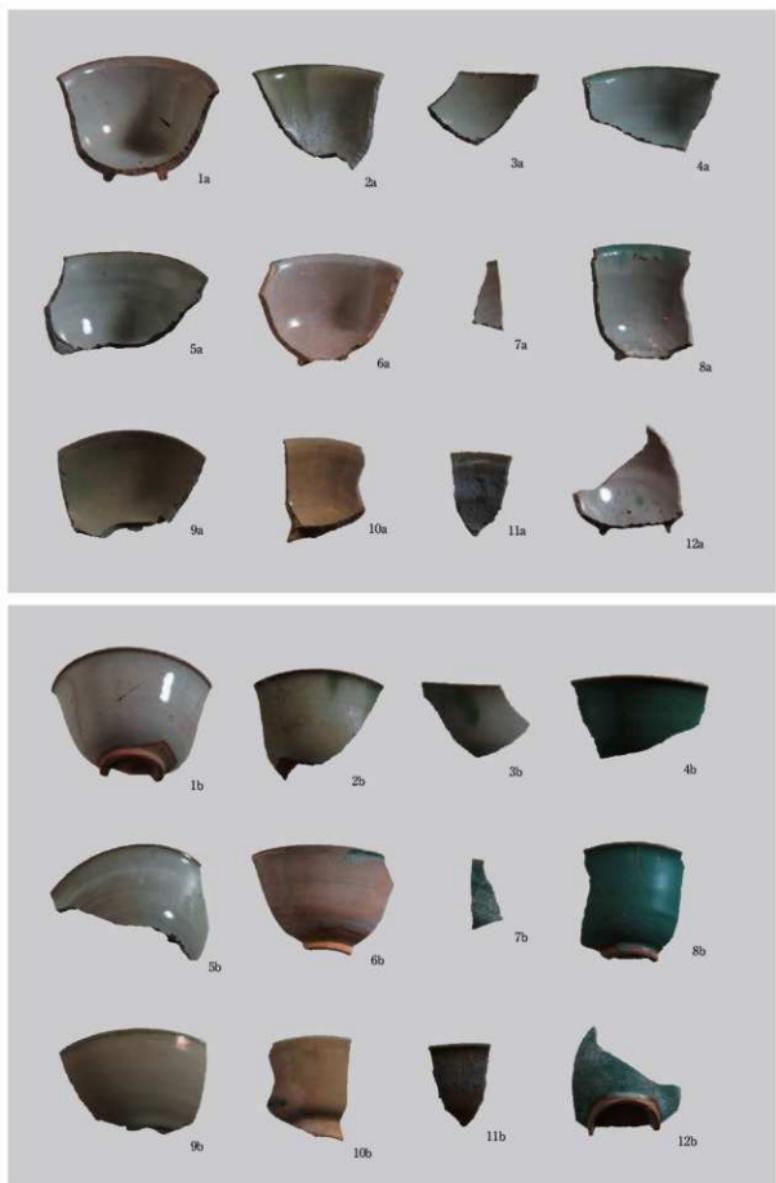
遺物には陶器・窯道具・窯体などがある。

陶器の器種には茶碗・皿・土瓶・徳利・杯・甕・鉢・切立・片口・土鍋・灯火器・花入・餌入・火鉢・擂鉢があり、量的には茶碗・皿が圧倒的に多い。このように小物類を中心として多様な器種を焼成するという状況は、甕類などの大型品に限定して焼かれていた仙台市堤焼とは異なるものであり、地方窯の生産体制や製品の需要、流通を知る上で興味深いものである。

焼成の状況は全体的に非常に良好で、茶碗・皿・土瓶・徳利などの小物類は非常に堅緻な炻器質に仕上げられ、胎土は淡灰色を呈するものが多い。一方、甕・鉢・切立・火鉢・擂鉢などの大型品や土鍋については焼成は堅緻であるが、胎土は小物類に比べて粗く黒っぽい色調を呈している。また、大型の甕類などでは器面に鉄の吹き出しの認められるものもある。

釉薬は全体的に白釉が多く用いられ、皿類では外面に青釉を流し掛けしたものも多く見られる。また、湯飲み・土瓶類に青釉を施したものが多い傾向がみられる。なまこ釉は甕・大型の鉢・切立などにみられる一方、碗・皿類などの小物類には一切ないことから重厚な大型品にのみ施釉されていたものと考えられる。

「絵付け」は茶碗・皿・土瓶・徳利などにわずかに認められた。施文の方法には生地に直接鉄や呉須で描いたものと生地に白土を施してから呉須で描いたものがあり、後者は磁器を意識して仕上げら



図版 1



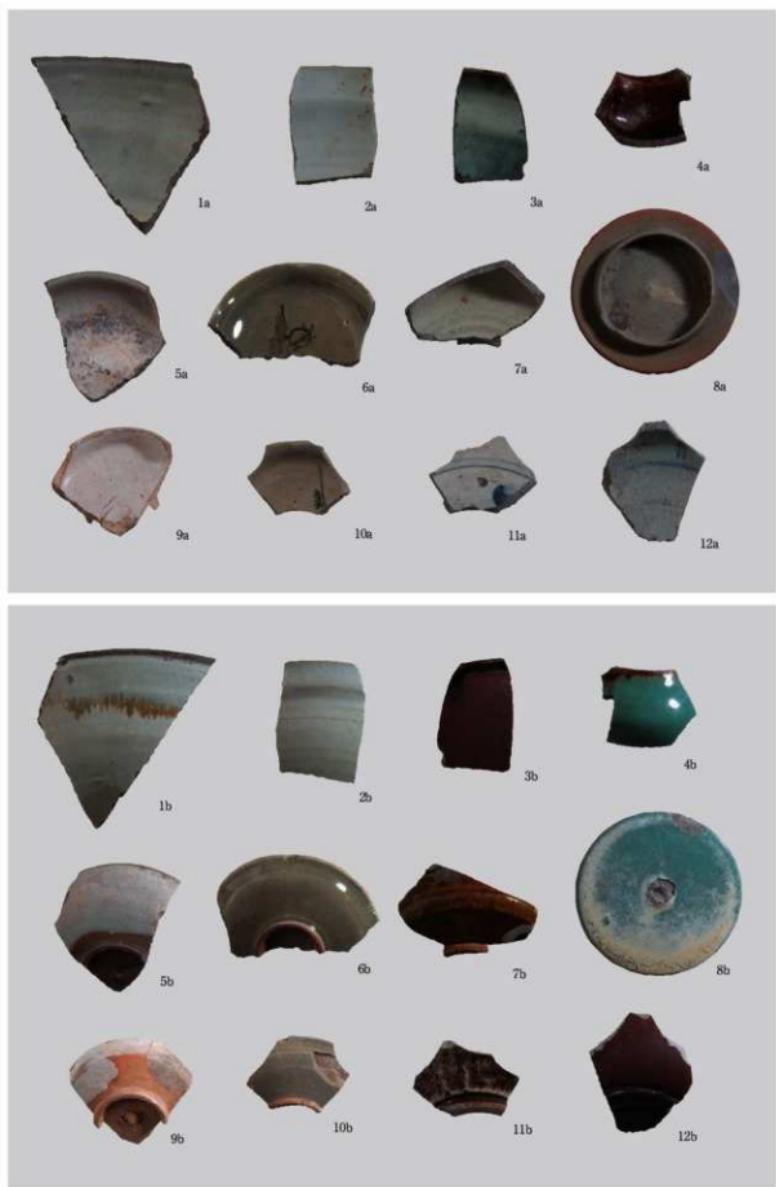
図版2



図版3



図版4



図版5



图版6

雄島遺跡

調査要項

遺跡名：雄島遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：17101 遺跡略号：RM）

所在地：宮城郡松島町字島

調査原因：災害復旧

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

佐藤則之 佐久間光平 須田良平 千葉直樹 生田和宏

調査期間：平成17年12月19日～12月21日

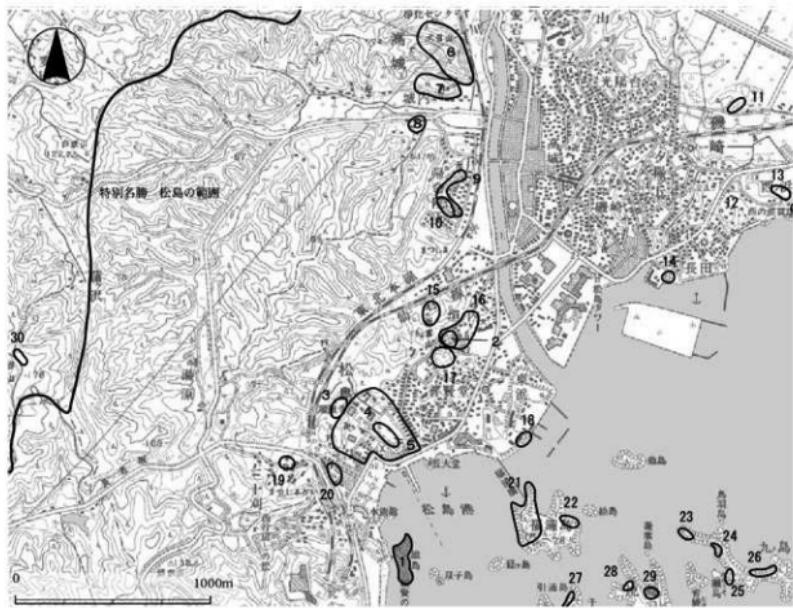
調査面積：13m²

調査協力：瑞巌寺 宮城県松島公園管理事務所

I. はじめに

1. 遺跡の環境

雄島遺跡は、宮城郡松島町字島地内に所在する。遺跡は宮城県の太平洋岸のほぼ中央にあたる松島湾の北西部に位置する、南北約200m、東西約50mの特別名勝松島内の小島である。周辺には縄文時代から古代にかけて数多くの貝塚や製塩遺跡、中・近世の寺院跡・城館跡・塚などがあるほか、瑞巌寺に関わる遺跡が点在する（第1図）。瑞巌寺は伊達家の菩提寺として慶長14年（1609）に建立されたが、その前身として天長5年（828）に慈覚大師円仁が開山した天台宗延福寺、正元元年（1259）、現在の瑞巌寺境内に建立された鎌倉幕府直轄の臨済宗円福寺があったと伝えられる。なお、延福寺は松島寺跡にあると推定されているが確証はなく、その位置や規模は不明である。



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	雄島遺跡	島地	散布群	中世	16	雄島浜貝塚	海岸	貝塚	縄文末・中
2	松島小塚	丘陵	寺院	縄文	17	新宮山貝塚	丘陵	貝塚	縄文末・早
3	瑞巌寺裏遺跡	丘陵	散布地	古代	18	通向崎貝塚	丘陵	貝塚	縄文
4	瑞巌寺境内遺跡	丘陵	製塩・寺院・散布地	古式・中世	19	三十戸遺跡	丘陵地	散布地	縄文末・後
5	瑞巌寺側面遺跡	丘陵麓	寺坂	近世	20	鶴合全浦遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文末
6	大日山山頂跡	丘陵	城館	中世	21	麻森高川尾・通地川遺跡	島嶼	貝塚・製塩	縄文末・晚・後世・古代
7	大日山山頂周辺山城跡	丘陵	城館	室町	22	麻森島日御前	島嶼	貝塚・製塩	古代
8	尾山寺跡	丘陵	寺院	近世	23	丸ノ島日御前	島嶼	貝塚・製塩	古代
9	雄島院下西留遺跡	丘陵	洞窟遺跡	不明	24	丸ノ島貝塚	島嶼	貝塚・製塩	縄文晩・後世・古代
10	雄島院下石塚	丘陵	貝塚	不明	25	丸ノ島C貝塚	海岸	貝塚・製塩	古式
11	洞遺跡	丘陵	散布地	古代	26	丸ノ島D貝塚	海岸	貝塚・製塩	古代
12	国井跡・西の浜貝塚	丘陵麓	丘塚・類塚	縄文末・後・後世・平安	27	引島山貝塚	島嶼	貝塚・製塩	縄文晩
13	新田B遺跡	海岸	貝塚	奈良・平安	28	地島B貝塚	海岸	貝塚・製塩	古代
14	新島B塚	丘陵	貝塚	縄文前・後・後世	29	地島貝塚	島嶼	貝塚・製塩	縄文末・後・古代
15	蛇・鳴石遺跡	丘陵	散布地	不明	30	壁上十三塚	丘陵尾根	十三塚	室町

第1図 雄島遺跡と周辺の遺跡

2. 雄島について

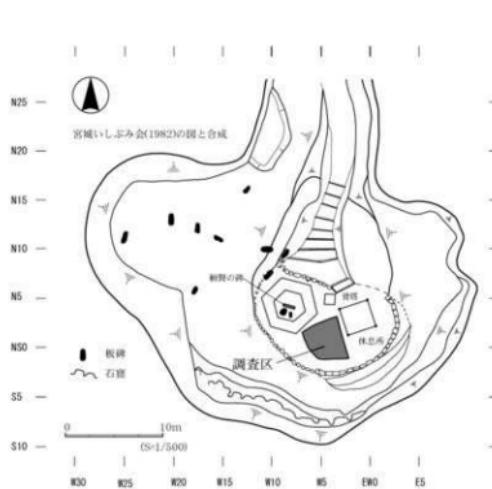
雄島は古くは「御島」と呼ばれ、その由来は、雄島の妙覚庵で法力を得た見仏上人の評判が鳥羽天皇に伝わり、元永2年（1119）に姫小松千本・本尊・法器が下賜されたので、鳥羽天皇を憚って「御島」と表記されるようになったと伝える。重要文化財頼賢の碑は、この見仏上人の再来とあがめられた妙覚庵主頼賢の徳行を後世に伝えようと、弟子30余人が徳治2年（1307）に建てたものである。また雄島を含む中世松島の景観を示す資料に『一遍上人絵伝』や『墓帰絵詞』が伝わるほか、觀応年間（1350～52）に松島を訪れた宗久の紀行『都のつと』には、雄島には寺があつて「来迎の三尊ならびに地蔵菩薩」が安置されており、その付近には「此の国人はかなく成にける遺骨を納むるところ」があったと記され、14世紀中頃には納骨の場であったことが知られる。

雄島は南北に並ぶ3つの小丘からなる。それぞれの小丘には、北から松吟庵、座禅堂、頼賢の碑があるほか、多くの板碑や石窟などが群在する（第2・3図）。板碑は、碑面の紀年から弘安8年（1285）から明徳2年（1391）にかけて造立されたもので（松島町 1991）、石窟は13世紀頃から造営が始まり、江戸時代後期に現状になったと考えられている（瑞巌寺 2005）。

一方、中央の丘に建つ座禅堂には2基の大型板碑があり、昭和63年に松島町史編纂事業に伴う発掘調査が実施されている（松島町 1991・佐藤 1992）。そして岩盤である凝灰岩を切り出して造られた祭壇状遺構、納骨遺構、板碑、板碑の据え付け穴などが検出されたほか、瀬戸産の小壺と盤、永楽通寶、人骨片などが出土し、14世紀前葉の大型板碑の前に建てられた小型板碑の造営は14世紀末まで、火葬骨の納骨は15世紀前半まで続けられたと考えられている。



第2図 雄島遺跡の板碑と石窟



第3図 調査区の位置

2. 調査の方法と経過

賴賢の碑付近で、風雨等での土壌流出によって遺構・遺物が露出しているとの瑞巖寺宝物館の新野一浩氏の連絡があり、これを早急に保護することが必要となった。そこで保護する遺構・遺物の状況を確認することを目的に平成17年12月19日から調査を開始した。19日には賴賢の碑の南東に調査区を設定した後、表土を剥ぐ際に10cmほど掘り下げていくと、多くの円礫と炭化物片、人骨片とともに、納骨跡5基、土壤跡1基、溝跡1条などを発見したため、より下層の調査は行わなかった。20日にはこれらの精査と記録を行った。21日には前日に引き続き遺構の精査と記録を行った後、埋め戻し後にも再度露出する可能性が高いSK04のみを完掘し、調査を終了した。そして24日には瑞巖寺宝物館によって埋め戻しが行われた。なお、調査区周辺の地形図を作成するため、平成19年1月23日に測量調査を行った。

また、調査区や遺構平面図を作成するにあたり、調査区付近に任意の測量基準点を2点設置した後、それを基準に電子平板で複数の点を落とし、それを利用して平面図を縮尺1/10で、断面図を1/20と1/10で適宜作成した。地形測量には電子平板を使用し、発掘調査の際に取得した2点を基準とした。また写真撮影にはデジタルカメラ（800万画素）を使用した。

II. 調査結果

1. 層序

堆積状況が良好な調査区東壁では、表土から地山岩盤まで自然堆積層が2層に大別できた（第4図）。I層は表土で多くの円礫と炭化物片、人骨片を含む。II・III層はいわゆる地山で、II層はしまりのない自然堆積層、III層は凝灰岩の岩盤である。第I～III層とも、調査区の北から南に向かってゆるやかに傾斜するが、II層は調査区中央から南にかけてのみ残存する。SK01・02・04・05・06はII層を、SD03・SK07は地山を掘り込んで形成されている。

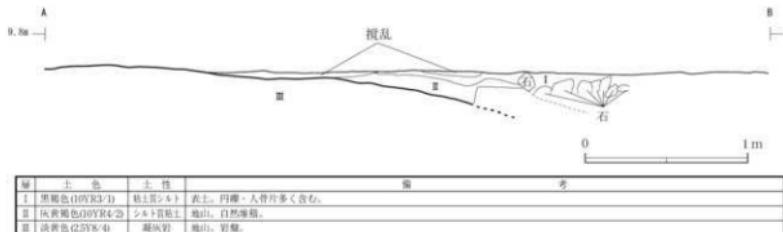
2. 発見した遺構と遺物

納骨跡を14箇所、土壤1基、溝1条を発見した（第5図）。

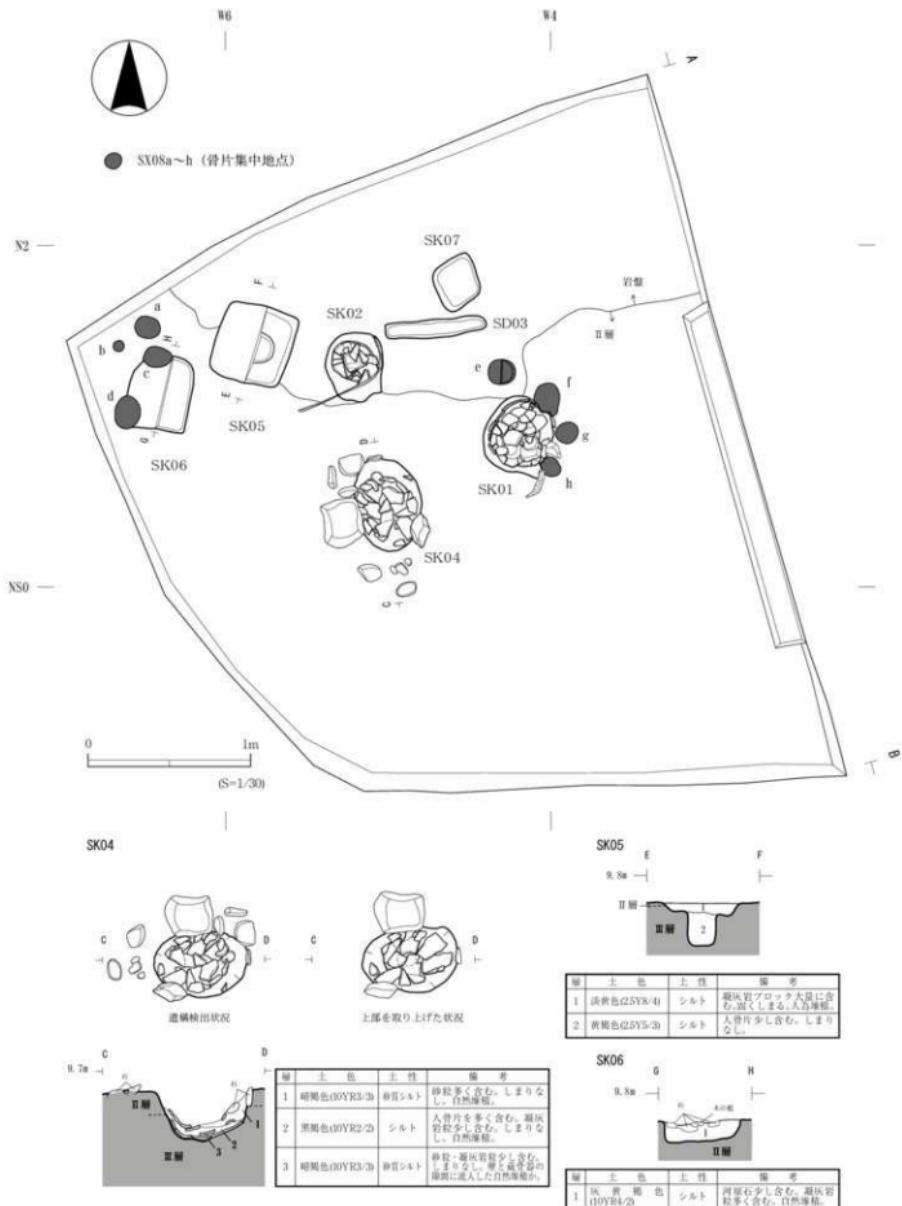
（1）納骨跡

【SK01】

東西0.45m、南北0.52mのほぼ円形の穴の中央に骨蔵器を正位で納める。骨蔵器の中には南側に向



第4図 基本層断面図



第5図 遺構配置図と断面図

かって倒れた口縁部と体部の破片・円礫が重なっていた。堆積土は骨片を少し含む自然堆積層で、掘り方埋土との区別は明確でない。遺物は火葬骨片（図版3-6）が出土したほか、SK01南の表土からこの骨蔵器の破片である涅美産の壺の口縁（第6図-1）が出土した。

【SK02】

東西0.36m、南北0.43mのほぼ円形の穴の中央に骨蔵器を正位で納める。骨蔵器の中には口縁部と体部の破片が重なっていた。堆積土は地山由来の凝灰岩ブロックを多く含む掘り方埋土と、骨片を少し含んだ骨蔵器内の埋土とに分けられる。遺物は火葬骨片（図版3-7）と板碑小片が出土した。また、SK04付近の表土とSK04堆積土からこの骨蔵器と同一個体の壺の口縁（第6図-2）が出土した。

【SK04】

東西0.41m、南北0.57mの楕円形の平面で、深さ0.32mの穴中央の底面に底部を密着させた骨蔵器を正位で納める。体部破片が外側に倒れた骨蔵器の中には、体部の破片が重なっていた。堆積土は3層に分けられるが、いずれも地山由来の凝灰岩粒を含む自然堆積層である。よって、堆積土中の火葬骨片には骨蔵器に納められたものと、骨蔵器周辺の堆積土から流れ込んだものが混じっているとみられる。堆積土からは火葬骨片（図版3-10）、五輪塔・板碑片、鉄釘（図版3-5）が出土した。

【SK05】

一辺0.47mでの隅丸方形の平面で、深さ0.25mの断面凸形となる穴である。地山由来の凝灰岩の人が堆積土で埋め戻されている。底面から火葬骨片（図版3-8）が出土した。

【SK06】

東西0.38m、南北0.47mの隅丸長方形の平面で、深さ0.1mの穴である。堆積土は円礫と地山由来の凝灰岩粒を含む自然堆積層である。遺物は火葬骨片（図版3-9）、銭貨「熙寧元寶」（図6-4）が出土した。

【SX08】

径0.07~0.2mの円形の平面に骨片が集中した範囲が8箇所ある。eは深さ約0.05mである。堆積土と掘り方埋土との区別は明確でない。cとdはSK06より新しいが、SK01とf・hの新旧関係は確定できなかった。遺物は出土しなかった。

(2) 土壙跡

【SK07】

一辺0.28mの隅丸方形の平面形である。堆積土は地山由来の凝灰岩粒を少し含む自然堆積層である。その形状から納骨跡の可能性もある。遺物は出土しなかった。

(3) 溝跡

【SD03】

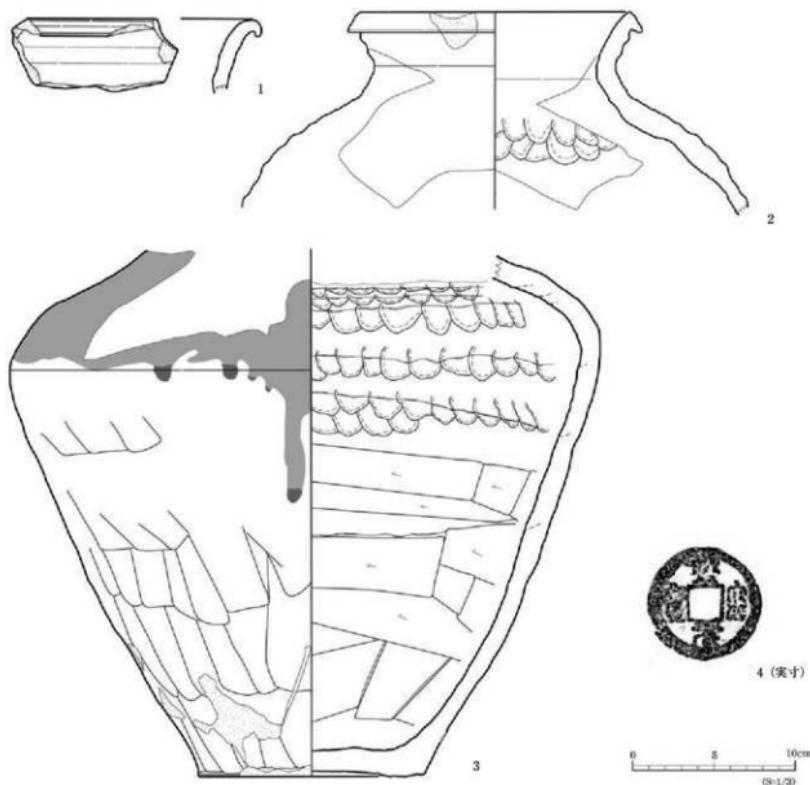
0.62×0.12mの平面形である。堆積土は地山由来の凝灰岩ブロックを少し含む。その形状から板碑を据え付ける穴であった可能性がある。遺物は出土しなかった。

(4) 表土の出土遺物

【陶磁器】

すべて小破片である。陶器には、古瀬戸の瓶子か壺の体部（第7図-1）、浅い沈線が4条入る壺の肩部（第7図-2）、瓶の口縁（第7図-3）、壺の体部（第7図-4）などがある。第7図-1は植物文の陰刻がある。古瀬戸中期様式で13世紀末～14世紀中葉とされる（藤澤 2005）。磁器には青白磁の合子蓋（第7図-5）、青白磁の破片（図版4-2）がある。（第7図-5）の外面には双鳳文が描かれる。森本分類のⅢ群にあたり、12世紀末以降に多く出土するとされる（森本 2003）。

【五輪塔・板碑】



第6図 納骨跡の出土遺物

No.	遺物/層	種別/器種	産地	残存有	寸法(cm)			特徴	写真図版	登録
					L	W	H			
1	SK01	骨磁器	陶器 壺	深美	口縁小片	-	-	内側：施墨、外：コバルトに発色。【厚美】段階末～第Ⅲ段階】	3-1	R-3
2	SK02	骨磁器	陶器 壺	在地+	口縁1.6	(16.5)	-	内：(壺部) 施オサエ、胎土：紫色がかった青灰色で、紫斑 色の付いたややくつき出で。	3-2	R-2
3	SK04	骨磁器	陶器 広口壺	常滑	底盤～ 胸部	胴径36.2	14	内：(底盤) フラット、底盤：ヘタケズリ 内：上盤 (胸部) 外：オサエ (底部) 中盤：ヘタケズリ 胎土：緑被合灰頭者 下盤：ヘタナデ 【常滑2～4笠式瓶か】	3-3	R-1
4	SK06	埋植土	銭貨		18.24	-	-	昭和元年銭 (北宋、約1068年)	3-4	R-13

すべて凝灰岩製で、空輪（第7図-6・8）、風輪（第7図-7）、空輪と風輪を一体につくるもの（第7図-9）、地輪（第7図-10）などがある^(注2)。大型（第7図-9・10）と小型（第7図-6～8）に分けられる。小型の年代は、五輪塔の小型化が進む室町時代以降と考えられる（川勝 1981）。また地輪の内面には盤状の工具で加工した痕跡が明瞭に残る。板碑の破片とみられるものには、本遺跡に人为的に持ち込まれた、いわゆる井内石製の粘板岩（図版4-12）と玄昌石（図版4-13）がある。

【その他の遺物】

火葬骨片と円礫がある。円礫には墨書等の痕跡は確認されなかった。本遺跡に人为的に持ち込まれたもので、楕円形で長軸15～20cm（図版4-14・15）のものと、円形で径10cm程（図版4-16・17）のものとに分けられる。

III. 考察

1. 納骨跡の種類

1988年に発見された納骨跡も踏まえると、雄島遺跡の納骨跡はA類：陶製の骨蔵器が納められるもの、B類：骨片が集中するもの、C類：石組みや穴に納めるものに分類できる。なおB類は有機質の骨蔵器に納めた跡とされ（佐藤 1992）、高野山奥ノ院ではその上部に石造塔婆が建立されたと想定されている（西山 1982）。またC類には陶器や銭貨と一緒に納めるものもある。本調査区ではA類を3基（SK01・02・04）、B類を8基（SX08）、C類を2基（SK05・06）発見した。なお、調査区は大きく削平されていること、石が現位置をとどめていないことから、SX08はC類となる可能性もある。

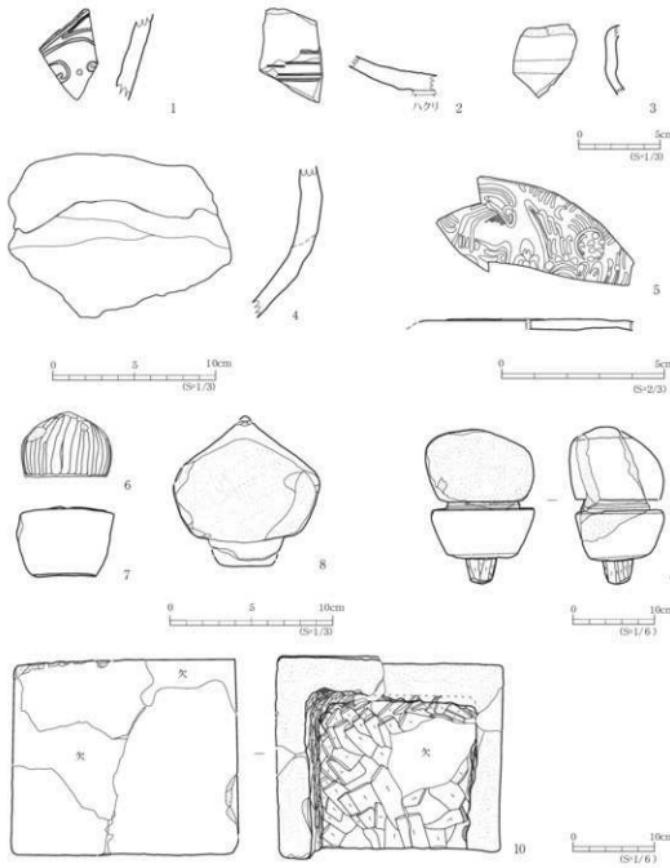
2. 納骨跡の年代

まずA類について、SK01骨蔵器の渥美産壺の口縁は端部を折り返す形状が渥美窯編年の第1段階末～第2段階にかけてのもので、コバルトの釉色は鎌倉時代からあるという^(注3)。よって年代は、12世紀末～13世紀前葉と考えられる（小野田 1977）。またSK04骨蔵器の常滑産広口壺は、胴部最大径の位置が高めで、底部から胴部への立ち上がりが直線的に広がる特徴が、常滑窯編年の2～4期と考えられる。年代は12世紀後半～13世紀前葉とされている（中野 1994）。次にSK02骨蔵器の壺は、胎土や焼成の特徴が東海諸窯産とは異なるので在地窯産とみられるが、出土例からは産地を特定するには至らなかった。しかし、一般的に在地窯の陶器生産は13世紀中葉頃からはじまり（飯村 1995）、14世紀後半以降には一齊に生産を終了することから（高橋 2002）、年代は13～14世紀後半とみておきたい。したがって骨蔵器の年代は、12世紀後半から14世紀後半までと考えられるので、A類の年代もその頃を想定しておきたい^(注3)。

次にB類について、SX08のc・dはC類のSK06より新しい。しかしA類のSK01との新旧関係は平面検出のため確定できなかった。またC類について、SK05は出土遺物がなかったこと、SK06出土「熙寧元寶」（1068年初鑄）などの銭貨は伝世年代が大きい傾向にあることから、ともに年代は確定できなかった。ただし、1988年調査で発見されたB・C類は14世紀前葉～15世紀前半であること（松島町 1991・佐藤 1992）、高野山奥ノ院では14世紀を境としてA類が減少しB類が増加すること（西山 1982）から、B・C類の出現時期はA類より新しい可能性を想定しておきたい。

3. 納骨の場の形成とその背景

最も早く本格的な納骨の場が成立した高野山奥ノ院では、12世紀前半から中頃には納骨が行われており（藤澤 1978・西山 1982）、全国的な火葬普及の開始期は12世紀後半とされ（狭川 2006）、とも



No.	遺構・層	材別・器種	產地	残存	寸法(cm)	特徴	参考図版	便・註
1	表土	陶器 瓶子・壺	織田	体部小片	-	外: 花文 オリーブ色の釉 【古瀬戸中筋様式瓶】	4-3	R-7
2	表土	陶器 壺	脇部小片	-	-	外: 沈瓶3条	4-6	R-4
3	表土	陶器 壺	口縁小片	-	-	-	4-5	R-15
4	表土	陶器 壺	体部小片	-	-	簡便系か	4-7	R-9
5	表土	青白磁 合子壺	茶德窯	天舟瓶1号	-	内: 施釉 外: 双股文 【吉本分類官部】	4-1	R-5
6	表土	五輪塔 小輪	日吉定形	16.2	断: 宝珠状 外: ケズリ 風輪との境で欠損	-	4-9	R-8
7	表土	五輪塔 小輪	1/2	19.5	-	-	4-10	R-17
8	表土	五輪塔 小輪	1/6	-	-	断: 渡台形狀 空輪との境で欠損	4-8	R-16
9	表土	6輪塔 空・風輪	空輪1/2 風輪2/3	空輪14.5 風輪径12.9 高20.5	-	空輪と風輪を一体につくる	4-11	R-10
19	表土	五輪塔 地輪	2/3	24.5×27.6	-	-	4-18	R-11

第7図 表土の出土遺物

に皇族や貴族・僧侶などの階層から除々に在地の民衆へ広がっていったと考えられている。本調査区の納骨跡や火葬骨もこの状況を反映しているとみられる。特に12世紀に遡る可能性があるSK01・04や、高級品の青白磁の合子は、高い階層の人々や高位の僧侶が納骨されたことを示すものであろう。一方、納骨の場が成立していく背景には、故人は仏の垂迹である聖人の膝元に納骨されることで彼岸への往生が約束されるという、本地垂迹思想と浄土思想の高揚が深く関係するとの指摘がある（佐藤 2003）。とすれば、雄島におけるこの聖人は、見仏上人やその再来とされる頼賢にあたることが考えられよう。

IV.まとめ

1. 納骨跡を14箇所、土壙1基、溝1条を発見した。納骨跡は3種類ある。A類：陶製の骨蔵器に納めたもの3基、B類：骨片が集中したもの8基、C類：穴に納めたもの2基である。
2. 雄島への納骨は延福寺期には行われていた。A類の年代は12世紀後半～14世紀後半と考えられる。またB・C類の年代は不明であるが、出現時期はA類より新しくなる可能性がある。
3. 納骨は、妙覺庵主である見仏上人や頼賢の膝元であった場所に骨を納めることによって、彼岸への往生が約束されると信じた人々によって行われた。その納骨者について、高い階層の人々や僧侶からはじまり、在地の人々へも除々に広がっていったと考えられる。

註1 陶磁器全般は、多賀城市埋蔵文化財調査センターの千葉孝弥氏、渥美窯の陶器は小野田勝一氏のご教示を賜った。

註2 五輪塔・板碑は元興寺文化財研究所の狭川真一氏、瑞巖寺宝物館の新野一浩氏のご協力を賜った。

註3 陶磁器の多くは伝世するとの考え方をとると（藤澤 2001）、本調査区の納骨跡の年代も新しくなる可能性もある。

引用・参考文献

- 飯村均 1995 「東北諸窯」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
入間田宣夫編 2005 「東北中世史の研究 下巻」高志書院
小野田勝一 1977 「渥美」「世界陶磁全集3 日本中世」小学館
川勝政太郎 1981 「新版 石造美術」誠文堂新光社
狭川真一 2006 「墓制の画期と地域」『鎌倉時代の考古学』高志書院
佐藤弘夫 2003 「靈場の思想 歴史文化ライブラリー-164」吉川弘文館
佐藤正人 1992 「靈場雄島を発掘する」「みちのくの都 多賀城・松島（よみがえる中世7）」平凡社
瑞巖寺 2005 「靈場・松島」
高橋博志 2002 「陶器生産と陶磁器流通」『鎌倉・室町時代の奥州 奥州史研究叢書4』高志書院
田中則和 2006 「岩切東光寺周辺と青葉山の「靈場」「中世の聖地・靈場」」高志書院
中野晴久 1994 「生産地における編年について」「中世常滑焼をとて」資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所
西山要一 1982 「出土陶磁器から見た高野山納骨と生活雑器」「高野山発掘調査報告書」（財）元興寺文化財研究所
藤澤典彦 1978 「納骨信仰の展開」「日本仏教民俗基礎資料集成」第2巻 中央公論社
藤澤良祐 2001 「埋納された古瀬戸製品」「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」XⅣ 瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐 2005 「施釉陶器生産技術の伝播」「中世窯業の諸相」中世窯業の諸相実行委員会
松島町史編纂委員会 1991～1993 「松島町史 通史編I・II 資料編I」
宮城いしぶみ会 1982 「松島の板碑と歴史」
新野一浩 2006 「雄島西側海底表探板碑について」「遺跡研究の方法 東北中世考古学の12年」東北中世考古学会
森本朝子 2003 「博多遺跡群の合子について」「博多研究会誌」第11号



1. 雄島遺跡南端遠景（西から）



2. 輹賀の碑の鞘堂（北から）



3. 調査区全景（北西から）

図版1 調査区周辺と遺構検出状況



1. 土層堆積状況（西から）



2. SK01・SX08e～h検出状況（東から）



3. SK02検出状況（西から）



4. SK03・07とSX08a～d（東から）



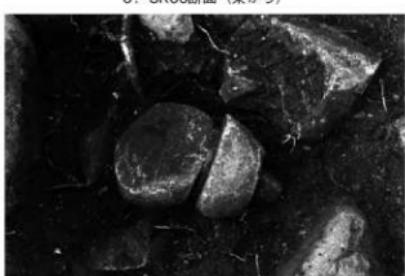
5. SK05断面（東から）



6. SK06断面（東から）

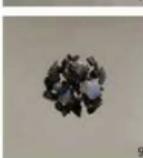


7. SK04下部検出状況（南から）



8. 五輪塔出土状況（南から）

図版2 検出遺構と遺物の出土状況



1・4 SK01
2・7 SK02
3・5・10 SK04
8. SK05
9. SK06
4. SK06 「熙寧元寶」

1・3 (S=1/3)
4 (実寸)
5 (S=2/3)
6-10 (S=1/6)

図版3 納骨跡の出土遺物



図版4 表土の出土遺物

そで の だ 袖 野 田 遺 跡

調 査 要 項

遺 跡 名：袖野田遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：11074）

所 在 地：宮城県塩竈市袖野田190、191-9の一部

調 査 原 因：共同住宅新築

調 査 主 体：宮城県教育委員会

調 査 担 当：宮城県教育委員会

佐藤則之 柳澤和明 須田良平

櫻井利和（塩竈市教育委員会）

調 査 期 間：平成18年6月6・12日

対 象 面 積：約998m²

調 査 面 積：約41m²（確認調査36m² 本発掘調査5m²）

調 査 協 力：塩竈市教育委員会

I. 遺跡の概要

本遺跡は奈良・平安時代の散布地で、陸奥国府多賀城跡の東約650m、多賀城廃寺跡の北北東約600mに位置する。多賀城市小沢原遺跡、野田遺跡と隣接している（第1・2図）。

今回発掘調査を実施した地点は、平安時代の建物群が検出された小沢原遺跡第1・2次調査区の北東約270mに位置し、南に緩やかに傾斜する丘陵上にある（第1図）。地形的にみると、本遺跡と小沢原遺跡は南に緩やかに傾斜する同じ丘陵上に立地し、一連の遺跡の可能性もある。

小沢原遺跡については多賀城市教育委員会が8次にわたる発掘調査を実施し、平安時代の掘立柱建物跡5棟、竪穴住居跡3軒、柱列1条、土器埋設遺構1基などを検出している（多賀城市教育委員会 1997・1999・2000）。掘立柱建物跡はいずれも平安時代のものとみられ、桁行5間以上、梁行3間と規模の大きな南北棟が1棟ある。国府多賀城に勤務した9世紀後半以前の官人層居宅跡の一部と推定されている。竪穴住居跡からはロクロ調整の土師器が出土し、9世紀代のものとみられる。

また、東隣の野田遺跡では本調査地点の東約130mで第1次調査、東側約400mで第2・3次調査を多賀城市教育委員会が実施している（多賀城市教育委員会・塩竈市教育委員会 2005）。第1次調査区では区画施設の一部をなす時期不明の溝・小柱穴列、第2・3次調査区では奈良・平安時代の竪穴住居跡、溝、土壙などが検出されている。

II. 調査の概要

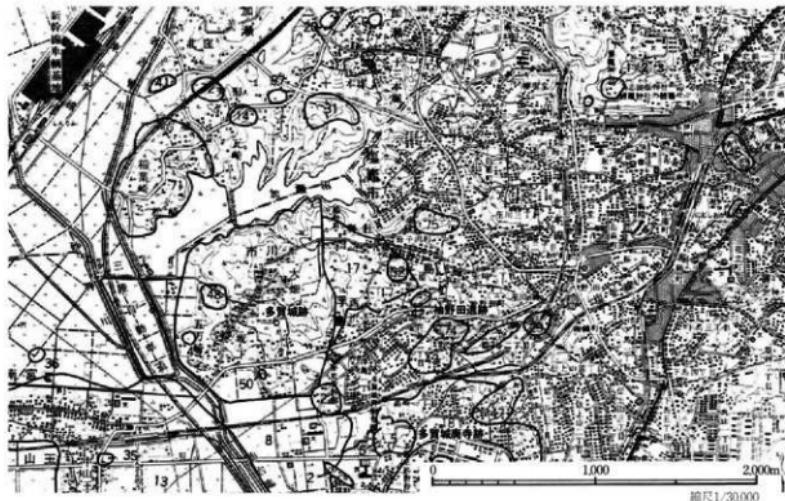
2棟の共同住宅建築予定箇所と道路設置箇所に幅1.0~2.2m、長さ2.2~7.3mのトレンチ計7箇所を設置し、確認調査を行った（第3図）。その結果、T2を除くT1・3~7の各トレンチから遺物を少量含む褐色土の自然堆積層を検出した。開田されたため北側は削平されているが、南に緩やかに傾斜する旧地形に沿って、この堆積層が調査対象地の南半に広く分布する。また、T5トレンチの堆積層の北側で柱穴1、T7トレンチの堆積層の北側でピット1を検出した。柱穴は一辺60cmの方形で、堆積層の北側に展開する古代の掘立柱建物跡の一部とみられる。共同住宅建築予定箇所については、この堆積層・地表面以下まで掘削が及ばないよう工法を変更していただけたので、確認調査にとどめた。道路設置箇所のT1トレンチで検出した堆積層については事前調査を行った。この箇所での堆積層の深さは60cm前後で、古代の土器片が少量含まれていた。

堆積層の出土遺物には、須恵系土器小型壺・壺・高台壺・高台皿、土師器壺・甕、須恵器壺・蓋・甕・甕、平瓦（多賀城跡分類ⅡB類）の破片が少量ある（第4図）。多賀城跡出土と同様の須恵系土器小型壺が含まれることから、10世紀中葉頃のものとみられる。

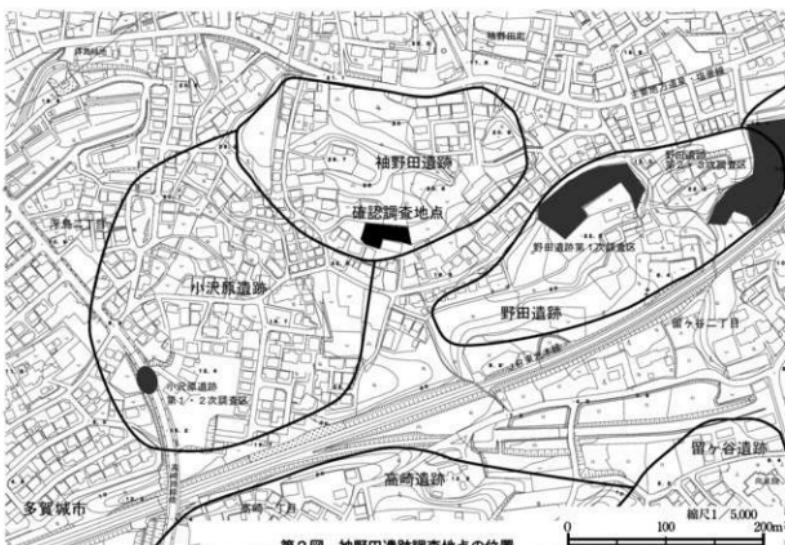
以上のことから、今回の調査地点の北側に遺跡の中心があると推定される。

引用文献

- 多賀城市教育委員会 1997 「小沢原遺跡－第3次調査報告書－」多賀城市文化財調査報告書第46集
多賀城市教育委員会 1999 「小沢原遺跡・高崎遺跡・史跡連絡線関連遺跡発掘調査報告書－」多賀城市文化財調査報告書第54集
多賀城市教育委員会 2000 「多賀城市埋蔵文化財センターワーク－平成11年度－」
多賀城市教育委員会・塩竈市教育委員会 2005 「野田遺跡・矢作ヶ館跡」多賀城市文化財調査報告書第79集・塩竈市文化財調査報告書第7集

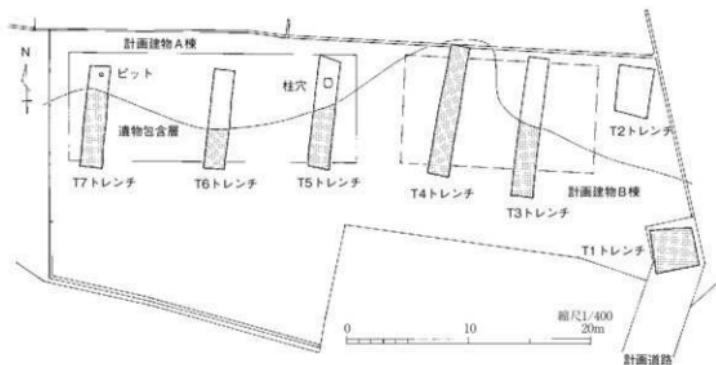


第1図 袖野田遺跡と周辺の遺跡



第2図 袖野田遺跡調査地点の位置

※ 多賀城市建設部都市計画課提供のCD-ROM版「仙塩広域都市計画図（平成13年3月作成）」を利用して作図



第3図 確認調査区平面図



第4図 出土遺物

1. T4トレンチ（南東より） 2. T5トレンチ（南東より）



3. T5トレンチ検出柱穴



4. T1トレンチの調査状況
遺物を含む最下層の堆積層
(北東から)

さん が もり
三ヶ森 遺跡

調査要項

遺跡名：三ヶ森遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：25043）

所 在 地：宮城県黒川郡富谷町志戸田字三ヶ森6

調査原因：個人住宅建て替え

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

佐藤則之 柳澤和明 須田良平

調査期間：平成18年5月16・17日

対象面積：約246m²

調査面積：約80m²

調査協力：富谷町教育委員会

I. 遺跡の概要

本遺跡は古墳・平安時代、中世・近世の集落跡で、吉田川右岸の富谷丘陵の東端部上に立地する（第1・2図）。本遺跡は黒川郡家と推定される大和町一里塚遺跡の南約1kmに位置し、調査地点の北西約270mには式内社の行神社がある。

本遺跡については、国道4号線拡幅事業に伴い、富谷町教育委員会が調査主体となり、平成8年度に確認調査（調査面積約1,000m²）、平成10年度に本発掘調査（調査面積約4,000m²）を実施している（富谷町教育委員会 1999）。

この本発掘調査では、古墳時代の塙釜式期の堅穴住居跡1棟、平安時代の区画溝1条、中世・近世の掘立柱建物跡多数などを検出している。特に平安時代の区画溝は、東西30m以上、南北87m以上を方形に区画するもので、この区画の北西部を検出している。区画の西辺は北で東に約6°偏り、北西隅から南に約18m（60尺）の位置で約1.8mにわたって途切れしており、通路とみられる。

今回、確認調査を実施した地点は、この古代の区画北西隅より北西約60mの地点に位置し、遺跡の北端付近に位置している（第1・2図）。

II. 調査の概要

個人住宅の建て替え箇所約80m²について確認調査を行った結果、古代とみられる掘立柱建物跡4棟の他、古代以降とみられる土壙3基、溝1条、ピット2を検出した（第3図）。調査区北半部は搅乱によって地山面下まで大きく削平されており、削平箇所に柱穴等の遺構が存在していた可能性もある。遺構面に盛土し、遺構面を掘削せずに住宅の建て替えをすることに申請者の同意が得られたため、遺構の掘り下げ、断ち割りは行わなかった。

建物1～3は調査区南東部に位置し、規模は不明である。建物1は南北2間以上、東西2間以上の建物跡である。掘方は一辺60cm前後の方形で、柱は抜き取られている。西側の柱列でみると柱間は約20m（1間分）と推定され、方向は北で東に約18°偏る。建物2は建物1より新しい東西1間、南北1間以上の建物である。掘方は一辺40cm前後の方形で、2箇所で径15cmの柱痕跡を確認した。東側の柱列でみると柱間は約2.1m（1間分）で、方向は北で東に約13°偏る。建物3は建物1より古い柱穴から推定したものである。掘方は一辺90cmと大きく、径20cmの柱痕跡を確認した。柱痕跡には焼土が含まれ、焼失したとみられる。建物4は調査区北西部で検出した柱穴から推定したものである。掘方は一辺1.1mと大きい。

建物2よりも新しいピットから回転糸切り無調整の須恵器壺、調査区中央の土壙から非ロクロ調整の土師器壺、須恵器壺など8・9世紀代の土器破片や石器碎片が少数出土した（第4図）。

今回の確認調査の結果、平成10年度の本発掘調査で明らかになった古代の区画の北西外側にも古代の掘立柱建物跡が広がることが判明した。建物の柱穴掘方が大きく、一般集落跡の建物跡とは異なることから、官衙関連遺跡の一部である可能性もあり、注目される。

引用文献

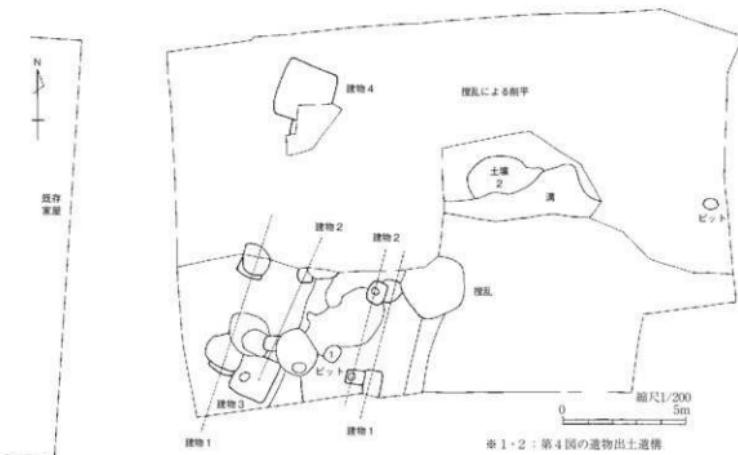
富谷町教育委員会 1999 「三ヶ森遺跡発掘調査報告書－国道4号線拡幅に伴う埋蔵文化財の調査－」富谷町文化財調査報告書第2集



第1図 道路の位置



第2図 調査地点の位置（黒塗箇所）



第3図 検出した遺構



第4図 出土遺物



1. 遺構検出状況（南東より）



2. 遺構検出状況（北東より）



3. 遺構検出状況（北西より）

まち
町

がしら
頭

づか
塚

調査要項

遺跡名：町頭塚（宮城県遺跡地名表登載番号：62049）

所在地：宮城県本吉郡本吉町馬籠字町頭35-3

調査原因：遺跡復旧

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

佐藤則之・須田良平

三浦通明（本吉町教委） 佐藤賢治（本吉町）

調査期間：平成18（2006）年10月31日・11月1日

対象面積：4 m²

調査面積：4 m²

I. 塚の概要

町頭塚は、本吉郡本吉町馬籠字町頭に所在し、JR気仙沼線本吉駅の南西約5.7km、国道346号線と県道鱒淵線の交差点の西側に位置する。

海岸部の本吉町中心部から登米市東和町米川に抜ける旧街道（国道346号線）は馬籠川と平行して西走するが、馬籠集落の西約500mにおいて、旧街道は北西に向かう僻道となり、馬籠川とそれに沿う県道は南西へと分岐する。塚はその分岐点の、馬籠川左岸、標高86m付近に立地する。

塚は薬師堂境内にあり、『安永風土記御用書出』（1780）には薬師堂の記載はあるが、塚の記載はない。本吉町誌によれば、薬師堂裏の塚は地元では尼公塚ともよばれ、飯坂の佐藤莊司勝信室養光尼の墓だといい、供養塚と推定されている（本吉町誌編纂委員会 1982）。

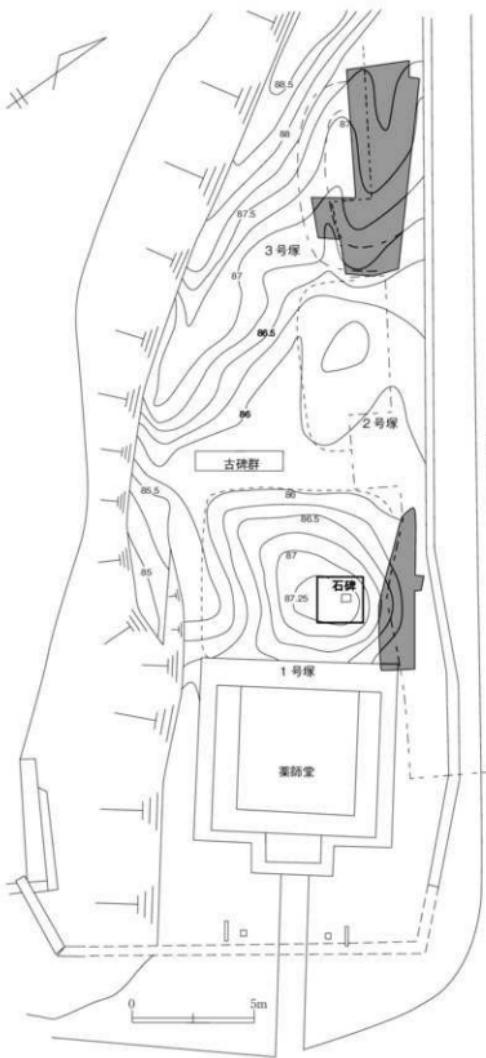
現存する3基の塚は、薬師堂裏の旧街道と馬籠川支流の小川に挟まれた細長い範囲に、旧街道に沿って南東から1号塚、2号塚、3号塚の順に並び、1号塚と2号塚の間に江戸時代の古碑がある。塚は昭和55年の国道改修工事と平成5年の歩道設置工事に伴い東側が削平されている。塚の平面形は方形を基調とし、平成5年発掘調査時での塚の規模は、1号塚が $7\text{ m} \times 8\text{ m}$ 、高さ1.54m、頂部は平坦で $2\text{ m} \times 2.5\text{ m}$ 、2号塚が $7\text{ m} \times 4\text{ m}$ 、高さ0.6m、3号塚が $5.2\text{ m} \times 2\text{ m}$ 、積み土は残存せず、幅1m、深さ0.3~0.7mの周溝が認められる。塚はいずれも一辺7~8m、高さ1.5m前後で、角礫・円礫を多く含む褐色土で積まれていたと推定される。また、1号塚と3号塚の上には石碑が残存している。（宮城県教育委員会 1995）

II. 調査に至る経緯と調査の概要

1号塚の上には、天正9年（1581）の銘のある石碑が建っている。その傾きが大きくなり倒れるおそれが出てきたことから、地元住民からの要望を受けて、町教委が主体となり復旧事業を実施することとなった。それに先立ち、石碑の据え方や塚の積み土の状況を把握するために、石碑周辺の確認調査を実施した。



第1図 遺跡の位置



第2図 調査区の位置

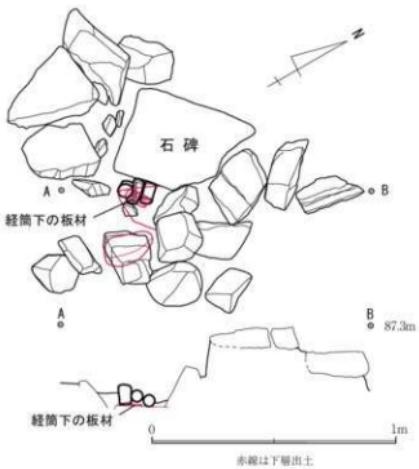
た。石碑の周辺に不規則に散布する板状の礫の下から出土し、掘り方は不明である。南端の経筒1は正立して東に傾いた状態で、中央の経筒2は上部を西側に、北端の経筒3は上部を東側にしてそれぞれ倒れた状態で出土した。経筒とその下面の礫の間から約10×5cm、厚さ約1cmの板材が検出されたことから、掘り方底面の礫の上に木製の箱に納められて埋納されていたと思われる。いずれの経筒の

調査は、石碑を中心に約2m四方の範囲で実施した。表土を除去した結果、石碑は塚の構築時に同時に建てられたものであること、塚は褐色～暗褐色のシルト土を主とし、石碑の周辺は人頭大的円礫・亜角礫でかためながら構築されていること、礫の積み方は規則的ではないこと、などが明らかとなった。また、石碑の前面基部から経筒3口が出土した。

石碑は地震など何らかのきっかけで傾き始めたものが、基部の礫が重量に耐えられずに緩んで大きく傾いたと考えられた。石碑の基部は、露出部に比べて太く、塚の保護の観点からも現状のまま石碑を徐々に直立させ安定させる方法が適当と判断し、施工することとした。

III. 出土した遺物

東面する石碑の前面基部から経筒3口が出土し



第3図 調査区平面図・断面図

ている。蓋には唐草文が線彫り魚子の技法で描かれている。口径と重ね合わせ部分から算出すると、素材の銅板の大きさは長さ13.5~15.0cm、幅9.0~9.8cmであったことが分かる。

【経筒1】 総高10.7cm、筒身高9.8cm、口径4.6cm、厚さ0.3mm。筒身の口縁直下2.5mmの部分に、口縁と平行し周回する沈線が認められる。また、かぶせ蓋の縁が破損している。筒身部の残存状況は最も良好である。



十羅利女 奥州之住快順坊



奉納大乘妙典六十六部聖



(バク) 三十番神 天正六年今月吉日 (1578)

【経筒2】 総高10.4cm、筒身高9.5cm、口径4.4cm、厚さ0.3mm。筒身背面を中心に破損している。また、かぶせ蓋とかぶせ底が鋸び付き筒身の両縁の状態は不明である。全体的に器壁が薄くなるなど鋸化が進行し、3口の中では最も残存状況が悪い。



十羅利女 阿州之住竹林坊



奉納大乘妙典六十六部聖



(バク) 三十番神 永禄三年□□日 (1560)

【経筒3】 総高9.8cm、筒身高9.0cm、口径4.3cm、厚さ0.4mm。かぶせ底の縁が大きく破損している。



十羅利女 奥州之住快順

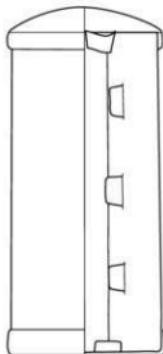


奉納法花妙典六十六部

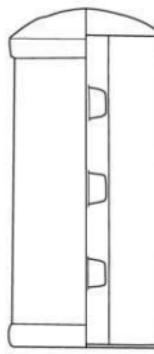
(キリーア) 三十番神 天正六年月日 (1578)

内部には、薄片状の炭化した有機物が残存していた。分析の結果、この炭化材は広葉樹と推定され、経典の軸木の可能性が考えられる。

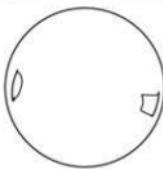
経筒はいずれも銅板をまるめ、筒身中央部を2もしくは3カ所で舌留めし、経筒1・3は両縁も舌部を折り返して留めた円筒形を呈している。蓋は盛蓋式のかぶせ蓋、底部は筒身部から2カ所で舌留めされたかぶせ底である。筒身・蓋の外面はすべて鍍金されている。筒身の重ね合わせ部分を背面として、正面に3行の銘文が線彫りされ



十羅刹女
舞引之住持寶房
不奉納大乘妙典、六十六部經
三十卷
天正六年五月吉日

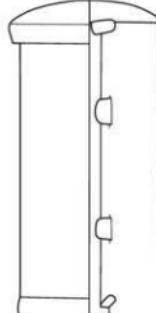


十羅刹女
阿尼文住持寶房
不奉納大乘妙典、六十六部經
三十卷
永禄三年一月日



經筒 1

經筒 2



十羅刹女
舞引之住持寶房
不奉納大乘妙典、六十六部經
三十卷
天正六年五月日



經筒 3



第4図 経筒

IV.まとめ

出土した3口の経筒は、銘文から16世紀後半に作られたものであり、そのうち2口は「快順（坊）」によって同時に奉納されたものであることが分かる。快順は馬籠平野の佐藤家の家系に見られる、佐藤家先祖の土佐信久と兄弟であり、出家して桃生郡河北町（現石巻市）皿貝に住み、製鉄を指導したといわれている（本吉町誌編纂委員会 1982）。この快順は1号塚に建つ石碑の発願人であり塚の造立者と考えられる。石碑には、快順の名と共に天正9年（1581）2月16日（旧暦の春の彼岸）の日付が認められることから、被追善者は不明ながら供養碑と推定される。追善のために快順が塚を構築し石碑を建立して、その根元に経筒を埋納したと思われる。

出土した3口の経筒には、形態、大きさ、製作技法、銘文などに強い共通性が認められる。これらの経筒は、大きさや形態、定型化された銘文、年号から、六十六部聖（廻国聖）による奉納経筒であると思われる。しかし、細部では、舌の数や留める方向、銘文や字の大きさ、蓋の文様などに相違点がある。特に、同じ年号と奉納者である経筒1と3にも相違点が認められるのは、経筒製作の背景などを考える上で注目される（松原 1989）。これらは六十六部聖により、法華經を納めて一国に一部ずつ靈場や奉納所に奉納されるのを原則としている。全国の奉納経筒を検討した間によれば、六十六部聖の一般的な巡拝路といわれる一宮などを中心とする靈地と、奉納経筒の発見地が必ずしも一致しないことが指摘されている（関 1988）。町頭塚の南東3.6kmには古くから修験の山として知られる靈峰田東山があり、馬籠は田東山の登り口の一つともいわれていることから本塚付近も靈場の周辺地といえる。また、経筒が複数奉納されていることも、当塚が奉納所の一つであったことの証左であるかもしれない。しかし、先ほど述べたように、快順はこの地域との強い結びつきある。経筒は石碑造立よりも古い天正6年（1578）のものであり、その経筒に挟まれて埋納されていた経筒には永禄3年（1560）の銘が認められる。追善のために快順が石碑を建立して経筒を埋納したことは明確であるが、経筒と石碑の年号のずれ⁽¹⁾や竹林坊が奉納した永禄3年銘の経筒⁽²⁾が同時に埋納されていたこと、埋納されていた深さも比較的浅い場所であったことなど、検討すべき点は多く、当塚付近が六十六部聖による経筒の恒常的な奉納場所であったか否かを含めて、詳細は今後の資料の増加と研究の進展に待つところが大きい。

註1 年代のズレは、回国の期間と関係する可能性などが考えられる。

註2 経筒2が他の2口に比べて銷化が進行しているのは、本塚に埋納されるまでの経筒2の保存状況を反映しているのかもしれない。

参考文献

- 藤沼邦彦 1975 「宮城県の経塚について」『東北歴史資料館 研究紀要』第1巻
本吉町誌編纂委員会 1982 『本吉町誌II』
関秀夫 1984 『経塚地名総覧』 ニュー・サインス社
関秀夫 1988 「六十六部聖による納経の経塚」「経塚－関東とその周辺」 東京国立博物館
松原典明 1989 「六十六部聖の奉納経筒にみる規格性について－大田南八幡宮奉納経筒を中心として－」『MUSEUM』No.460 東京国立博物館美術誌 7月号
宮城県教育委員会 1995 「町頭遺跡」「大畑遺跡はか」宮城県文化財調査報告書第168集



1. 1号塚全景（北西から）



2. 経筒出土状況（南東から）



3. 経筒3とその下の板材出土
状況（南東から）

図版1



1. 經筒



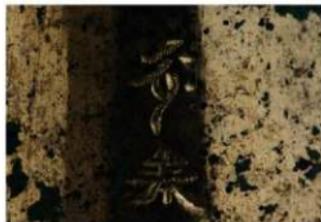
2. 經筒 1



3. 經筒 2



4. 經筒 3



5. 經筒 1 拡大



6. 經筒 3 蓋拡大

図版2

まる もり やま
丸 森 山 遺 跡

調査要項

遺跡名：丸森山遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：53021）

所 在 地：登米市（旧東和町）東和町錦織字馬口窪

調査原因：鶴舍建設

調査主体：登米市教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

佐藤則之 菊地逸夫 須田良平 生田和宏

土生真紀（登米市教育委員会）

調査期間：平成18年3月14・15日

調査面積：9 m²

I. はじめに（第1図）

丸森山遺跡は登米市東和町錦織字馬口窪に所在し、旧東和町の中心部である米谷の集落から北方約4kmに位置する。遺跡は北上川東岸の丘陵斜面にあり、周辺は畑地・果樹園・牧草地・山林となっている。周辺の地形は北上山地に続く丘陵部と北上川の周辺に広がる沖積地からなり、丘陵地は100mを越え起伏に富んだ様相を呈しているが、沖積地の標高は10m程度にすぎず、貝塚の分布状況などからかつてこの付近まで「伊豆沼湖沼群」が広がっていたと考えられる。

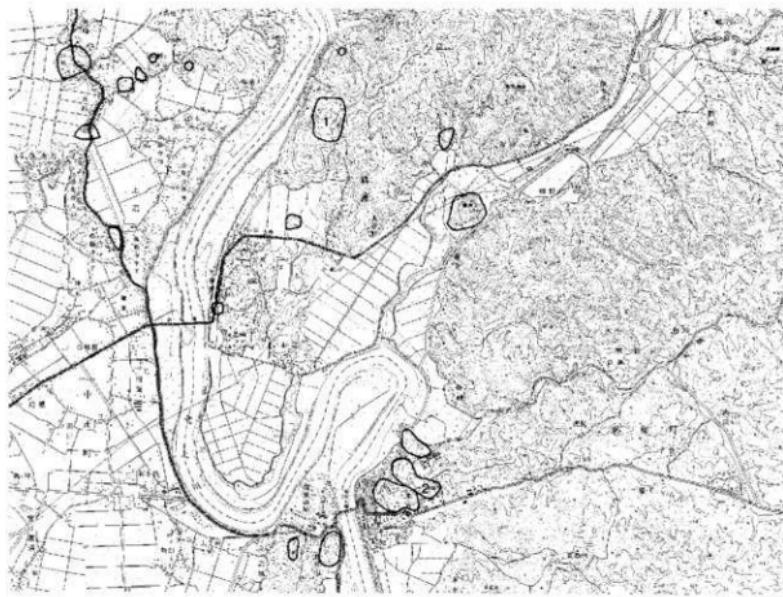
旧町内の縄文時代の遺跡には本遺跡の他に大膳館跡（慶長年間に石母田大膳の居館となったためこの名が付けられた）、松坂遺跡などがあり、大膳館跡からは前期から晩期までの土器・石器・土製品の他に獸骨が多量に出土し、貝層も存在したといわれている。

丸森山遺跡も大膳館跡とともに古くから遺物の散布する場所として知られている遺跡で、発掘調査は行われていないが、昭和30年代に遺跡内で住宅の造成が行われた際に縄文時代中期（大木8・10）の土器類や多量の石器、装身具、骨角器、獸骨が出土している。

II. 調査の概要（第2図）

調査は鶴舎の建設予定地付近（T 1）と包含層の存在が予想される遺跡の南斜面部（T 2）に1.5m×3.0mの調査区をそれぞれ設定して実施し、人力により表土（耕作土）を除去し、遺構の有無や遺物の堆積状況について調査した。

なお、T 2については地山面までの深度が深いことと出土する遺物が多量であることから、2層以



第1図 丸森山遺跡の位置

1 丸森山遺跡 2 大膳館跡

下については調査区の西側に50cm幅のサブトレーナーを設定し、その部分のみ地山面まで掘り下げを行った。

各調査区の概要は下記のとおりである。

[T 1 調査区] (第3・4図)

鶏舎の建設予定地にあたり、遺跡内では緩やかに高まつた平坦部に位置する。地表から30~40cm掘り下げ地山面で遺構を検出した。遺構には調査区外に延びる大きな落ち込みと円形を基調としたピット6個がある。大きな落ち込みは堆積土中に遺物の他に多くの炭化物や焼土を含むこと、一部断ち割りを行った部分では壁が直立すること、壁際に周溝状の窪みが伴うことなどから竪穴住居跡の可能性が高い。遺物は表土・遺構堆積土中から出土しており、図示したものはいずれも表土から出土したものである。

1は浅鉢の口縁部破片で体部との境に稜線

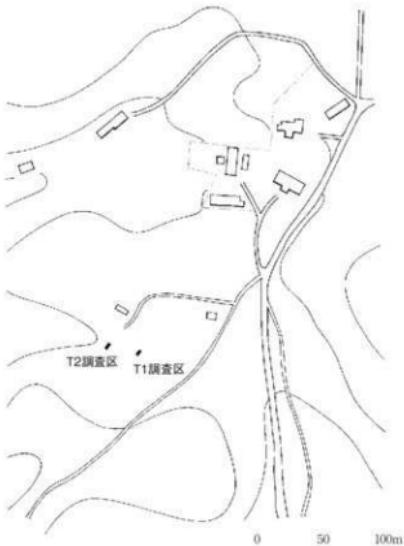
状の段が巡る。後述する包含層出土土器のIV群にあたり大木10式のものと考えられる。

2は太い沈線文により縄文部と磨消し部を区画して縦に展開する文様を構成しているものⅢ群にあたり、大木9式のものと考えられる。

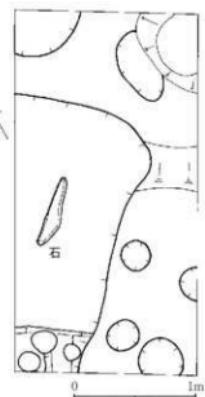
[T 2 調査区] (第4・5図)

遺跡の南斜面にあたり、古くから遺物が多量に散布することで知られていた地点である。表土から地山に達するまで合計5枚の層位が確認された。1層は表土(耕作土)で、褐灰色を呈するシルトである。厚さは約35cmある。2層は褐灰色を呈するシルトで、細かい焼土が混じる。厚さは約25cmある。3層は斜面の部分にのみ分布する褐灰色シルトで、2層と同一の層の可能性がある。細かい焼土や土器片が多く混じる。厚さは約5cmである。4層は斜面の部分にのみ分布する黒褐色シルトで炭化物や土器片が多く混じる。厚さは約35cmある。5層は地山面を直接覆う層で斜面に沿って分布する。褐灰色のシルトで細かな焼土や炭化物、地山粒を多く含む。厚さは約20cmある。6層は黄褐色の粘土で地山層である。

遺物は4.5層から多く出土しており、土器は立った状態で出土しているものが比較的多くみられた。また、地山となる6層上面を覆



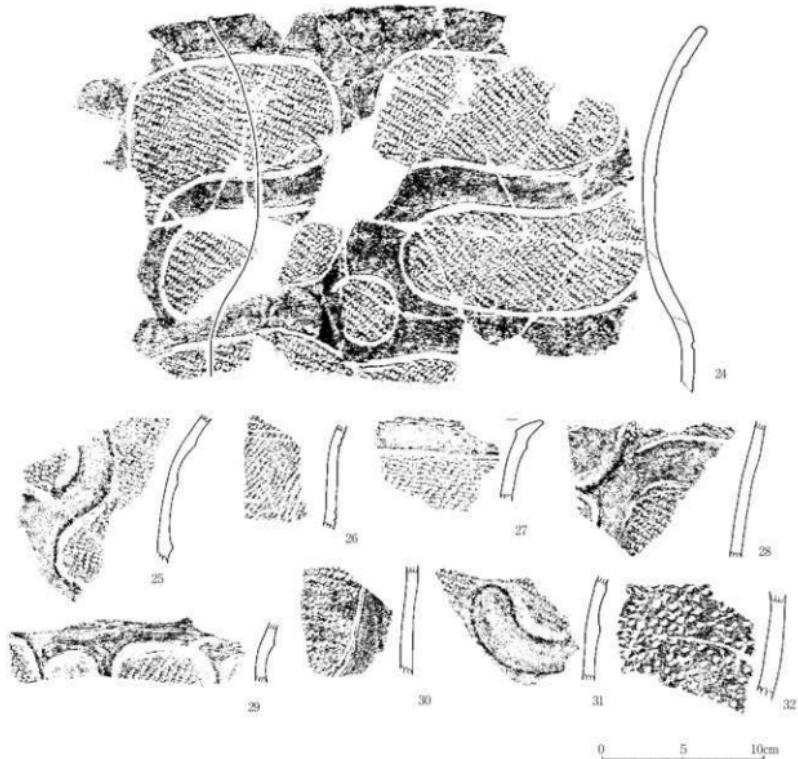
第2図 調査区の位置



第3図 T1調査区



第4図 出土遺物（1）



番地	地区	層位	部	形	類	回収番号	圖
1	T1	1	浅鉢	II		横位の後縫 RL 大木10	24
2	T1	1	深鉢	II		横位の沈縫 RL 大木9	
3	T1	1	深鉢	II		横位の沈縫 RL 大木9	
4	T2	6上	深鉢	II		後縫と沈縫による字文（4字位）RLRの複合縫文 大木10	25
5	T2	6上	深鉢	II		後縫と沈縫による字文？ RLRの複合縫文 大木10	26
6	T2	6上	深鉢	II		後縫と沈縫による字文？ RL 大木10?	27
7	T2	6上	深鉢	II		後縫と沈縫による字文？ RL 大木10	28
8	T2	6上	深鉢	II		後縫による字文？ RL 部に通続割突 大木10	
9	T2	5	深鉢	II		横位の凹縫文 大木10?	29
10	T2	5	深鉢	II		（横位下に横位の後縫、下位に RLRの複合縫文 大木10）	
11	T2	5	深鉢	II		後縫と沈縫による字文？ RL 大木10	30
12	T2	5	深鉢	II		（横位下に横位の後縫、下位に RLRの複合縫文 大木10）	
13	T2	5	深鉢	II		後縫と沈縫による字文？ RL 大木10	
14	T2	5	深鉢	II		後縫と沈縫によるS字文 RL 大木10	
15	T2	5	深鉢	II		後縫と沈縫による字縫 RL 大木10	
16	T2	5	深鉢	II		後縫と沈縫による字縫 RLRの複合縫文 大木8 b	
17	T2	5	深鉢	I		3字位の凹縫文 RL 大木8b	
18	T2	4	深鉢	II		後縫と沈縫と沈縫によるS字文 RL 大木10	
19	T2	4	深鉢	I		横位の丸い沈縫、丁字文の一部 大木A	
20	T2	2-3	深鉢	II		後縫によるS字文？ LR 大木10	
21	T2	2-3	深鉢	II		後縫と沈縫による凹縫文縫 RL 大木10	
22	T2	2-3	深鉢	II		横位の沈縫 RL 大木10	
23	T2	2-3	深鉢	II		後縫による凹縫文縫 RL 大木10	
24	T2	4	深鉢	II		後縫によるS字文 RL 大木10	
25	T2	2-2	深鉢	II		後縫によるS字文 I RL 大木10	
26	T2	1	深鉢	I		後縫によるS字文 I RL 大木8b	
27	T2	1	深鉢	II		（横位下に横位の後縫、下位に RLRの複合縫文 大木10）	
28	T2	1	深鉢	II		後縫と沈縫による字文 RL 大木10	
29	T2	1	深鉢	II		横位に横開する後縫 RL 大木9	
30	T2	1	深鉢	II		後縫による凹縫文縫 RL 大木10	
31	T2	1	深鉢	II		後縫による字文？ RL 大木10	
32	T2	1	深鉢	II		後縫割突による地縫 大木10?	

第5図 出土遺物（2）

う状態で出土したものもあり、これらについては包含層最下層出土遺物として扱った。

図示した土器は大部分が深鉢で、施文の方法の違いから、I 3本単位の沈線で文様を描いているもの（17・26）、II 粘土紐を貼り付けて文様を作り出しているもの（16）、III 棱線状の隆線で縄文部と磨消部を区画して縦に展開する文様を描いているもの（29）、IV 棱線状の隆線や沈線文で縄文部と磨消部を区画して横に展開する文様を描いているもの（1・4・5・7～15、18・20～28・30・31。）、V 横位の太い沈線文によって描かれたもの（19）の5つに分けられる。I、IIは川崎町中ノ内B遺跡F群土器（宮教委 1987）に類似し大木8b式のものと考えられる。IIIは七ヶ宿町大梁川遺跡IIIc～d層土器群（宮教委 1988）、東松島市里浜貝塚台開地区P32-21区132層出土土器（奥松島縄文村資料館 1999）と類似するもので大木9式のものと考えられる。IVは体部がくびれ口縁部に向かって開くものと、口縁部が波状になり体部がキャリバー形を呈するものとがあり、文様は体部の上半に施されている。全体のモチーフがわかるIでは口縁から体部に垂れる「J字」が稜線状の隆線によって、24では横位に展開する「S字状文」が沈線によって描かれている。こうした土器は仙台市山田上ノ台遺跡第X群土器（仙台市教委 1987）・大梁川遺跡IIa～b層土器群・栗原市鶴沢遺跡I類土器（築館町教委 2005）に類似するものがみられ大木10式のものと考えられる。Vは一点のみ（19）である。工字文の一部の可能性があり、縄文時代晩期末大洞A式のものと考えられる。

III. まとめ

○今回の調査は鶴舎建築予定地（T1）の遺構の有無と、その周辺の遺物の広がり等の確認（T2）が目的であり、T1では竪穴住居跡がT2では遺物包含層が検出された。

○遺構は遺跡中央の平坦部から竪穴住居跡1軒の他に土壙、小ピットが検出された。

○遺物包含層は遺跡南東部の南斜面にあり、最も厚い部分で約1mある。最下層出土の土器はすべて大木10式であり、2～4層は大木10式が主体となりそれに大木8b式が若干混じる。2～4層は遺物が立った状態で出土しているものも多いことから、一次的な廃棄層が再堆積したものであると考えられる。

○遺物は縄文中期大木8b式、9式、10式・晩期の大洞A式の土器をはじめ、石鎌・石匙などの石器や獸骨が出土した。

引用・参考文献

- 奥松島縄文村歴史資料館 1999 「里浜貝塚」鳴瀬町文化財調査報告書第5集
仙台市教育委員会 1987 「山田上ノ台遺跡」仙台市文化財調査報告書第100集
築館町教育委員会 2005 「鶴沢遺跡」築館町文化財調査報告書第18集
東和町史編纂委員会 1987 「東和町史」
宮城県教育委員会 1987 「中ノ内B遺跡」宮城県文化財調査報告書第121集
宮城県教育委員会 1988 「大梁川遺跡」宮城県文化財調査報告書第126集

上：T1 調査区

（西から）

中：T2 調査区

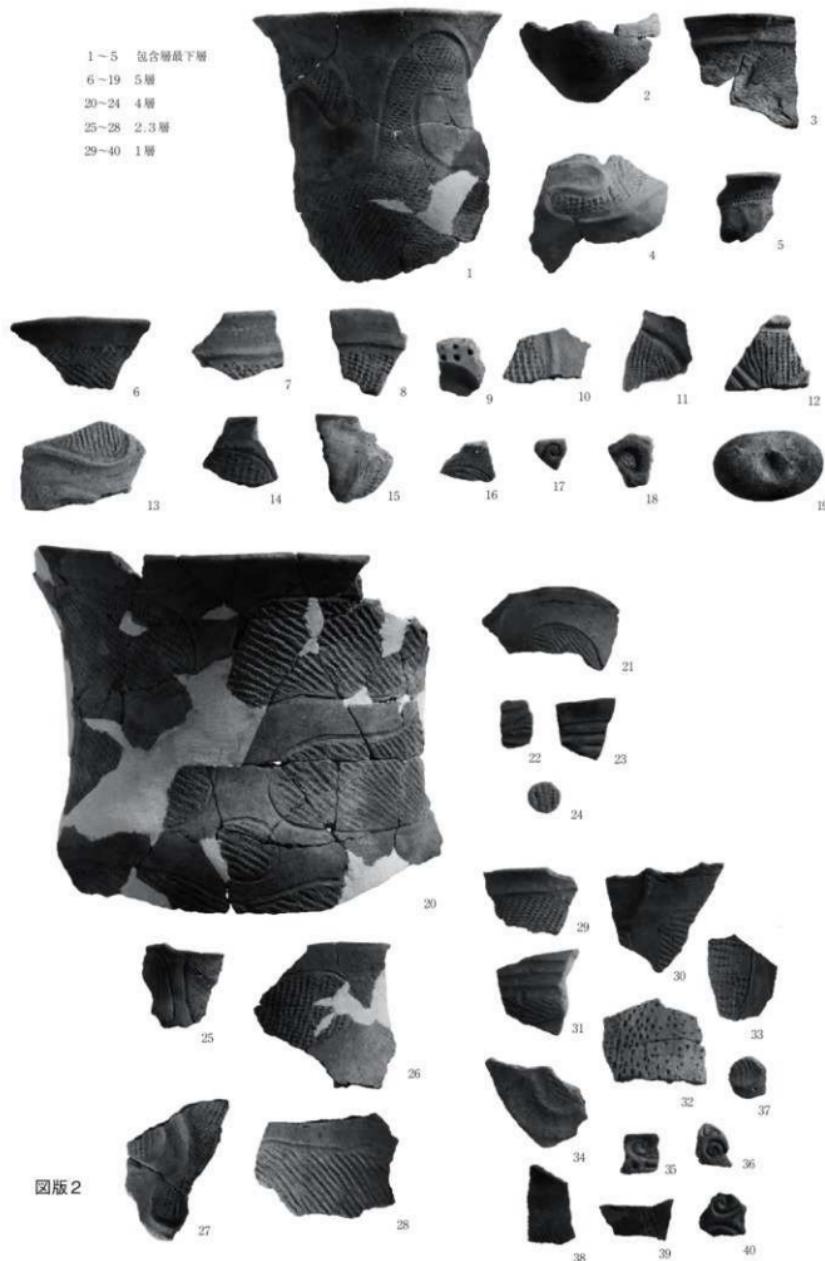
（北から）

下：包含層断面



図版1

1~5 包含层最下层
6~19 5层
20~24 4层
25~28 2.3层
29~40 1层



图版2

こ さわ ぐち こ ふん
小 沢 口 古 墳

調査要項

遺跡名：小沢口古墳（宮城県遺跡地名表登載番号：07184 遺跡略号：KS）

所在地：宮城県柴田郡村田町大字沼辺字東小沼二

調査原因：自然崩壊

調査主体：村田町教育委員会

調査担当：村田町教育委員会

調査員：石黒伸一朗 調査補助員：渡邊香織

調査期間：平成18年7月18日～20日

調査面積：7 m²

調査協力：宮城県教育庁文化財保護課 小室章一

I. 位置と周辺の古墳時代遺跡

ぬまべ りがしこぬまに

小沢口古墳は、柴田郡村田町大字沼辺字東小沼二6番地に所在し、村田町役場沼辺支所の東北方約1.2kmに位置する。高館丘陵の西南部、標高120~130mの丘陵から西方へ張り出した舌状の丘陵緩斜面に当たり、南方に開けた村田盆地が一望できる見晴らしの良い場所である。古墳の標高は25mである。西方220mには、菅生と足立の大字境付近を水源とする新川が流れしており、100mほどで荒川に合流し、白石川を経て阿武隈川に注いでいるので、小沢口古墳は阿武隈川下流域に属している。

村田町では、現在183箇所の遺跡が知られているが、遺跡のほとんどは町の中央部から南部にかけての、村田盆地周辺に多く分布している。その内、古墳や古墳群は23箇所、横穴墓群は5箇所発見されているが、発掘調査や測量調査が行われたものは非常に少ない。

前方後円墳は、愛宕山古墳(90m)・千塚山古墳(85m)・法領権現古墳(64m)・夕向原1号古墳(57m)・古峯神社古墳(38m)・薬師堂古墳(28m)の6基があり、すべて測量調査が行われている(宮城県教育委員会 1978、千塚山古墳測量調査団 1992、藤沢敦 2000)。そのほかに、小塚古墳と埴輪がある下ノ内圓古墳も前方後円墳と言われているが、発掘調査が行われていないので、現時点では不明である。愛宕山古墳は、宮城県内では168mの雷神山古墳、110mの遠見塚古墳に次いで第3位の大きさで、この地方を治めていた首長の墓と推測されており、野焼きの円筒埴輪から前期後葉から末の時期に築造されたものと考えられている。また、後円部のレーダー探査によれば、長さ8.5m、幅22~30mの竪穴式石室と推定される反応があったと報告されている(千塚山古墳測量調査団 1992)。千塚山古墳は、前方部がバチ形に広がる特殊な形状をしており、その相似性から京都府相楽郡山城町の椿井大塚山古墳(169m)との関係が指摘されており、その年代は4世紀末頃と考えられている。

村田町と柴田町にまたがっている上野山古墳群は、丘陵の斜面に数多くの古墳が築造され、分布調査の結果314基が確認されており、東北地方においても最大規模の群集墳で、中には横穴式石室が発見されている古墳もある(佐々木・芳賀・石黒 1995)。円墳は、夕向原2号古墳と元雀古墳が測量調査されている(藤沢敦 2003)。

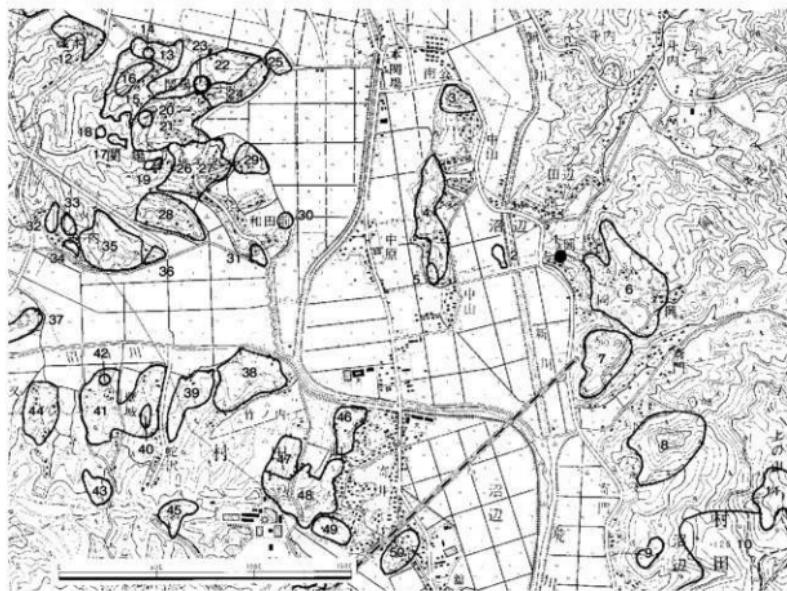
横穴墓群は、古館横穴墓群・龍泉院横穴墓群・中山圓横穴墓群・元雀横穴墓群・下清水横穴墓群の5箇所が知られている。龍泉院横穴墓群からは長颈瓶や直刀(村田町史編纂委員会 1977)、中山圓横穴墓群からは主頭太刀・直刀・耳環などが出土している(藤沢・菊地 2002)。

新峯崎遺跡は、愛宕山古墳の東北方約950mにおいて、町道改良工事によって発見された遺跡で、発掘調査の結果、浅い土壌内から111点の土師器や701点の石製模造品が出土し、この近くにおいて何らかの祭祀が行われた後に一括埋棄されたものと考えられている(阿部・須田・岩見 1991)。古墳時代の住居跡は、日向南遺跡から1棟検出されている(村田町史編纂委員会 1977)。

II. 調査に至る経緯と調査の方法

平成18年7月6日、村田町教育委員会へ地元住民から沼辺字東小沼二10番地の小室章一宅の裏において、村田町歴史みらい館の常設展示室に展示してある、坂下古墳の箱式石棺とよく似たものがあるという連絡が入った。翌7月7日、文化財保護担当の石黒が現地に行き、箱式石棺であることを確認

した。その時の状況は、町道同線と丘陵斜面を削った崖の1mほどの間に、側石材の上面が見えており、東南角の側石材は斜面の方に露出し、蓋石は斜面下に置かれていた。地権者である小室一氏によると、7月5日に機械を用いて地ならしを行っていたら、30cmほど下から平らな大きな石が、ほぼ水平の状態で出てきたので、この石を敷石に用いようとして外し、斜面下に置いたということであった。箱式石棺の西半分は、50年ほど前に町道を作る際に壊されたようであった。周辺を踏査したが、



No.	遺跡名	立場	種別	時代	No.	遺跡名	立場	種別	時代
1	小河口古墳	丘陵斜面	古墳	古墳	26	桂木田遺跡	丘陵	盆地地	古代
2	古車古墳	冲積地	前方後円墳?	古墳	27	猪之尾遺跡	丘陵	盆地地	古代
3	六斗内遺跡	分断丘陵	盆地地	弥生	28	周間城跡	丘陵	城跡	中世
4	中山道跡	分断丘陵	盆地地	古代	29	石垣遺跡	丘陵斜面	盆地地	绳文・弥生
5	中山間隔穴古群	分断丘陵	砾穴帯	古墳後	30	吉川梅原古墳	丘陵斜面	印旛	古墳
6	阿人遺跡	丘陵頂部	盆地地	绳文・弥生・古代	31	寺ノ崎遺跡	丘陵斜面	盆地地	古代
7	岡谷遺跡	丘陵頂部	盆地地	弥生・古代	32	下赤水遺跡	丘陵斜面	盆地地	古代
8	女革面跡	丘陵	城跡	中世	33	大串遺跡	丘陵斜面	盆地地	绳文
9	猪野山遺跡	丘陵	盆地地	绳文・後・弥生・古代	34	下赤水廻穴古群	丘陵斜面	龜形	古墳後
10	上野山古墳群	丘陵	円墳	古墳後	35	大字沢遺跡	丘陵斜面	盆地地	绳文・古代
11	上野山遺跡	丘陵頂部	盆地地	绳文・弥生・古代	36	笠ノ内遺跡	丘陵斜面	盆地地	绳文・古代
12	四郎塚遺跡	丘陵斜面	盆地地	绳文・弥生・古代	37	沼田御壁堀遺跡	丘陵	盆地地	绳文・後・弥生・古墳・中世
13	官ノ下遺跡	丘陵斜面	盆地地	弥生・古墳・奈良	38	赤川遺跡	丘陵	盆地地	绳文・後・弥生・古墳・奈良
14	坂下古墳	丘陵斜面	円墳・盆地地	古墳・弥生	39	越川遺跡	丘陵斜面	盆地地	古墳
15	坂本遺跡	丘陵斜面	盆地地	绳文・弥生・古代	40	元宿椎穴古群	丘陵斜面	龜穴系	古墳後
16	坂本古墳群	丘陵	円墳・方墳	古墳	41	元宿遺跡	丘陵斜面	盆地地	绳文・弥生
17	愛宕山古墳	丘陵	前方後円墳	古墳前	42	元宿古墳	丘陵斜面	円墳	古墳後
18	豪御堂古墳	丘陵	前方後円墳	古墳前	43	二小内丸遺跡	丘陵斜面	盆地地	绳文
19	前原尾根穴古群	丘陵斜面	横穴墓	古墳後	44	二小内目遺跡	丘陵	盆地地	古代
20	松江古墳	丘陵	円墳	古墳	45	愛宕山面跡	丘陵	城跡	中世
21	高木遺跡	丘陵斜面	盆地地	绳文・弥生・古代	46	御前敷遺跡	丘陵	城跡	中世
22	鍵曾遺跡	丘陵	盆地地	古代	47	竹ノ作遺跡	丘陵斜面	盆地地	绳文・弥生
23	經理遺跡	丘陵中腹	城壁	中世	48	竹ノ門遺跡	丘陵	城跡	中世
24	事曉遺跡	丘陵	盆地地	古墳	49	竹ノ作遺跡	丘陵斜面	盆地地	古代
25	新善寺遺跡	冲積地	堅硬遺跡	古墳中	50	多喜御跡	丘陵	城跡	中世

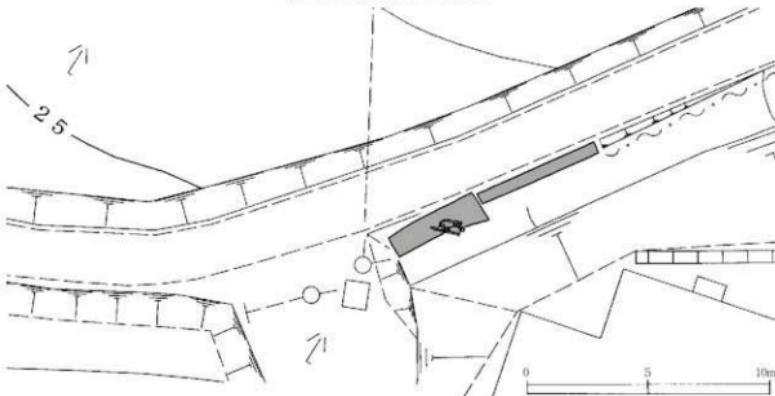
第1図 古墳の位置と周辺の遺跡 (1:25,000「田村・大河原・岩沼・亘理」)

ほかに古墳は確認できなかった。このまま放置しておくと、自然に崩壊する可能性があると思われたので、7月12日に現地で宮城県教育庁文化財保護課と村田町教育委員会によって、保存方法について協議を行ったが、現状での保存は難しいと判断されたので、緊急発掘調査を行って記録保存することになった。村田町教育委員会では、7月12日付けで遺跡発見の通知を宮城県教育委員会に提出した。箱式石棺が発見された付近は、安永6年(1777)の『柴田郡沼辺村風土記御用書出』によると「小沢口屋敷」と呼ばれていたので、古墳名を「小沢口古墳」とした。

調査期間は、平成18年7月18日から同月20日である。調査区は、箱式石棺と周溝を確認するため、町道沿いに細長く設定した。調査区平面図は100分の1、遺構の平面図および断面図は20分の1で作成した。記録写真は、カラーネガフィルムおよびデジタルカメラによって随時撮影した。



第2図 周辺地形図 (1:6,000)



第3図 調査区位置図 (1:200)

III. 発見された遺構と遺物

小沢口古墳の発掘調査において、発見された遺構は箱式石棺1基である。周囲は、終戦後に削平され畠として使用されており、墳丘は確認できなかった。箱式石棺の西南方は、低くなってしまっており周溝は無いと判断された。東北方はやや高くなっていたので、トレンチを拡張して遺構の確認を行ったが、周溝などは確認できなかった。副葬品として、刀子1点と鉄製品6点が出土した。また、表土から弥生土器6点、石棺内の堆積土から弥生土器13点と剥片1点が出土した。地山は、10YR5/1褐色灰色の非常に風化した礫層である。

【箱式石棺】西側は、町道を作る際に破壊されており東側しか残っていない。残存長は123cm、外幅56cm、内幅42cm、深さ30cm。東西軸は、西で北へ16° 傾っている。石材は、板状の黄灰色を呈する安山岩の角礫を用いている。この石材の表面は、風化して明黄褐色になっているところも見られる。

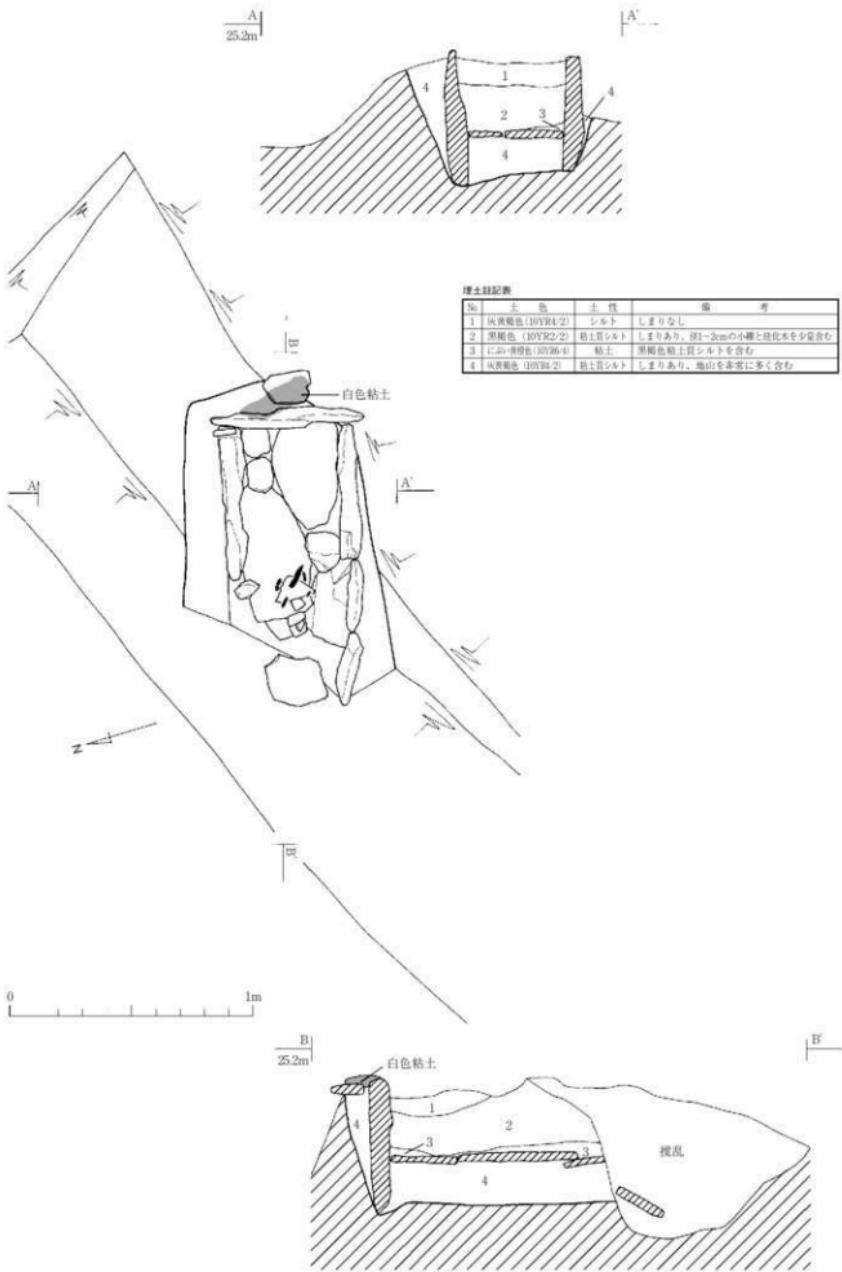
箱式石棺の構築方法は、地山を逆台形に掘り、東壁となる大きな側石材を据え、それに直角になるように南壁と北壁の側石材を置き、掘り方と側石材の隙間、ならびに内部へ深さ17cmのところまで掘り出した地山を埋め戻し、その上に床石材を敷き並べる。石材の隙間には、白色粘土を充填し、側石材の内面に赤色顔料を塗布する。遺体と副葬品を納め、蓋石を被せるという順番である。

東壁の側石材の横に、縦14cm、横20cmの小さな平石が置かれており、それと東壁の側石材の上には白色粘土が部分的に被せられていた。東壁の側石材は1個で、大きな角礫から割ったものを用いている。南壁の側石材は3個で、加工せずに自然のまま用いている。北壁の側石材は2個で、どちらも割ったものを用いているが、大きい方の側石材は上部を小さく割って整形している。側石材の上端は、平らになるように組み合わされている。側石材の内面には、赤色顔料が塗布されているが剥落しているところが多く、残っている部分も薄い。床石材は、7個の薄い石材を平らに組み合わせており、これらの石材はほとんどが割った板状のものを用いている。側石材と床石材の隙間には、白色粘土を充填していた。側石材の上に被せた白色粘土は、東壁にしか残っていなかったが、当初は蓋石の周囲や上にも白色粘土を被せたものと思われる。

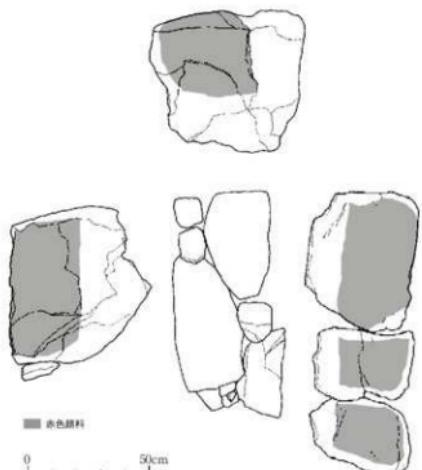
石棺内部の堆積層は3層あり、1層と2層は石棺外からの流入土、3層は石材の隙間に充填した白色粘土が剥落して床石材の上に堆積したもので、南側の方がやや厚い。搅乱層には、床石材と思われるものが1個斜めに落ちていた。蓋石は、1個残っていたが移動されていたので、原位置は不明である。蓋石の大きさは、縦84cm、横75cm、厚さ8cmあり、表面は自然面であるが、裏面は割った面である。掘り方の残存長は130cm、上幅76cm、下幅51cm、深さ49cm。断面形は、逆台形を呈している。東壁の側石材の下は、溝状に5cmほど深く掘り込まれているほかは、ほぼ平らである。

副葬品は、東壁から60cmの床石材の上に三角形の平石があり、その上に刀子が1点、刃先を東南方に向けて出土した。そのほか、刀子の周囲から小さい鉄製品が6点出土した。流入土および床石材の上に落ちた白色粘土を洗浄したが、そのほかの副葬品や人骨片などは検出されなかった。

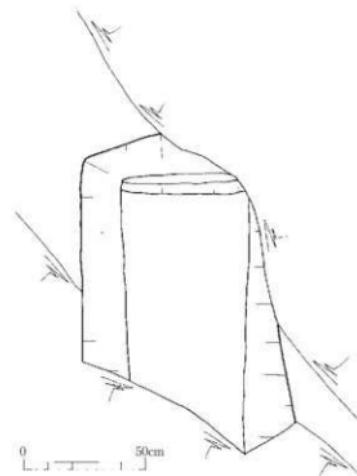
【副葬品】刀子は両刃で、二つに割れており、刃はやや曲がっている。長さ11.2cm、刃の長さは7.3cm、茎の長さは3.9cmあり、断面は楔形で、端は不整形である。茎の両面には木質が残っており、柄は木製であったと推測される（第9図1）。鉄製品はすべて破片のため、便宜上鉄製品①～⑥とする。鉄



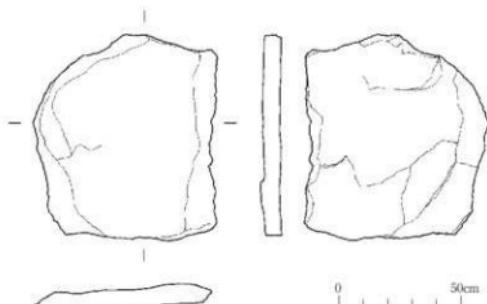
第4図 箱式石棺実測図 (1:20)



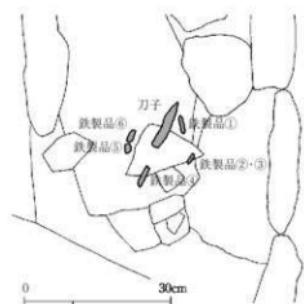
第5図 箱式石棺展開図 (1:20)



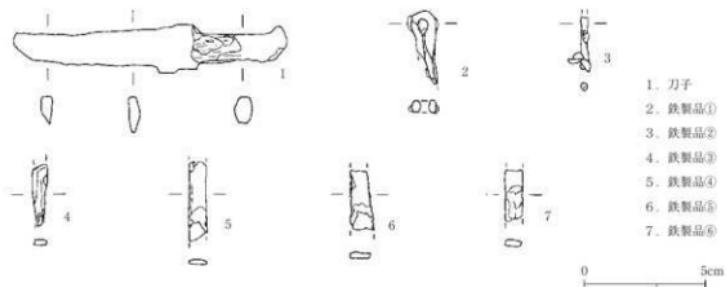
第6図 掘り方実測図 (1:20)



第7図 蓋石実測図 (1:20)



第8図 副葬品出土位置図 (1:10)



第9図 副葬品実測図 (1:2)

第1表 副葬品観察表

登録番号	種類	層	記	大きさ (cm)	重量 (g)	備考	写真図版	登録No.
9990-1	刀子	3層		長11.2×幅2.0×厚0.5	36.5	刃部長7.3、茎部3.9×幅1.1×厚0.6	12-1	KS21
9990-2	鉄製品①	3層		長3.1×幅1.2	1.8	毛抜形鉄製品?	12-2	KS25
9990-3	鉄製品②	3層		長2.3×幅0.3	0.7		12-4	KS23-1
9990-4	鉄製品③	3層		長2.5×幅0.6×厚0.2	0.7		12-5	KS23-2
9990-5	鉄製品④	3層		長3.2×幅0.7×厚0.2	1.0		12-6	KS24
9990-6	鉄製品⑤	3層		長2.5×幅0.9×厚0.2	0.8		12-7	KS24-1
9990-7	鉄製品⑥	3層		長2.1×幅0.7×厚0.2	0.6		12-8	KS24-2

製品①は、断面が長方形の棒を曲げて環状にしているものであるが、下方は破損している(第9図2)。鉄製品②は、細い丸棒状のもので、先端は折れしており、下方はねじってある(第9図3)。鉄製品③は、薄い板状のもので、下端は尖っており、やや湾曲している(第9図4)。鉄製品④から⑥は、幅0.7から0.9cm、厚さ0.2cmの薄い板状の製品で、上下端とも破損している(第9図5~7)。鉄製品⑤と⑥は、近接して出土したが接合しない。

【その他の遺物】弥生土器は、ほとんどが風化している細片で、文様があるものは同時二本沈線の十三塚式と思われるものと、LR縄文が施文されたものが各1点であった。剥片は頁岩製である。

IV.まとめ

宮城県内において確認された箱式石棺は、別表の通り28箇所40基である。その分布は、仙台市以南の宮城県南部で、県中央部や県北部からの出土例はない。県南部でも、太平洋側に面している亘理郡では発見例がなく、仙台市六反田遺跡以外は阿武隈川流域の内陸部に分布している。最も多いのは、伊具郡丸森町から角田市にかけての地域で、特に集中しているのは丸森町の台町古墳群である。台町古墳群では、12基の古墳から21基の箱式石棺が出土しており、1号墳からは5基、61号墳と103号墳からは、それぞれ3基の複数の箱式石棺が見つかっている(志間泰治 1954、同 1961)。これまでに確認された箱式石棺の中には、開墾や工事中に偶然見つかったものもあり、大きさや石材の組み合せ方、掘り方の形態など基本的なことがわからないものも多い。

墳形のわかるものは、すべて円墳で前方後円墳や方墳などでは出土していないので、小沢口古墳も円墳であった可能性が高い。石材は、角閃石の結晶を含む高鈷安山岩類で、この丘陵上に分布している在地のものを用いている。箱式石棺の形態や、構築方法が類似しているものは、小沢口古墳から西北方へ約2.3kmのところにある坂下古墳である。この古墳は、村田町大字薄木字坂下の丘陵斜面において、整地作業中に偶然発見されたもので、昭和57年に発掘調査された(佐々木安彦 1982)。古墳は直径9m、高さ1mの円墳と考えられている。箱式石棺の大きさは、東壁の側石材が外されていたが、長さ190cm、外幅48cm、内幅34cm、深さ36cm。石材は、小沢口古墳と同様のもので、板状の安山岩の角礫を自然のままか、割ったものを組み合わせており、石材の隙間に白色粘土を充填していた。副葬品は出土しなかった。小沢口古墳の箱式石棺は、町道整備の際に破壊され、半分程度しか残っていなかったが、全体の大きさは坂下古墳のように190~200cm程度あったものと推測される。

箱式石棺の内面に塗布されていた赤色顔料は、化学分析をしていないので水銀を含む朱なのか、酸化鉄を主体とするベンガラなのかは不明である。箱式石棺の内面を赤色に塗ったものは、県内では丸森町台町古墳群1号墳2号石棺、同2号墳2号石棺、同119号墳、角田市松崎古墳1号石棺の、計4

第2表 宮城県箱式石棺一覧表

No.	古墳・遺跡名	所在地	墳形	石棺数	出土遺物	備考	文献
1	鷹巣古墳群3号墳	白石市鷹巣字木本川	円墳	1基	ガラス小玉		白石市史編さん委員会1976
2	鷹巣古墳群13号墳	同上	円墳	1基	鉄鏡(石棺内)		伊東信雄1967
3	鷹巣古墳群16号墳	同上	円墳	1基	鉄鏡・石製模造品・埴輪		北期参1972
4	牛久八古墳	白石市大鷹沢三洋字牛久	円墳	1基	土師器		森義典1976
5	牛久八古墳	白石市大鷹沢大町字牛久	円墳	1基			伊東信雄1967
6	明治前古墳	盛岡市引町御前	同上	1基			志賀參吉・佐藤正吉1959
7	白石古墳群1号墳	丸森町金山字台町	円墳	5基	土師器(2号石棺外、5号石棺内)		志賀參吉1964、同1961
8	白石古墳群2号墳	同上	円墳	2基			2号石棺赤色顔料
9	白石古墳群7号墳	同上	円墳	1基			志賀參吉1954
10	白石古墳群13号墳	同上	円墳	1基			志賀參吉1961
11	白石古墳群5号墳	同上	円墳	1基			志賀參吉1955
12	白石古墳群6号墳	同上	円墳	1基			志賀參吉1961
13	白石古墳群7号墳	同上	円墳	1基	鉄鏡		*
14	白石古墳群8号墳	同上	円墳	3基	鉄鏡		*
15	白石古墳群9号墳	同上	円墳	1基			*
16	白石古墳群10号墳	同上	円墳	3基	埴輪		志賀參吉1954
17	白石古墳群11号墳	同上	円墳	1基	鉄鏡(石棺内)・土師器(石棺外)	赤色顔料	志賀參吉1955
18	白石古墳群166号墳	同上	円墳	1基			志賀參吉1961
19	雄略古墳	角田市角田字幡沼	円墳	3基	鉄劍・刀子・馬具(1号石棺内)		志賀參吉1959
20	松崎古墳	角田市角田字松崎	円墳	2基	土師器(2号石棺外)		1号石棺赤色顔料
21	長沼今古墳群8号墳	角田市角田字長沼	同上	1基			角田市史編さん委員会1964
22	寺田今古墳群2号墳	仙台市本町道字寺田	同上	1基			志賀參吉1976
23	寺田今古墳群22号墳	同上	同上	1基			*
24	寺田今古墳群28号墳	同上	同上	1基			*
25	麻木古墳	村田町関塚字麻木	同上	1基			森木節郎1953
26	船山古墳	村田町関塚字麻木入	同上	1基			森木節郎1953
27	坂下古墳	村田町薄字坂下	同上	1基			佐々木定彦1982
28	六反原遺跡	仙台市太白区大曾根字六反原	同上	1基			田中寅和1981

基が確認されている。松崎古墳では、赤色顔料が化学分析されており、その結果はベンガラであった(菊川和夫・荒井仁 1980)。

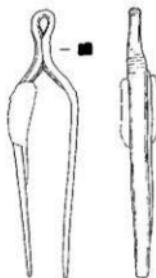
副葬品は、刀子1点と鉄製品6点である。鉄製品①は、形状から毛抜形鉄製品の頭部から頸部、馬具の引手の円環部、太刀の足金物の一部と思われ、そのうち最も可能性が高いのは毛抜形鉄製品である。毛抜形鉄製品は、二股鉄器、鏃子、攝子などとも呼ばれており、厚さ0.1~0.5cm、幅0.5~1.0cm、長さ12~20cmほどの断面が長方形を呈する鉄板あるいは銅板を、中央から折り曲げて作られたものである。折り曲げる部分は強く曲げずに環状のつまみ部分を形成する。正面は、音叉に似たU字形を呈し、両先端部が合わせられて、その肩部の間隙が最大幅を持つような倒卵形をとるものが多い。側面は、先端部が最も幅広の略撥形となるものが多いという。この毛抜形鉄製品の用途は、腰佩具として腰帯から垂下する刀子の下鞘に付ける金具であると考えられている(渡辺康弘 1986)。

毛抜形鉄製品は、吉田和彦氏によれば北海道から九州まで182箇所で出土例があり、その時代は弥生時代中期後半から10世紀と幅が広い。出土遺構は、横穴式石室・箱式石棺・木棺・横穴墓・住居跡・掘立柱建物跡などから見つかっており、吉田氏も刀剣や刀子と毛抜形鉄製品が錯着して出土した例があることから、本質や革質の鞘に付随するものであると推定されている(吉田和彦 2001)。

宇野慎敏氏は、毛抜形鉄製品をIV型式5種に分類しており、鉄製品①はその分類のII a式の頭部から頸部に類似する。宇野氏は、II a式の年代を5世紀中頃から7世紀末もしくは8世紀前半としている(宇野慎敏 1985)。その他の鉄製品も、刀子の周囲から出土しているため、毛抜形鉄製品の破片である可能性があり、鉄製品④~⑥は脚部、鉄製品③は先端部、鉄製品②は頭部に連結する吊金具の一部と推測されるが、破片のため断定はできない。県内では、仙台市善応寺横穴墓群23号墓からII a式の頭部から頸部の破片が出土している(田中寅和 1987)。近県で、II a式の完形品が出土しているのは、福島県西白河郡矢吹町の七軒横穴墓群2号墓である(福島雅儀 1983)。

箱式石棺は、古墳時代を通じて造られ、刀子も古代全般、II a 式毛抜形鉄製品も 5 世紀中頃から 8 世紀前半のものとされているので、それらから小沢口古墳の年代を特定することはできない。県内の箱式石棺のうち、土師器が出土している古墳は非常に少ないが、台町古墳群から僅かに土師器が出土しており、1 号墳の 5 号石棺内から住社式の坏が 1 点出土している（志間泰治 1954）。住社式は、一般的に 6 世紀の中葉から後葉の年代が考えられている。また、同古墳群 119 号墳からは、箱式石棺のすぐ横から坏が 1 点出土している。これは、内面が黒色処理された有段・有稜の丸底坏である（志間泰治 1955）。この器形は、村田晃一氏が分類された 2 B 群土器に相当するもので、6 世紀後半と考えられている（村田晃一 1995）。台町古墳群 1 号墳と 119 号墳の年代を、小沢口古墳の年代に当てはめれば、6 世紀の中頃から後半ということになるが、決定的な年代の根拠となる遺物が出土していないので、ここでは 6 世紀代の築造と推測しておく。

最後になったが、本報告を作成する上で次の方々にご協力を頂いた、記して感謝するものである。
柳澤和明・須田良平・及川 規・田中則和・木村浩二・太田昭夫・工藤哲司・長島榮一・渡邊香織



第10図 七軒横穴墓群の毛抜形鉄製品
(福島雅儀 1983より、2:1)

引用・参考文献

- 阿部 恵・須田良平・岩見和恭 1991『新峯崎遺跡』村田町文化財調査報告書第 9 収集
伊東信雄 1967「鹿の巣古墳群」宮城県文化財調査報告書第 12 収集 pp.17~61
薄木源鶴 1953『沼辺村史』
宇野慎敏 1985「羅子考」「末永先生米寿記念顕呈論文集・乾」pp.505~522 末永先生米寿記念会
角田市史編さん委員会 1984『角田市史第 1 卷』通史編(上)
荒川和夫・荒井 仁 1980『古崎古墳調査及び移設工事報告書』角田市文化財調査報告書第 4 収集
森田信治 1975『伊丹古墳調査報告書』白石市文化財調査報告書第 10 収集
佐々木安彦 1982『坂下古墳』村田町文化財調査報告書第 3 収集
佐々木安彦・芳賀幸寿・黒石伸一郎 1995『上野山古墳群分布調査報告書』柴田町・村田町・大河原町共同推進事業協議会
志間泰治 1954『宮城県伊具郡金山町台町古墳群調査概報』『歴史』第 7 収集 pp.43~53 東北史学会
志間泰治 1955『宮城県伊具郡丸森町金石山町台町古墳群調査概報』第 2 収集
志間泰治 1959「角田市幡古坂古墳」『考古学雑誌』45~3 pp.27~42 日本考古学会
志間泰治・佐藤庄吉 1959「盛王町明神裏古墳調査報告書」『仙台郷土研究』19~4 pp.25~27 仙台郷土研究会
志間泰治 1961「宮城県伊具郡丸森町金石山町台町古墳群調査概報第 3 収集」『東北考古学』第 2 収集 pp.28~40 東北考古学会
志間泰治 1967『松崎古墳』宮城県文化財調査報告書第 12 収集 pp.62~73
志間泰治 1972『鳴尾古墳群発掘調査概報』白石市文化財調査報告書第 12 収集
志間泰治 1976『寺後古墳群調査報告書』柴田町文化財報告書第 8 収集 pp.27~545
白石市史編さん委員会 1976『白石市史別卷』考古資料編
千塚山古墳測量調査団 1992『千塚山古墳測量調査報告書』村田町文化財調査報告書第 11 収集
田中則和 1981「六反田道跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第 34 収集
田中則和 1987「善光寺横穴墓群・法華塚古墳出土鉄・銅製品整理報告」『仙台市博物館研究報告』第 7 収集 pp.1~22 仙台市博物館
福島雅儀 1983「七軒横穴剣」福島県西白河郡久慈町刊行会
藤沢 敦 2000「阿武隈川下流域の前方後円墳（その 1）」『宮城考古学』第 2 収集 pp.25~44 宮城県考古学会
藤沢 敦・菊地芳男 2002「村田町中山横穴墓群の出土遺物」『宮城考古学』第 4 収集 pp.127~136 宮城県考古学会
藤沢 敦 2003「村田町元岸古墳の測量調査」『宮城考古学』第 5 収集 pp.221~228 宮城県考古学会
宮城県教育委員会 1978「古墳（測量調査）」宮城県文化財調査報告書第 53 収集 pp.218~237
村田晃一 1995「宮城県における 6・7 世紀の土器様相」『東国土器研究』第 4 収集 pp.1~13 東国土器研究会
村田町史編纂委員会 1977「村田町史」
吉田和彦 2001「『毛抜形鉄器』の機能・用途認定に向けての基礎的研究（1）」『史學論叢』第 31 収集 pp.30~53 別府大学史学研究会
渡辺康弘 1986「古代刀子の蔵について」『史觀』第 115 収集 pp.34~46 早稲田大学史学研究会



写真1. 小沢口古墳遠景
(西から)



写真2. 発見時の状況
(西南から)



写真3. 発見時の状況
(西から)



写真 4. 箱式石棺全景
(西から)



写真 5. 箱式石棺全景
(西北から)



写真 6. 箱式石棺底面
(北から)



写真7. 箱式石棺東壁
(西から)

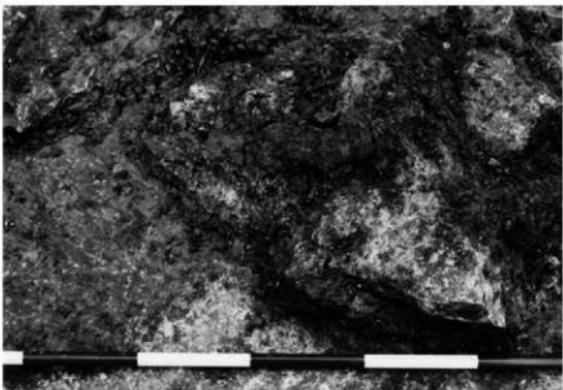


写真8. 副葬品出土状況
(北から)



写真9. 掘り方完掘状況
(西から)



写真10. 蓋石



写真11. 調査風景



1. 刀子
2. 鉄製品①
3. 同X線写真
4. 鉄製品②
5. 鉄製品③
6. 鉄製品④
7. 鉄製品⑤
8. 鉄製品⑥

写真12. 副葬品（原寸）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	はやかぜいせき ほか					
書名	早風遺跡 ほか					
副書名						
巻次						
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書					
シリーズ番号	第213集					
編著者名	佐藤則之 佐久間光平 菊地逸夫 柳澤和明 須田良平 生田和宏 石黒伸一郎					
編集機関	宮城県教育委員会					
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL 022-211-3685					
発行年月日	西暦2007年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 通路番号	世界測地系 北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
早風遺跡	加美郡加美町 鳥屋ヶ崎字山畠中	044458 30036	38度 35分 53秒	140度 48分 30秒	2006.05.15 ~06.13	64m ² 重要遺跡確認
田川八幡館跡	加美郡加美町 糸泉字屋敷	044458 30122	38度 35分 23秒	140度 49分 59秒	2006.11.27 ~12.07	30m ² 重要遺跡確認
上野目焼窯跡	大崎市岩出山 上野目字赤浜	042153 35119	38度 40分 11秒	140度 53分 00秒	2005.12.20	25m ² 下水管埋設
雄鳥遺跡	宮城郡松島町宇島	044016 17101	38度 21分 52秒	141度 3分 46秒	2005.12.19 ~12.21	13m ² 災害復旧
袖野田遺跡	塙畠町袖野田	042030 11074	38度 18分 19秒	141度 00分 08秒	2006.06.06 ~06.12	41m ² 共同住宅建設・道路整備
三ヶ森遺跡	黒川郡富谷町 志戸田字三ヶ森	044237 25043	38度 25分 39秒	140度 53分 35秒	2006.05.16 ~05.17	80m ² 個人住宅改築
町頭塚	本吉郡本吉町 馬籠字町頭	046035 62049	38度 46分 27秒	141度 26分 18秒	2006.10.31 ~11.01	4 m ² 遺跡復旧
丸森山遺跡	登米市東和町 織字馬口崖	042129 53021	38度 44分 23秒	141度 17分 12秒	2006.03.14 ~03.15	9 m ² 鶴舎建設
小沢口古墳	柴田郡村田町大字 沼辺字東小沼二	043222 07184	38度 5分 15秒	140度 44分 30秒	2006.07.18 ~07.20	7 m ² 自然崩壊
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
早風遺跡	散布地 官衙	縄文 古代	土墨跡・堀跡	縄文土器・石器 土師器・須恵器	東山官衙遺跡の外郭区画施設の確認	
田川八幡館跡	散布地 城館	縄文・弥生 中世	土墨跡・堀跡	縄文・弥生土器、 石器		
上野目焼窯跡	窯跡	江戸・明治		陶器・窯道具		
雄鳥遺跡	板碑群	中世	納骨跡	中世陶器・青白磁、 五輪塔・板碑・錢貨	12世紀の延福寺期に遡る 納骨跡の確認	
袖野田遺跡	散布地	奈良・平安	掘立柱建物跡	土師器・須恵器 須恵器・土器		
三ヶ森遺跡	散布地 集落跡	奈良・平安 中世・近世	掘立柱建物跡 土壙・溝跡	土師器・須恵器	官衙関連遺跡か	
町頭塚	塚	中世・近世	塚	経筒	16世紀後半の経筒3口が塚 頂部の石碑基部から出土	
丸森山遺跡	散布地	縄文中・後	包含層	縄文土器・石器		
小沢口古墳	古墳	古墳	箱式石棺	刀子		

宮城県文化財調査報告書第213集

早風遺跡 ほか

平成19年3月18日印刷

平成19年3月23日発行

発行 宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印刷 株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24-24

宮城県文化財調査報告書第213集

早風遺跡 ほか

早
風
遺
跡
ほ
か

平成十九年三月

平成19年3月

宮城県教育委員会

宮城県教育委員会